

九月十一日旺子村附近の戦場に於ては森隊第三小隊第二分隊員として旺子村部落に據る敵を攻撃するため午前九時四十分前進を開始し同部落に通ずる道路に沿ひ前進申午前十時十五分前方村落家屋の銃眼より猛射する敵を發見し分隊長は直に之を掃滅せんとして一同勇敢に此敵に肉薄し同家屋前敷米に達し將に突入敵を蹂躪せんとした處敵の一弾は氏の右肩部を貫通し遺憾にも其場に壯烈なる戦死を遂げた。然かし本戦場に於ける氏等の勇敢猛烈なる突撃により敵は狼狽家屋内より脱出を開始し我に小隊突撃の動機を作り午前十時四十分旺子村は遂に我軍の占領する所と成つたので氏の功績は實に拔群偉大である氏は往年滿洲に於て同國の建設に寄與し今又聖戦に加はり遂に河北の華と散り大陸に偉大なる足蹟を遺し以て東洋永遠の平和を招來するに渾身の努力を盡した。嗣つて氏の一生を顧みる時勲論の精神を躬行實踐し國民として殊に武人として眞に鑑とするに餘りある者である。

氏は戦死の日騎兵伍長に任ぜられ次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 岩間 水行

氏は茨城縣久慈郡久米村大字久米の人にして父を龜之介母をあさと云ひ大正二年七月九日生れで未だ獨身であつた。性質温良にて誰人にも愛敬される徳を備へて居た。氏戦死の公報家郷に到達するや村民舉て之を哀悼し當時此村を訪ふものは氏の家族よりも寧ろ氏の村民に泣かされたと言ふほどである。氏又事に當りて熱心現役滿期除隊の後四年に亘り日立製作所に就職して母に孝養を盡し弟妹三名を扶持養育し隣人の嘆賞するところとなつた。氏は昭和四年三月幸久尋常高等小學校高等科を卒業し昭和六年一月現役志願として歩兵第二聯隊へ入營し間もなく滿洲事變のため渡滿各地に轉戦して功績

勲からず爲めに勳八等に叙せられ且從軍記章並に滿洲國建國功勞章を授與せられて昭和八年歩兵上等兵を以て滿期除隊となつたが除隊に方り善行證書並に下士適任證書を附與せられた。



昭和十二年八月支那事變のため召集を受け石黒部隊に屬して同月二十七日勇躍征途に就いた。斯くて同年九月十四日永定河々畔北相各莊附近の戦場に際し氏は第一線小隊第一分隊の一員として勇敢に敵を攻撃して其の第一線陣地を奪取し敗走する敵を尾撃しつゝ北相各莊に進出したるに敵はこの地に堅固なる陣地を構築して地形を強化すると共に輕重の各種關銃等を配置し射撃の準備を完成して防備頗る嚴重であつた。小隊は直に此敵に向けて攻撃し漸次に敵の翼を包圍せんとしたが敵は猛火を注ぎて小隊の行動を妨害し小隊の包圍的行動意の如くならずこの時氏は敵彈の雨飛する中を物ともせず敵を射撃しつゝ前進したが正面よりの攻撃のみにては成功困難なることを看破し分隊長に進言して分隊長と共に敵の背後に進出し同方面に於ける敵の前進部隊を驅逐し次で敵の本陣地たる部落の側面に向て突撃を敢行した。この際隊の最先頭に立ちて猛進する氏の姿は正に鬼神の如く爲めに分隊の志氣大に昂り一齊に掲げたる喊聲は地を動さんばかりにて猛然敵中に突入の刹那敵の一弾は氏に命中し遂に壯烈なる戦死を遂げた。然れども勇敢無比なる氏最後の動作は克くその全分隊を驅つて敵中に投じたるの概あり以て一般の範となすに足るものありこれがため中隊の突撃は間もなく成功を見るに至つた。以上の武勳は赫々として千古に輝き永く竹帛に垂るべきである。氏は即日歩兵伍長に任ぜられ次で功七級金鷄勳章並に



勳七等青色桐葉章を賜はつた。

氏や家庭に在りては孝悌一郷の模範となり軍に従ひては忠勇武烈鬼神を泣かしめ茲に尊き一生の幕を閉ぢたが氏が英靈は尙も照々として活躍して皇國を護り又遺族の多幸の爲尊き光と力を授け與へてくれるであらう。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 林 武雄

氏は岡山縣吉備郡阿曾村の人にして亡父を豊太郎母を絹と云ひ大正三年二月十一日生れで未だ獨身であつた。資性正順にして快活母に仕へて極めて孝心深かつた。昭和三年三月阿曾小學校高等科卒業直に大阪市立北第二青年訓練所へ入所昭和十年三月同所を卒業在所間精勤賞を受くること五回模範生徒賞を受くる事二回以て其人となりを概知する事が出来る。氏は斯くて夙に商事に志し精勵格勳將來を囑目されて居た。

昭和十年六月歩兵第七十八聯隊へ入營翌十一年十二月下士官適任證書及善行證書を附與せられ歸休除隊となつた。在營間學術科諸勤務の成績優秀にして小銃第二種徽章同特別徽章其他の名譽賞状を授けられた。歸郷後は大阪瀧川分會評議員並瀧川商業青年學校の指導員に擧げられそれ等の業務に關し熱心事に従ひ貢獻せる所甚だ多かつた。

やがて支那事變勃發するや森本部隊に應召し北支戰線に赴いた。昭和十二年九月十五日十六日に於ける賣店嶺附近の陣地攻撃に於ては佐伯大尉の指揮に屬し第一線たる第一小隊第四分隊員として參加した。氏は十六日午前九時敵前七百米に建せる時當面の敵情地形を偵察する目的を以て種池軍曹を斥候長とする一組の斥候に加入派遣を命ぜられたが其斥候員に選拔せられしを先聲とし勇躍して敵前五十米に進出し剛膽機敏而かも綿密なる偵察を遂げ斥候長を輔佐し午前十時十分最

も重要な報告を提出した。爾後中隊主力と共に第一線に在りて勇戦奮闘し午後二時卅分愈々突撃に方りては率先敵陣地に突入し敵兵三名を刺殺し頭敵を擊破し大勝を得た。其後敵を急追して易縣を攻略し續いて所屬大隊は抱揚山の戰鬪に參加した。時は九月の廿三日明け方數日來の難行軍に將兵綿の如く疲勞して居つた。敵の射注ぐ彈丸は急霰驟雨の如き有様に將兵皆勇み立ち所屬中隊は第一線となり氏は其左第一線小隊に加つて些かの地形地物を利用しつゝ歩一步敵前に近接し



た。敵の重機關銃は益々猛威を振つて來た。されど氏は勇猛果敢一意敵線に迫りつつあつたが残念！中隊長殿やられましたと叫んだのは氏であつた。見れば胸部貫通の銃創で戰友は直に手當を施し上官はしつかりせと勵ましたが哀れや 陛下の萬歳も聲細く遂に華北戰線の華と散つた。あゝ當日友軍の前進地域は一望千里の感を呈する畑地であつた。一進一止射撃を以て敵に損害を與へつゝ漸く辿りついた山脚で氏は倒された。疲れ切つた身體で敵の猛火力を浴びつゝ尙も攻撃精神を失はぬ氏の心根こそ尊いものであつた。而して此世の別れに 陛下の萬歳を奉唱する其魂魄こそ涙であつた。氏を失へる將兵の悲憤はやがて敵兵全滅を期して突入し刺殺に次ぐに撲殺を以てし敵屍體は累々として山を掩ふに至つた。時に午後一時卅分全く敵陣地を占領し感慨無量の裡に日章旗を翻へした。

噫、氏や大いなる手柄話を土産に亡父の靈に逢ふことが出来やう又生母に對しては御靈として其將來を十分に加護し大いなる孝養を盡し得るであらう。而して其軍功は皇軍戰史を飾り芳名は後世に語り傳へて大和櫻と謳はれるであらう。



氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷲勳章を賜はつた。

### 陸軍衛生兵伍長勳八等功七級 橋本芳高

氏は兵庫縣養父郡大藏村の人にして父を信太郎母をかねと云ひ大正三年六月七日生れで未だ獨身であつた。性質實剛健にして古武士の風格あり事に當るや目的を達せずば息まざるの氣概があつた。孝心極めて厚く且露役の勇士たりし病父を勞はり母及祖母を大切に又實弟勝雄を慈しむ等孝悌共に衆の模範であつた。此實弟も高橋部隊に屬し中支方面に出征しありて光榮の家門である。昭和四年三月大藏小學校高等科を卒業し直に村立農業公民學校に入學昭和七年三月同校卒業更に同校研究科に入學昭和九年三月卒業村内有爲の青年として將來を矚目された。

昭和十年一月病院附看護兵要員として鳥取歩兵聯隊へ入營同年十二月上等看護兵に進級翌十一年五月精勤章附與同年七月善行證書を附與せられ歸休除隊した。歸郷後は郷里高田青年團の班長となり朝夕青年の統制訓練に従事し同團の發展上大に貢獻する所があつた。

支那事變勃發するや長野部隊に應召し勇躍征途に就いた。斯くて八月中旬北支戰線に到着昭和十二年九月九日より同月十二日に亘る馬廠附近の戰鬪に於ては敵擊準備の爲急進中疲勞困憊して路上に倒れる者傷病を押して前進し遂に力及ばず倒れある者等に對し懇ろに看病手当を施し以て戦力の維持に貢獻し十日馬廠陣地に對する攻撃を開始せらるゝや敵の至猛なる火力を冒し丈餘の高梁畑を滑りぬけ濁水泥濘を涉りて勇躍第一線に進出し友軍の戦死傷者を収集し自ら其數名を背負ひ安全地帯に運搬して手当を施す等其機敏熱誠は將兵一同の感謝感激の的となつた。

九月十三日より同月二十六日に亘る濱縣附近の戰鬪に於ては第九中隊長岡本大尉の指揮班員として參加したが所屬中隊は二十日午前四時半行動を起し翌二十一日午後五時戰鬪を開始し二十三日午後三時四十分陣地を突破し姚官屯驛を奪取した。二十一日夜人合庄の攻撃間所屬中隊は大隊豫備隊たりしも其第三小隊第二分隊は速射砲掩護の任務を以て最前線に進出して居つた。其分隊員が負傷と聞くや氏は暗夜熾烈なる銃砲を冒し單身之に赴き迅速機敏に手当を施したるのみならず



隣接第十中隊に負傷者續出看護不十分なるを知り敢然銃砲火の下に應援看護に赴き衛生業務を遺憾なからしめた。二十三日所屬中隊が姚官屯驛附近の戰鬪に参加するや優勢なる敵は我軍の三方面を包圍し猛火を浴びせ來りし爲友軍の死傷者續出した。氏は勇敢にも東奔西走傷者の手当看護に全力を傾注して居つたが不幸にして腹部貫通の重傷を受けた。然れども不屈不撓の氏は身の重傷を顧みず更に負傷者の看護に邁進せんとする利那再び足部貫通の銃創を受け遂に立つ能はず興濟鎮第二野戰病院に收容せられたが衛生部員に對しお世話になりますと挨拶した。部員等は感謝の涙を以て氏を迎へ之を激勵し手厚き看護を加へたが次第に衰弱せるを自覺せる氏は苦しき息にて 天皇陛下萬歳と唱へ遂に華北戰線の花と散つた。氏が受傷せる際駈付けたる戰友安達勇の通信に依れば「自分は内出血多いから迎も助らぬ遺書は中隊に預けてある自分此處で死んでも君を護つてやる君は中隊の中堅となつて大に御國の爲に奮闘し幸に無事凱旋したら此場の實況を詳しく我家の者へ傳へて呉れ中隊長殿！ 中隊の武運長久を祈り自分は中隊の守神になりますと聲も次第に細り行くのであつ



た」と書き誌してある。噫瀕死の重傷者が之れ丈述べ盡すは蓋し容易ではない體力氣力修養共に絶倫の士ならざる限り断じて不可能な事である。氏の忠勇武烈は蓋し家庭に育まれ軍隊教育に長成され而して聖戦の諸體驗に玉成されたのであらう。麗はしき哉此魂尊き哉此犠牲氏や皇軍衛生兵の精華たるのみならず一般軍人の勳鑑であつた。氏が戦友に述べたる如く肉體は没しても其英靈は依然として永世に生き皇軍の武運を加護し又遺族の多幸を擁護するや必然であらう。氏が芳名は皇軍戦史に半記千載に語り傳へられ皇國軍民をして清き涙を捧げしむるであらう。

氏は即日衛生兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鶏勳章を賜はつた。

### 陸軍衛生兵伍長勳七等功七級 濱本 茂雄

氏は鳥取縣岩美郡福部村の人にして大正三年一月十六日生である。亡父を長太郎母をとらと云ひ妻嘉津江との間に一子政義がある。性質温順にして品行方正模範青年として風評良好であつた。昭和四年三月服部小學校高等科を卒業昭和八年現役兵志願に合格し翌九年一月鳥取歩兵聯隊へ入營衛生兵として教育を受け滿洲事變に出征し勳八等瑞寶章並に滿洲國建國功勞章及従軍記章を賜はり昭和十年十一月歸休除隊を命ぜられた。

斯くて支那事變勃發するや長野部隊へ召集せられ勇躍北支戦線に赴いた。戰場到着以來各地に於て不眠不休の努力を以て傷病者の收容看護に任じ衛生業務に寄與する所甚だ大であつたが昭和十二年九月十三日より同月二十二日に亘る滄縣附近の戦闘に於ては中村中尉の指揮下に屬し所屬中隊は二十一日午後四時卅分行動を起し同日午後九時戦闘を開始し翌二十一日午前十時入合庄東北陣地を奪取した。所屬中隊が前記陣地に對し攻撃を開始するや敵の猛射を受け死傷續出するに

至つたが氏は敵彈雨の裡勇敢機敏に東奔西走し専念重傷者に應急手當を施し奮闘した。翌二十二日拂曉更に攻撃前進を起したが敵の側防火器の猛射に依り所屬中隊は苦戦に陥り死傷者續出而かも中隊は大隊主力と遠く離隔し擔架も來らず軍醫も主力方面の業務多忙を極めし爲來援不可能の状態であつた。氏は其間に於て精魂を盡して中隊患者の手當に従事した。受傷の戦友は尙闘志滿々たるものではあつたらうが又氏の手厚き看護に對しては無限の感謝を捧げたのであらう。偶



々負傷者を背負ひて後退中杉本伍長負傷と聞くや上官を思ふ觀念に厚き氏は背負へる傷者を安全なる堆土脇に置き息をも繼がず杉本伍長の許に駈寄り應急處置をなし重傷の痛手に苦む伍長に向ひ「大丈夫」と連呼して之を勵まし戦友等が諫止せるにも拘らず後送を急ぎ之を背負ひて後退した。時恰も敵彈の飛來益々熾烈を加へ地上の何物をも掃射せずには置かね慘烈なる状態であつた。嗚呼生き乍ら神の如き氏に無事なれと祈つた戦友等の切望も空しく哀れや敵彈は氏の左胸部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げた。果然中隊全員の感謝と同情は氏の冷き屍の上に注がれた同時に悲憤敵兵殲滅の敵愾心は

油然として中隊に瀝り難戦苦闘の後赫々たる戦勝を獲得するに至つた。氏や忠勇義烈の進む處阿鼻叫喚の修羅場も聊かも躊躇逡巡を許さなかつた。責任の伴ふ所親切に諫止して呉れた戦友の言葉にさへ耳を藉さなかつた。噫鬼神をも取弄ぐ戦闘兵士の勇敢に比し何處に遜色を發見し得るであらうか眞に是れ皇軍衛生兵の精華であり又一般軍人の勳鑑たるべきものである。今や聖戦の犠牲となり其人を見る能はずと雖も梅は姿が見え



ずとも飄邈たる芳香は峯又谷に流れ来るが如く氏の芳名は千載の下に薫るであらう。氏の功績は皇軍衛生史に煥然として光を放つであらう。而して其英靈や皇國の爲又愛する遺族の爲に絶間なく加護を垂れる事であらう。

氏は即日衛生伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 西山 茂

氏は兵庫縣加東郡米田村下久米の人にして父を恒夫母をせんと云ひ大正三年七月六日を以て生れ未だ獨身であつた。性質温良にして眞摯虚を棄て實に即くを主義とし事に當つて熱心衆議の模範として賞讃されて居た。昭和四年米田尋常高等小學校高等科を卒業次で米田青年訓練所に入り同八年退所し小學校卒業後は家にありて農業に従事傍ら讀書習字の勉學に意を用ひ又其身の修養を怠らなかつた。昭和八年一月現役志願をして姫路歩兵聯隊に入營し滿洲に派遣せられ警備に服して勤勉其任を全うし功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり同年十一月歩兵上等兵に進み除隊となり爾來兵庫縣蘆屋に於て木炭商を經營してゐた。

昭和十二年八月今次事變の爲め應召沼田部隊安武隊に屬し北支方面に出征其動員輸送中間は上官の指示に従ひ或は至嚴なる警戒に或は泥濘膝を没する惡路を行軍しあらゆる困難を排除して其任務を全うした。次で八月二十一日より翌二十二日に亘る津浦沿線潮宗橋の攻撃に方りては安武部隊右第一線小隊第二分隊に屬し所屬隊は二十一日午前七時行動を起し午後二時三十分より戦闘を開始した。此時氏は敵陣地直前の河川偵察の命令を受け午後三時十五分斥候長として前進し河川の状況水深及小隊進出路地點等を詳細偵察して歸來報告し後小隊が攻撃前進に方りては自ら小隊の先頭に立て誘導し其

途中敵機關銃の位置を小隊長に指示せる刹那敵彈飛來右胸部に貫通銃創を受け益に壯烈なる戦死を遂げた。氏が偵察せる貴重なる報告はやがて第二小隊の進出を容易ならしめ又中隊全般の戦捷の素因となつた。



敵と近く交戦中敵前の河川偵察に任ずる如きは既に決死的の行動である。氏は欣然任に就き積極的に任務を遂行し貴重なる報告を齎らした。蓋し剛膽熱心赤誠の進る士にして初めて得らるべき成果である。而して自ら小隊を誘導し敵機關銃の位置を現地に於て指示せるは爾後に於ける小隊戦闘に至大なる影響を與へたものである。觀じ來れば氏の功績たるや赫々たる武勳であつた。所屬小隊將兵の感激は云はずもがな其尊き犠牲的精神は一般軍人の範鑑たるべきものである。嗚呼氏や郷に在りては模範青年と推賞せられ軍に従ひては忠勇武烈皇軍戦勝の礎石となつた。正に尊き生涯であり更に更に護國の神

となり大なる生命に生くる事が出来た。氏は正に忠節を全うしたと共に親先祖に對し大孝を申べ得たものであり其名は清く芳はしく千古に傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵伍長に任ぜられ次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。







任じ功により勳八等白色桐葉章従軍記章及滿洲國建國功勞章を授與せられ昭和八年滿期除隊となつた。

昭和十二年支那事變のため八月二日應召續いて北支方面の征途に就き九月十三日より同二十四日に亘る滄縣附近に於ける戰闘には第二小隊輕機關銃分隊射手として克く分隊長の意圖の如く勇猛果敢に奮戦輕機關銃の威力を發揚し小隊の前進を容易ならしめ殊に所屬中隊が獨立家屋を占領すべき命を受くるや氏は猛烈且正確なる射撃を以て敵を制壓し以て中隊の

獨立家屋占領に多大なる貢獻を與へた。又敵が同所に掩土逆襲し來りし際氏は小銃射撃の威力を最大限に發揮して之を擊退し以て中隊をして獨立家屋の確保を全からしめ續いて二十四日午前四時敵の主陣地に突撃を敢行するに方つては敵の自動火器を制壓して中隊の突撃發起を誘促し次いで突撃に移るや率先猛烈果敢に陣地に前進したが不幸敵前十米に於て手榴彈のため大腿部に爆創を受け壯烈なる戦死を遂げた。



氏や郷に在りては郷黨の中堅となり克く在郷軍人並に青年の指導に任じ軍に従ひては優良なる輕機關銃手として其精銳を發揮し慧眼克く戰機を看破して重要目標を適時適切に壓倒殲滅し以て戰勝獲得の素因を作爲し又突撃に際しては勇猛果敢陣頭に起ち友軍の志氣を鼓舞し敵膽を震駭し常に赫々たる武動を奏したが滄州の一戦に玉碎せるは寔に痛惜に堪へぬ次第である。さり乍ら不朽の其功績は皇軍戰史に輝き天晴れ皇軍歩兵の精銳一般軍人の勳鑑であり其名は千古に芳ばしく其英靈や大天地に不滅に生き尙も皇國を護り又遺家族に限りなき加護を與へるであらう。特に二愛子の小さき胸には氏の魂を深くも刻み

是み必ずや祖先と共に又愛子と共に皇恩の下に團聚するを得るであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 細田 光次

氏は鳥取縣八頭郡大御門村大字大門の人にして父を留次郎母をつたと云ひ大正三年六月二十一日生れで獨身であつた。大正十年四月八頭郡殿尋常高等小學校へ入學昭和二年三月同校卒業引續き高等科へ入學同四年三月卒業し更に殿農業補習學校へ入學し同九年三月同校卒業其間大御門青年訓練所へも入所同十年一月同所を修了して居る。資性英明快活克く父母に仕へて孝養を盡し幼より學業を好み在學中常に成績優良操行端正にして一般の模範と仰がれ殊に尋常科卒業の際には池田侯爵より榮譽ある賞状を授けられた。長じて青年團の幹部となり青年を指導し或は部落の開發農村振興の理想實現に粉骨邁進した。昭和十年一月二十日現役兵として歩兵第四十聯隊に入營同十一年七月二十日歩兵上等兵に進められ下士官適任證書を附與されて歸休除隊となつた。

昭和十二年七月三十日事變に依り應召長野部隊第八中隊に屬して勇躍征途に就き北支に上陸するや直に惡路長途の行軍を行ひ戰線に到着した。而して同年九月十日馬廠附近の戰闘に於ては第一小隊擲彈筒分隊長として參加し大隊主力が丁莊に向ひ前進午前十一時三十分頃側方より敵の猛烈なる射撃を受くるや氏は命令に依り直に部下分隊を區處し猛烈にこの敵を攻撃し其の自動火器を制壓して中隊の戰闘を容易ならしむると共に大隊主力の前進に支障なからしめた。越へて二十一日滄縣附近の攻撃が開始されたが同地には敵が堅固なる陣地を構築し水濘を廻らし鐵條網を設け多くの火器を配備して





防備頗る嚴重であつた。氏は依然第一小隊擲彈筒分隊長として参加し午後六時攻撃は開始されたが此時無名部落の敵は我に猛射を浴せ頗る頑強であつた。氏は敵彈雨飛の中を克く部下を掌握して勇敢に敵を攻撃したるも日没となりし爲中隊は攻撃を一時中止し午後十一時三十分より其の主力を以て人合庄の敵第一線陣地向つて夜襲を敢行したのである。此時氏は率先陣頭に立ちて突入し數敵を刺殺した爲に敵は辟易して遂に潰走した。然るに同夜十二時及二十二日午前一時の二回に亘り敵は我を包圍して逆襲に轉じて來た。此時も氏は敵の猛射の中に在りて克く部下を激勵し迅速有効なる射撃を以て敵に多大の損害を與へ之を撃退し中隊をして同地の確保を容易ならしめた。越へて二十四日午前四時姚官屯附近の敵主陣地を攻撃するに當りては部下を督勵して迅速果敢に有効なる猛射を浴せ其の射撃威力を遺憾なく發揮して敵の自動火器を制壓し中隊のため突撃發進の動機を作爲し次で中隊と共に突入の後には敵の陣地内に於て縱横無盡に格闘したが此時不幸にして敵自動火器のため胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。本戦闘に於ける氏の勇敢なる行動は敵を震駭せしめて中隊戦勝の因をなし又人合庄の敵第一線陣地を確保して大隊の進出を容易ならしめた次第である。

因に滄縣附近の敵陣地は津浦線方面に於ける敵が最後の抵抗線と恃みしものにして其防禦設備に全力を注ぎしは勿論必死の抵抗を試みたのである。殊に氏の攻撃せる人合庄附近の敵陣の攻防の成果は彼我勝敗の分岐點ともなる價値を有して居た。されば氏の所屬大隊が萬死を賭して突撃を敢行せんとする眞夜中に時の所屬長官は態々激勵の電報を其大隊に送ら

れた。斯る重要方面に参加する氏が眼申物質的威力を超越し一死報國の赤心に燃えつゝ水深首に達する水濠を涉り鐵條網を超え彈雨の中に毅然として部下分隊を指揮し力戰奮闘遂に戦勝の端を開きは眞に偉大なる功績と謂ふべく而して不幸北支戦線の華と散りしは洵に痛惜に堪えない。併し氏の英靈は不滅に生き義勇奉公の鑑として末永く軍民の感謝と敬仰とを捧げらるゝであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 遠上東一

氏は茨城縣筑波郡眞瀨村の人にして父を隣遺亡母をふよといひ大正三年一月十五日生れで未だ獨身であつた。性質温良にして而かも事に臨み剛膽沈着率先難局に當る美風を有し模範青年として村内の推賞を受けて居た。昭和三年三月眞瀨小學校高等科を卒業し昭和十年一月現役兵として水戸歩兵聯隊へ入營同年十二月上等兵に進級翌十一年十一月歸休除隊となり退營に當り善行證書を附與せられた。斯くて同年十二月東京市深川區藤倉電線株式會社檢査工として入社した。

總て支那事變起るや氏は石黒部隊へ召集せられ勇躍征途に就き九月上旬北支戦線へ到着幾くなくして飯田中隊の中堅として上下の厚き信望を得た。九月十日以來中隊は永定河々岸直接監視部隊として胡家舖に位置し氏は中隊の直接警戒に任じ克く任務を遂行した。永定河は實に敵が第一線の堅陣と恃める防禦線にして河幅百米餘水勢亦急にして對岸一帶には近代戰の防備到らぬ隈もなく皇軍を半渡に撃滅すべく企圖して居た。されば我が上級指揮官としても如何なる方法を以て敵





前渡河を決行すべきやに苦慮して居つたのである。此時に當り飯田中隊は決死の斥候を以て對岸の敵狀並に河川の景況を偵察すべき命令に接した。そこで中隊長は日頃最も信頼の篤かりし第三小隊長宇部木准尉並に氏の二名を選抜して此大任を課したのであつた。時正に九月十一日の暗夜で兩勇士は欣然として命を奉じ出發した。兩氏は全くの裸體となり銃剣を提げ永定河の濁流に身を躍らし敵歩哨の間隙より敵陣地内に潜入して充分なる偵察を遂げた。此際氏は極めて大膽沈靜に行動し慧眼克く精到緻密に現地を踏査したが遂に敵に發見せられ附近陣地の守備兵より全火力を集中された、併し氏は神速機敏に河中を潜行して歸還し貴重なる報告を呈出するを得た。石黒部隊長は其忠勇武烈に感激し感涙抑へ難く隸下部隊全員に傳へて之を表彰した。

九月十四日は愈々總攻撃の日であつた。氏は所屬中隊の最先頭に立ち濁流に跳入り中隊を誘導し敵重機の猛射を物とせず急流を渡渉し將に敵岸に上陸せんとする一刹那敵彈飛來胸部に貫通銃創を受け無念の一語を残しどつと許りに地上に打倒れた。あゝ氏は死したるか否英魂此地に止まりて中隊と共に敵陣地に突入した。果然中隊長は氏の赤誠に應へんが爲何等の躊躇なく即時敵陣地に突入して頑敵を屠り全○團の一番乗りとして重要據點を占領之を確保し以て後續部隊の渡河動作を容易ならしめた。

氏や郷に在りては忠良なる臣民であり軍に従ひては忠誠勇武鬼神を哭かしむる偉勳を奏した。寔に是れ皇國軍民の龜鑑と謂ふべきである。惜いかな聖戰の初期に於て兇彈に墮れたが氏の功績は皇軍北支戰史に牢記せらるべく氏の芳名は千載

の下大和櫻と共に咲き匂ふであらう。而して氏の英靈は護國の神として又一家の守護神として永世に生き強き力と清き光とを授け與へる事であらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 奥田正年



氏は島根縣西伯郡幡郷村の人にして大正四年四月十八日生である。父を才次郎母をひでよと稱し妻花子との間には未だ愛子がなかつた。資性温厚篤實朴剛健にして武道を好み特に柔道は堪能であつた。昭和四年三月幡郷尋常高等小學校を卒業し島取縣立米子商蠶學校に入校し昭和九年三月同校蠶業科を卒業した。昭和十一年一月松江歩兵聯隊へ徴兵として入營し在營間射撃成績優秀に付前後三回に亘り賞状を授けられ又銃劍術の成績優秀に付前後二回に亘り賞状を與へられた。或る日外出の途上荷馬車が轉落し困難しあるを認むるや之を救護したる科にて聯隊長より表彰せられた。支那事變勃發するや氏は高澤部隊に編入せられ勇躍江南戰線へ出動した。昭和十二年十一月以降十二月八日まで氏の所屬隊は嘉興及南京

攻撃の目的を以て一意強行軍を實施したが所屬中隊は部隊主力と上陸地を異にし且所要人馬に不足しありしを以て難路泥



津の勞苦は一層甚しかつた。機銃及車輛は往々之を分解して搬送し時には臂力競曳を以て長途迅速なる行軍を実施し且粗悪なる給養なりし爲一般兵員の疲勞大なりしが氏は克く堅忍持久終始战友を鼓舞し常に兵器を愛護し難行軍を遂行した。十二月九日及翌十日に亘る南京附近の戦闘に於ては所屬中隊は當初左第一線部隊に配屬せられ行動中なりしが十日正午頃の命令に依り中隊は午後五時鐵心橋に於て豫備隊たるべき事を命ぜられた。依て中隊は南京西方約四軒に在る四顆松無名寺に集結すべく行動を起した。然るに其前進路は安徳門附近の既設陣地よりする敵砲兵の集中射撃を受け又附近の地形は急峻なる山地を形成し且幾多の障礙物を設置せられありしを以て部隊の通過は極めて危険且困難であつた。此時に當り氏は中隊長の傳令として幾度か身の危険を冒して任務に邁進し其都度任務を完了しつゝ前進中であつたが午後六時二十分頃不幸にして敵砲彈の全彈命中し壯烈極りなき戦死を遂げた。

右は極めて危険困難なる状況下に克く其本分を完うしたるもので氏の適切機敏なる行動に依り中隊は其行動容易となつた。氏の尊き犠牲を目撃せる战友等は無言の感激を以て弔意を表した。嗚夫れ人生は幽明兩界に生くとかや現世は縱令短くとも氏が職務の命ずる所水火尙辭せず唯々聖戰に参加して君國の爲清く身命を捧げ幾多战友の精神を清淨化せしめし英靈は萬古に生きて尙も皇軍を加護し其戦勝を祈り添へる事であらう。氏の功績は亦皇軍の江南戦史に牢記せられ幾春秋に亘り皇國軍民に感謝を捧げらるゝであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 奥田 秀雄



氏は埼玉縣北足立郡戸田村大字上戸田の人であつて父を祐次郎母をはる繼母をまつと云ひ大正四年六月五日の生である。資性濃厚誠實にして而かも積極進取の氣象あり諸事熱心であつた。昭和三年三月戸田尋常高等小學校を同年十一月戸田青年學校を卒業し同十一年一月十日現役兵として歩兵第三聯隊に入營同年五月渡滿、兆南、突泉縣及び齊齊哈爾附近の警備に任じた。同年七月支那事變勃發するや氏は小林部隊に屬し尾畑部隊長指揮の下に出動し八月一日より九日に亘る

間所屬部隊が臨時天津防衛司令官の直轄となり同地附近の警備に任じた際及び原部隊に復歸して天津の南關中學校内の兵團司令部並に馮淺部隊本部の警備に任じた際には何れも繁多なる警備、衛兵、巡察、掃蕩に勞苦と危険を顧みず常に率先して積極的に活動した。又八月十九日長城線附近の戦闘に於て氏は萩野部隊の第一線右分隊一番として戦闘に参加した。當日午後零時三十分頃部隊は「イサーロ一ホ」東南高地附近に於て約三百名の優勢なる敵に遭遇し不利の情況にありしにも拘らず氏は勇敢積極的に動作し常に機關銃手を誘導し機を失せず果敢に前進し且つ詳細に敵情を分隊長に報告し以て部隊の戦闘をして有利ならしめた。而して部隊愈々敵に近迫し敵前約二百米に達せし際は氏は右前方に敵の重機關銃の陣地進入中なるを認め機を逸せずこれを狙撃し敵の射手を噓し遂に敵機關銃は射撃を中止するに至つた。爾後氏は更に前方の敵を制壓し奮戦してゐたがこの時右側方の増加したる敵の重機關銃の側射のため午後三時五十分右前頭部及び左頭部に貫貫銃創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。



氏は昭和十一年七月十一日歩兵一等兵に十二月一日同上等兵に進み戦死の日特に歩兵伍長に任ぜられ功に依り功七級金鷄勳章並に勳八等白色桐葉章を賜つた。

氏は資性温厚にして誠實しかも事に臨んで勇猛果敢常に積極的に動作した。また武技に長じ銃剣術の競技には常に優秀なる成績を示してゐた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 表田治郎市

氏は兵庫縣揖保郡東栗栖村福栖の人にして父を熊吉母をきへと云ひ大正四年三月二十日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和四年三月東栗栖村尋常高等小學校高等科を卒業したが人となり品行方正志操堅確にして義務心篤く又言語明晰であつた。昭和十一年一月現役として姫路歩兵聯隊に入營し五月支那駐屯軍に編入せられ天津に駐屯すること一年有餘此間歩兵上等兵に進み劍術は其特技として衆に拔んで中隊長及び大隊長より表彰せらるゝこと三回に及んだ。昭和十二年七月七日支那事變勃發するや直に出動天津の警備に就き次で十一日通州に至り翌十二日午後七時三十分所屬青野小隊は砲兵の車輛及彈藥輸送掩護として菰岡砲兵中尉の指揮下に入り自動車にて通州出發豊台に向ひ前進した。此時氏は青野小隊第三番車輛に搭乗車長として歩兵十名砲兵五名を指揮し前進し十三日午前十一時三十分頃北平永定門南方約三百米馬村附近に達するや家屋及び高粱内に潜伏せる支那軍は突如我に向ひ集中射撃を開始した。此時氏は直に同車搭乗の兵員を以て車上より此敵を猛射し敵に多大の損害を與へ次で下車して勇戦奮闘遂に敵をして敗退するの已むなきに至らしめた。此間前方車輛及び小隊長との連絡絶へしかば氏は極力之が連絡に努め漸く小隊長の掌握下に入つた。然るに先頭車輛が馬村北方百米に

達するや敵は馬村の城門を閉鎖し豫め占領せる陣地より急激なる重輕機銃の射撃を開始した。菰岡指揮官は青野小隊に反轉を命じた。此の時氏は先頭の二車輛が熾烈なる敵重機銃火の爲め反轉困難と見るや部下兵員を鼓舞激勵し全力を擧げ



て射撃を敵に集中し其掩護に依り先頭車輛の反轉を容易ならしめたのみならず小隊主力の危急を救つた。然かし此時氏は城門よりする敵の狙撃を受け其兇弾は頭部を貫通し惜しくも遂に壯烈なる名譽の戦死をなすに至つた。氏や志操堅確加ふるに劍道に於て衆に抜んづるの特技を有す。宜なるかな其の非常に際し沈着度を失することなくかの砲兵車輛及彈藥の輸送掩護に當り突如敵襲に會し克く小隊長を輔佐して前後の連絡を保持し勇戦奮闘頑敵を辟易せしめ以て小隊を危地より脱せしめしや。悼しいかな終に狙撃の兇弾を受け壯烈馬村城頭の華と散りしこと。然れども其の豪膽機宜の所置は以て皇

軍の威武を發揚し爾後に於ける小隊の戦鬪を有利ならしむ誠に其功績拔群と謂ふべし。氏は戦死の日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 奥山保

氏は東京市深川區住吉町の人にして父を寅吉母をシマと云ひ大正四年三月二十三日に生れ未だ獨身であつた。昭和二年



三月砂町尋常高等小學校を卒業し爾後直に向島區寺島清水鐵工所に勤務してゐた。性質温順にして而かも豪膽昭和十一年一月現役兵として東京歩兵聯隊に入營同年五月滿洲駐劄として渡滿し七月一等兵に十二月上等兵に進級した。氏は軍事に熱心にして殊に研究心深く小銃托架を考案し翌十二年五月十七日には湯淺部隊長より「奥山上等兵の考案に基く針金製小銃托架は最も輕量簡便にして命中能率を著しく向上することを得師團に於ても實用に供することゝなれり其の構造簡易なりと雖著意適切にして有事に際し師團の戰闘威力増大に資すること大なりと認め茲に表彰す」との表彰狀を授與せられた。



昭和十二年七月支那事變の突發するや湯淺部隊に屬して出動し七月三十日より八月十六日に至る間天津附近の殘敵の掃蕩輸送勤務に服せしが此期間中武清附近及開平附近の掃蕩或は濁流鎮附近の戰闘に參與した。又八月十七日より二十一日に至る外長城線附近の戰闘には第三小隊小銃手として參加し二十日には「トーチカ」陣地を攻撃し翌二十一日には高判地點の堅固なる敵主陣地の攻撃に移り勇奮奮闘中遂に右腕に貫通銃創を受け野戰病院に入院の已むなきに至つた。病院に於ては治療の結果經過良好にして同月二十七日には退院原隊に復歸し張家口に至り九月五日迄殘敵の掃蕩及附近の警備に服した。而して九月六日には第一小隊第二分隊長として天鎮附近の攻撃に參與し軍旗護衛の任務を全ふし、超えて九月八日午前十時陽高城に攻撃開始せらるゝや分隊を提げて勇敢に前進し午後七時中隊突擊敢行と共に第一掃蕩班に屬し城壁に懸登機を失せず頑強に抵抗する敵と手榴彈戰を交へ遂に敵を撃退したが午後八時頃敵は逆襲し來り茲に再び手

榴彈戰を交へ之を撃退した。然るに敵は執拗にも午後十時頃迫撃砲及機關銃の猛射と共に再び逆襲し來るや前回の如く勇奮奮闘し敵に動搖の色あるを察知した氏は獨斷率先敵中に突入せんとした其時氏は敵手榴彈破片を右大腿部に受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

氏は義勇奉公の念に燃え一死常に鴻毛の輕きに見奮闘毫も怯まず既に其の出征の途に於て父君に認めたる書中に曰はく「渡滿以來一年有餘平凡に過ごしたが今回漸く報國の好機會を得此の書を最後として喜んで戦死します。死後は軍人の父として世人に笑はれざる様に老後餘生長らんことをお祈り致しつゝ死に着きます願子よ見なき後は祖父を頼むぞ親類に宜しく 天皇陛下萬歲」と、胸中確乎たる覺悟其一斑を窺ふに足る。果せるかな至難言語に絶する外長城線の戰闘に於て常に勇猛果敢頑敵の心膽を寒からしめ一死以て皇軍の威武を發揚し拔群の功を不朽に留めたのである。

噫、氏や忠勇皇國武人の範其英靈や永く護國の神座に鎮まり祐を東亞恒久の和平と遺族の前途の上に垂るるであらう。氏は即日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 小川 茂 男

氏は岡山縣阿哲郡石蟹郷村の人にして實母をひさよと云ひ明治四十五年五月二日生れで未だ獨身であつた。性温順にして世人の愛敬を受け而かも内心剛健にして確乎たる信念を持つて居た。大正十四年三月含翠尋常小學校を卒業後家庭に在りて農業を手傳ひ十七歳より石蟹村の青年團へ入團し入營に至つた。昭和七年徵兵として岡山歩兵第十聯隊へ入營し其後滿洲事變の爲渡航し匪賊討伐の功に依り勳八等に叙し白色桐葉章並に従軍記章を拜授し又滿洲國建國功勞章をも授與せら



れた。支那事變勃發するや昭和十二年八月五日を以て應召末永部隊第二中隊に編入せられ勇躍北支戦線に出征した。八月二十日乃至同二十三日の畢庄子徐庄子に於ける戦闘に於ては第一小隊第五分隊輕機分隊射手として勇戦奮闘し敵に多大なる損害を與へた。斯くて八月二十三日所屬中隊は午前八時より約二十四時間に亘り東邊庄附近の敵を攻撃し之を撃破したのであるが當時氏は第一線右輕機分隊に屬して奮戦し同夜敵約二百名の逆襲を受けたが彈丸雨飛の裡沈着機敏に敵を猛射



し之を四散せしめ又翌日の拂曉攻撃に際しては第一線に進出戦闘を繼續したが敵は既設陣地に據りチエツコ機關銃及迫撃砲を以て我軍を猛射した爲に友軍の死傷續出頗る困難となつた。此時氏は輕機を提げ分隊長と共に危険を顧みず所要の地點に躍進し突撃の動機を作爲し遂に所屬小隊が突撃に移るを機を失せず水濠を越え塹壕を飛び勇敢機敏なる行動に依り最も緊要なる地點を占據し敗退する敵に猛射を加へ多大なる損害を與へた。斯くて敵の第一陣地を完全に奪取するを得た。氏の功績や洵に偉大なりと謂ふべきである。所屬小隊は更に第二陣地に對し攻撃を續行せんと欲し敵陣地の偵察後將に

突撃を決行せんとする際氏も亦新射撃位置に躍進中敵の第二陣地より狙撃を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。  
噫、氏は戦機を看破し慧敏躍進するや電光の如く沈着正確なる射撃や技神に達し洵に是れ皇軍歩兵の眞價値を發揮し得たものである。而して其成果はやがて光榮ある部隊戦勝の礎となつた。  
氏は拔群なる武功に依り即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並は功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 小川 猪助

氏は島根縣大原郡日登村の人明治四十二年八月五日生れである。實父は郷原喜作實母は同カメノと稱し小川家の養子となり養父を權市養母をマツと云ひ妻マサノとの間に昇、和子の二愛子がある。氏は性頗る温和にして且正直又率先難局に當る氣概を持つて居た。在郷間警察官吏を勤めたが國民に接し常に親切を旨とし行路病者があれば我が家に連れ戻り醫師の診察を受けしめ自ら看護し歸國の際には旅費を惠んで歸らしむる等屢々隠れたる善行を施して居つたのである。

昭和二年三月島根縣立横田農學校を卒業し昭和五年一月徴兵として松江歩兵第六十三聯隊へ入營翌六年十一月歸隊除隊となつたが在隊間日夜軍務に精勵し常に優秀なる成績を挙げた。即ち銃劍術優秀に付賞狀射撃優秀に付賞狀並射撃徽章を授與せられ又除隊には善行證書を附與されて居る。

支那事變勃發するや間もなく召集せられ福榮部隊揚井隊に編入せられ勇躍征途に就いた。斯くて昭和十二年八月二十五日以津浦沿線の諸戦闘に参加する事となつた。

先づ氏の初陣たりし夏生の戦闘に於ては第一小隊輕機分隊の彈藥手として活躍した。  
九月五日所屬部隊は馬廠本陣地の一角たる燒寮盆の敵陣地を攻撃すべき任務を受領した。此陣地は第二十九軍第三十八師が必死の抵抗をなさんが爲數ヶ月前より構築せるもので延長概ね八里馬廠河の兩岸を利用して二線陣地を構成し其兵力は二萬と稱し實に津浦線に沿ふ要衝にして水濠を廻らし難攻不落を誇り守兵一千を下らなかつた。

所屬大隊は正午唐官屯驛に集合し直に攻撃を準備し第一中隊を右第一線に第二中隊を左第一線とし友軍砲兵の射撃の開始と共に午後三時攻撃前進に移つた。此時敵は馬廠河の堤防を決壊し氾濫を作り一齊に火蓋を切つて氏の所屬部隊に火力



を集中した。氏は右第一線中隊の右小隊輕機分隊彈藥手として参加し勇躍前進を續けた。泥濘は膝を没し増水は逐次深を増して胸に達し剩へ敵の猛火は刻一刻熾烈となり水面の彈着は宛ら急激の如き有様であつた。所屬中隊は一進一止或は高粱畑を匍匐し或は氾濫地帯を猛進し遂に敵前二百米に到達した。此時右前方約百五十米の堤防上に俄然敵機關銃現出し猛烈なる側防火を以て我前進を阻止した。友軍砲兵亦熾烈なる火力を以て敵陣地を猛射し茲に壯烈なる銃砲戦を展開され

た。此頃所屬小隊の彈藥も漸く缺乏を告げたが氏は敵彈雨飛の中を勇敢機敏に彈藥を搬送し該敵機關銃を壓倒するの素因を與へた。加之當小隊が特に連繫を保持すべき隣接小隊とは高粱の爲屢々連繫を失ふたが氏は勇躍之が連絡に任じ任務を全うして歸還の途小流を横切らんとする一刹那不幸にも右鎖骨下部に敵彈を受け壯烈なる戦死を遂げた。



氏の勇敢なる行動は友軍の志氣を鼓舞し又隣接小隊との連繫協同を恢復し以て所屬中隊に突撃の動機と中隊全威力發揚の爲偉大なる素因を與へた

噫、難攻不落と頼みし馬廠の堅陣は決して敵が誇張の言ではなかつた。敵は地の利を占めて近代戦の防備も周到に設備せられ居つた。我は展開する餘地さへ水浸となり泥濘靴底さへ土に剝脱される程の不利なる地形剩へ終始猛火に暴露する地域を前進しつゝ力攻したのである。正に物質的威力を壓倒して赫々たる戦勝を得たる所以のものは實に氏の如き尊き犠牲者の賜であつた。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はり餘愛遺族に及ぶ所以のもの蓋し謂なきにあらずである。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 大橋 定美

氏は鳥取縣岩美郡津ノ井村の人父は章一母はふよと稱し大正二年十月十二日生れで未だ獨身であつた。性温厚にして責任を重んじ勤勞を愛し率先躬行而かも謙抑を失はず衆皆氏の高風に感服して居た。

昭和六年三月鳥取縣立倉吉農學校を卒業翌七年四月鳥取縣實業補習學校教員養成所へ入所昭和八年三月同所を卒業し八頭郡若櫻小學校訓導を拜命補習學校助教諭を兼任した。同年十二月鳥取歩兵第四十聯隊へ徴兵として入營滿洲事變勃發するや北滿の地に轉戦し功を以て勳八等瑞寶章を賜はつた。十年五月歸休除隊となり同年六月より鳥取縣氣高郡寶木小學校教員を拜命した。八月には氣高郡美穂村青年學校助教諭を拜命し青年學校事務一切を擔當し綿密周到に處理し克く責任を全うした。氏は裕福なる家庭に育ちたるに拘らず常に勤勞を愛好し頗る職務に忠實にして毫も外見を街はず諸施設の改善及計畫指導に新工夫を凝らし率先垂範の實を擧げた。

氏は更に農會技術員と提携して生徒の家庭的實習や一般農家の指導に當り特に個人教育の重要性を認め生徒中農業に従事する長男のみを集めて其六會を組織し座談的に學理を研究し進んで村將來發展の方途を畫策し夜更ぐるを知らざる有様であつた。されば其黨化大に見るべきものありて着任日尙淺きに拘らず校内の信望を一身に集むるに至つた。偶々北支の風雲急を告げ來れるを以て愈々盡忠報國の好機を翹望して居たが昭和十二年八月二日遂に應召の日が到來した。氏は欣



喜雀躍兒童生徒に別れを告げ勇躍軍旗の下に走せ参じた。斯くて九月七日より九月十二日迄馬廠附近の戦闘に参加する事となつた。氏は第一中隊長西山大尉の隷下に屬し第二小隊第四分隊長として参加行動を起すや克く部下分隊を掌握し當初は聯隊豫備隊たりし大隊内にありて行動し九月十一日より同十二日の追撃戦闘に於ては聯隊重火器部隊の掩護に任じ泥濘出水共に膝を没する地區に行動し本期戦闘の目的達成に多大なる貢獻を與へた。



九月十三日より二十三日迄は滄縣附近の攻撃に参加した。所屬中隊は二十三日午前六時行動を起し午前六時三十分戦闘を開始し午後三時五十分姚官屯驛を占領した。當時氏は右第一線第二小隊第四分隊に屬し中央火線たりし姚官屯驛西側の敵輕機を攻撃すべき任務を受領した。二十二日北部人合庄東側の敵陣地攻撃に際しては第二小隊の中央火線分隊長として最も勇敢に部下分隊を指揮し敵の退路に迫り敗退せんとする敵に機を失せず疾風迅雷的の猛射に續いて果敢なる攻撃を反覆して此敵に多大なる損害を與へ以て完全に敵の退路を遮斷し小隊全勝の機會を作爲した。當時中隊は最前線に進出して居たので敵の熾烈なる猛射を浴びつゝ肉弾戰を交へ敵陣深く突入して第一陣地を奪取したもので決して月並の奮戰ではなかつた事を想起せねばならぬ。明くれば廿三日氏の所屬小隊は姚官屯附近の鐵條網を破壊して敵陣地に突入する事を企圖した。然るに敵の銃火は熾烈を極め前進意の如くならずして小隊長北垣少尉は第四分隊長たりし氏に重擲彈筒の射撃開始を命じた。氏は部下分隊を激勵し擲彈筒射撃を開始し自ら射撃觀測をなしつつ射撃修正を行ひ平均彈道を所望點に導い

た。氏の動作は實に沈着剛毅そのものであつた。遺憾なるかな午前八時四十五分敵前約百五十米の地點に於て頭部貫通の銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併し此適切有効なる射撃に依り敵に多大なる損害を與へ光輝ある戦勝の途を開き得たのである。本戦闘は所屬兵團戦闘正面に於ける最重要點で中隊長西山大尉を初めとし第一小隊長等の幹部相次で死傷せる苦戦であつた。

噫氏は郷に在りては一郷の中堅となり青少年の訓育指導軍に任じに隨ひては忠誠勇武軍人の龜鑑であつた。出所進退悉く聖旨を奉載し技に永世に光輝ある大生命を與へられた。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙せられ青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 大迫利男

氏は鹿兒島縣始良郡加治木町の人にして明治四十五年一月十日生れである。父は彌右衛門母はハルと云ふ。氏は克己心頗る旺盛率先躬行の努力家であつた。

大正十五年三月小學高等科を卒業後直に玩具店に奉公し昭和三年五月より加治木町の質店に奉公、昭和十二年七月以來は隼人町に於て獨立質店を開業せる其夜に召集令狀に接したのである。

氏は昭和七年十二月臺灣歩兵第一聯隊へ入營日夜軍務に精勵したが在隊間聯隊特別射撃に於て優秀章を受くる事二回又大中隊の銃劍術競技會に於て優秀章を受くる事各一回と云ふ優秀者であり歩兵上等兵に進級し善行證書をも附與されて居る。歸郷後は加治木村兵事會長より在營間の成績優秀に付表彰狀と錫器一個を贈與されて居る。爾來郷里在郷軍人分會の



副班長や青年學校の助教を囑託され郷土の爲大に盡力して居つた。

日支事變勃發するや勇躍應召し獨立機關銃隊に編入せられ直に出征の途に就いた。

斯くて九月十二日長辛店出發以來は山岳地帯に於て幾度かの輕戰を交へつゝ山西省舊關附近の戰鬪に参加する事になつた。氏の所屬隊は太原攻略戰に於て主として舊關附近に於ける攻撃部隊に配屬せられ優勢なる四圍の頑敵に對し勇戰奮闘

眞に歩兵戰鬪の骨幹となり偉勳を奏したのであつた。

昭和十二年十月十五日午前八時氏の所屬隊は舊關北方高地に進出し岩山の敵に對し猛射を加へた。氏は分隊長内村伍長の指揮下に七番銃手として參加したが敵は幾十倍かと覺しき優勢なる兵力を以て友軍を包圍し四周より我軍に銃砲火を集中し其凄惨の光景は筆紙に盡すべくもない。併し剛膽機敏なる氏は泰然自若彈藥運送に將た彈藥補充に自己の任務に邁進し常に分隊戰鬪を圓滑ならしめ翌十六日迄岩山高地の確保に協力した。



其後氏の所屬小隊は更に他部隊に分屬の命令を受けて下山し幾度

か敵の猛火を浴び乍ら所命地點たる三角山の東方約千メートルの無名高地に到着し其地守備隊長の謀下に入つた。此高地も確保の必要を認められ午前一時半頃より同三時頃迄急速に陣地を構築する事になつたが氏は聊かも疲勞の色なく最も熱心に作業に従事した。陣地完成後氏は銃前哨や或は側方警戒兵として服務した。下弦の月も西山に低き山上は風冷やかにして銃聲も無氣味な空氣の漂ふ十七日の午前四時頃陣地北方斜面に幽かなる人聲懐中電燈の洩れ光るを目撃しすも敵襲と叫ん

で戰鬪準備に就かしめ肉薄中の敵部隊を猛射する事約三十分幸に之を撃退するを得た。當時氏は銃後方の警戒兵として服務中であつたが目敏くも數名の人影を認め其行動を監視するに突如人影より放擲した數個の手榴彈は機關銃陣地附近に炸裂し火焰及破片が四散した。此時氏は憤然起ちて自己の危険を顧みず小銃を執て敵中に突進し之を撃退した。所屬小隊が後顧の憂なく一意前面の敵を猛射し之を撃退し得たるは氏の功績に俟つ所尠からぬ次第であつた。

爾後六回に亘り敵の大小部隊から攻撃を受けたが氏は其都度沈着剛膽而かも機敏に活躍し彈藥の運送に或は後方側方の警戒に或は潜入せる敵の撃退に勇戰奮闘したのであつた。午前四時半前後陣地の左後方より突然敵の砲彈手榴彈の混用を以てする大部隊の夜襲を受けたが狭き山上では土塊と共に跳ね飛ばさるゝ者萬歳唱へ瞑目する者悲壯惨烈の修羅場と化し氏の所屬分隊の中央にも物凄き砲彈が爆裂し分隊は三名を残し壯烈なる最後を遂げたのであつた。氏も亦午前五時頃敵手榴彈に依り顔面に爆創を受け名譽の戦死を遂げたが彈藥箱を確かと兩手に握り締め尊き屍を山上に横へしは將兵一同の嚴肅なる敬意と限りなき悲涙を催させずには措かなかつた。

即日歩兵伍長に任じ後勳八等白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を授け賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 尾崎利男

氏は兵庫縣美方郡八田村の人にして亡父を鐵藏母をうめと云ひ大正三年十一月二十日を以て生れ未だ獨身で在つた。資性濃厚潤達にして犠牲心に富み責任觀念頗る強く昭和四年三月八日尋常高等小學校を卒業し爾後同縣日高町郡是製絲株式會社江原工場に入社し勤勉業の模範として勤積すること五年有餘此間城崎郡日高農業公民學校に於ける青年訓練を修了し



た。昭和十年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊に入營教練勤務に勉勵し同四月上等兵候補者を命ぜられ次で同六月瓦斯修業を命ぜられ現代戦に於ける特別の知識を修得し翌七月一等兵に同年十二月上等兵に進み伍長勤務を命ぜられ益々勤務に精勵昭和十一年七月善行證書下士適任證書を附與せられて歸休退營した。爾來入營前勤務中の會社に復歸し軍隊に於て養成せられた規律と堅確なる精神を以て業務に精勵し一方青年團に對して指導的地位に立ち貢獻する所尠からず爲に十二年七月美方郡青年團長より模範青年として表彰せられた。昭和十二年七月末支那事變の爲應召長野部隊に編入せられ北支方面の征途に就き滄縣附近の攻撃に於ては第六中隊第一小隊第二分隊長として九月二十一日午後六時先づ人合庄攻撃に參與し其際熾烈なる敵彈の下に於てよく小隊長の意圖の如く部下を指揮し巧に敵に接近して丈餘に達する水壕及び鐵條網を突破し中隊突撃の際には部下を率ひて率先猛烈に敵陣に突入して陣地を奪取し機を失せず部落内の殘敵撲滅に従ひ困難なる部落戰闘に夜を徹し南部人合庄に進出更に二十三日午後六時より姚官屯陣地の攻撃に移りよく部下を掌握して前進又前進斯



くて敵に近迫し中隊の突撃準備に當りては敵彈雨霰の如き危険を意とせず手榴彈を投擲し以て突撃の好機を作爲し翌二十四日午前四時中隊突撃の際には部下を率ひ挺身勇猛果敢に突入して陣地の一角を奪取し兩側に於て頑強に抵抗する敵の制壓に全力を注ぎ中隊再び突撃を實行するや敢然敵に向つて突入し敵と猛烈なる白兵戰を演じ阿修羅の如く活動したが其際頭部及胸部に手榴彈剣を蒙り壯烈なる戦死を遂げた。氏は躬行率先範を示し部下亦信賴愛に上下一致人和の理想を實現して

分隊の掌握を確實にし殊に滄縣夜襲の際の如き動もすれば混亂を生じ易きにも拘らず終始分隊一丸となつて敵に多大なる迫力を加へ中隊をして敵陣奪取の動機を促進したる功績は拔群にして永く戦史を飾るであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍砲兵伍長勳七等功七級 大堀 京 榮



氏は群馬縣群馬郡瀧川村大字板井の人にして父を巧亮亡母をシゲと云ひ大正四年五月三十日を以て生れ未だ獨身であつ

た。昭和五年三月瀧川尋常高等小學校を卒業翌四月瀧川實業補習學校同青年學校に入學昭和八年一月入營の爲め退學した。資性温順にして寡言慈愛に富み十二歳の時母に死別し爾來母に代つて二弟の世話に當り十八歳にして現役を志願し昭和八年一月宇都宮砲兵聯隊に入營間もなく北滿に渡航各地の守備に任じ更に轉々匪賊の討伐に従ひ功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり同九年十一月内地に歸還滿期除隊となり翌十年一月陸軍火工廠岩鼻火藥製造所に勤務したが恪勤精勵にして貯蓄心に富み眞に模範的青年であつた。昭和十二年八月支那事變の爲め應召宮川部隊に編入せられ北支方面の征途に就き九



雨と飛び来る機銃掃射を補充の任に當り且つ放列への充備を滞滞ならしめ以て中隊の射撃を適時有効ならしめた。引續き九月十五日以降の拒馬河附近の戦闘に於ては九月十七日午前三時所屬隊が葦桑浦南方百米の地點に到着露營中午前五時三十分不意の敵襲に遭ひ彼は曉前の夜暗を利用して我を包圍し且つ自ら兵力の強大を恃み雪崩の如き勢を以て近迫し來たりし爲め元來砲兵は自衛力充分ならざるに而も暗夜の事とて言語に絶する危険に陥つた次第であつたが氏は小銃分隊員として速に銃を執り勇敢機敏敵砲雨飛の裡逸早く中隊の最前線に進出し寄せ来る敵兵に對し應戰猛射を加へた。氏等の小銃射撃により敵部隊の一部は小莊に後退逐次全部の動搖を來たし遂に中隊はさしもの危険を脱し戰勝の因茲に萌した次第であつたが氏は尙も前方二十米に進み追撃を有効に實行中敵砲を蒙り腹部貫通銃創により惜くも壯烈なる戦死を遂げたのである。氏や曩には滿洲の警備匪賊の討伐に従ひ功に依り勳八等に叙せられ今次亦北支の野に屢々勇戦す而も其最後に於ては疾風迅雷の敵襲裡に在つて倣活果敢小銃分隊員として防戦に魁けし爲に克く中隊の危難を未然に阻止す。

氏等の勇戦奮闘によりさしもの頭敵を後へに蹙若たらしめ更に追撃射撃の威力により之れを撃退し延いて中隊快勝の因を作したるは其功績拔群にして永く芳を青史に留め一死の餘榮盡きざるものありと謂ふべし。

即日氏は砲兵伍長に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 大熊正四郎

氏は栃木縣那須郡佐久山町の人にして亡父を音松母をテツと云ひ大正四年六月二日を以て生れ未だ獨身であつた。性温良にしてよく母に仕へ孝養を盡し學業操行共に良好であつた。昭和五年佐久山小學校高等科を卒業し後宇都宮市酒類問

屋横倉商店の店員となり着實業務に精勵し主人の信任を得横倉店員として認められた。昭和十一年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊に入營隊務に精勵し特に銃劍術及び射撃は其特技であつて聯隊長始め各隊長より賞状を受くること四回に及んだ。斯くて上等兵に進級し昭和十二年八月北支方面の征途に就き灼熱豪雨の天候と泥濘なる道路を冒して行軍し其間繁劇なる警備其他の諸務に服し殊に十月一日より同七日に亘り石家莊攻撃の爲保定より輝沓河々畔に至る前進間に於ては所屬



中隊が占村を占領して陳村附近の敵情搜索に任せし間氏は歩哨として徹宵警戒勤務に服し又車輛通過のため道路構築に當る等渡河準備に多大の貢献をなし續いて十月十一日院村附近の戦闘に於ては齋藤隊第二小隊第一分隊の機銃射撃手として初め中隊豫備隊にあつて彈丸雨飛の下を前進せしが此間にも氏は絶えず第一線の状況及敵情に注意し必要事項を適時分隊長に報告し其熱心にして勇敢なる誠に感服すべきものがあつた。斯くて中隊第一線は益々敵に近接したが第一線小隊間に隙を生じたので中隊長は中隊指揮班及び豫備隊を以て其間隙地域より突撃を敢行せんとした。此時敵は小銃機銃及

手榴彈を以て我突撃を阻止せんと試み之がため石川分隊長は負傷した。之を目撃せる氏は憤然として躍り出て敵銃眼を射撃し以て掩蓋内の敵に多大なる損害を與へたが此際頭部に貫通銃創を受け輕機を握りたるまゝ打倒れた。そして苦しき息の下で次の射手へ輕機を手渡した。確りせよと戰友が駆寄つて繃帯を施せば氏は大丈夫だと連呼して居た。斃れても尙其職責を重んじた氏の心根が察せられて一入涙ぐましいではないか。戦後繃帯所に收容せられたが惜くも繃帯所に於て聖



戦の華と散つた。因に氏の二兄も亦聖戦第一線に立ち報國の誠を盡してゐるとの事一家の光榮郷黨の誇慕するに餘がある。

氏や郷に在りては忠良なる臣民たり軍に従ひては堅忍不撓克く艱難辛苦に堪え任務の命ずる所勇猛果敢克く既修精練の武技を發揮し以て皇軍戦勝に寄與する所甚だ多かつた。今や肉體は尊き犠牲となつたが氏の忠魂は永久に生き所屬隊の將兵を加護し又二兄の武運を祈り添へるであらう。喧嘩々たる其武勳は皇軍戦史に輝き氏の名は語り傳へて千古に薫るであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功六級 涌島 義人

氏は鳥取縣東伯郡西郷村大字伊木の人にして父を甚蔵母を美きと云ひ大正二年十一月十四日を以て生れ未だ獨身であつた。人となり父母に仕へて孝又盡忠報國の念に篤かつた。昭和四年三月中學三年を修了退學し昭和九年一月現役兵として伏見歩兵聯隊に入營同年四月滿洲事變に出動し克己精勵九月内地に歸還し功により勳八等瑞寶章を賜はり昭和十一年月下士適任證書を附與せられて滿期除隊となつたが昭和十二年七月支那事變のため應召北支方面の征途に就いた。而して八月廿三日獨流鎮附近の攻撃に於ては中井部隊澤山隊に屬し第一小隊の第一分隊長として獨流鎮西南突角の廟附近の攻撃に参加した。敵は堅固なる陣地に據り頑強に抵抗し陣地前の地形は濕地にして所々高梁ありて我前進を妨害したが氏は克く分隊を掌握し率先陣頭に立ちて渡河し敵を制壓しつゝ勇敢に前進し第六分隊の左に連繫して當面の敵を攻撃した。廟東

北側家屋に建するや新に廟北側道路上にも敵兵を發見せるを以て第六分隊と協力して之を制壓し續いて突撃支隊の擲彈筒の射撃を行ひ氏亦機を失せず自ら手榴彈を投擲しつゝ勇猛果敢に該廟に突入し敵を西北方に擊退して該廟を占領した。次で率先先頭に在りて運河に沿ひ部落内を攻撃前進中敵兵は舊橋梁跡北方約百米に在る銃眼家屋陣地より自動火器を以て進路を猛射せる爲小隊の前進は著しく阻害されたが氏は部下分隊を指揮し勇敢機宜に之を制壓し以て小隊の攻撃を容易ならしめ戦勝獲得に重大なる素因を與へた。次で東西子牙鎮附近の攻撃に於ては九月三日午後浪高に進出し大治庄小河に在る敵百の敵と相對して日夜奮闘し九月七日大治庄の敵を攻撃する際は小隊の前方を斥候として前進し有利なる報告を呈して小隊の攻撃を容易にした。



之を占領するに至つた。翌十一日騎兵部隊と共に所屬中隊は太旺子村に陣地を占領せる敵を攻撃するに決し午前九時大梁王村を出發した。此時氏は中隊第一線小隊にありて攻撃前進を起し濕地且高梁のため行動を妨害されたが氏は之を物ともせず克く部下を指揮督勵して頑強に抵抗する敵に肉薄し遂に敵前五十米に至るや白兵を揮つて敵陣に突入同部落の東南端を奪取し次いで西北端突角陣地附近に達し四名の殘敵を發見直に之を射殺したが高梁畑中より敵の狙撃を受け午前十時三



十分下腿部に貫通銃創を受け骨折し衛生隊に收容されたが加療効を奏せず翌十二日惜しくも落花の最後を遂げた。  
 嘯氏の分隊を指揮するや率先垂範常に衆心を打つて一丸となし慧眼克く戦線機を看破して適切なる意見具申となり或は  
 獨斷専行となりて赫々たる戦果を収め一死報國の至誠の進る所地形の不利も熾烈なる敵火も之を克服し敵の心膽を寒から  
 しめ友軍の志氣を鼓舞し着々聖戰の目的貫徹に邁進した。寔に是れ皇軍歩兵の精銳一般軍人の龜鑑であつた。今や北支戰  
 線の華と散つたが氏の功績は皇軍戰史を飾り其名は千載に芳ばしく其英靈は護國の神として尙も活躍し皇軍を加護し又遺  
 族の多幸を擁護するであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に破格にも功六級金鳩勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 和田悦郎

氏は兵庫縣妻父郡關宮村三宅の人にして父を熊太郎母をくめと云ひ明治四十五年二月二十六日を以て生れ未だ獨身であ  
 つた。昭和二年三月二十五日大谷尋常高等小學校を卒業續いて大谷青年學校に入學昭和七年三月同校を卒業したが資性温  
 厚篤實にして父母に孝養を盡し社會の公益を計るを念として居た。故に其の青年團に入るや風紀の改善を期し同團の中堅  
 となつて大に努力する所があつた。既にして昭和八年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊に入營同二月滿洲警備の爲め渡航し  
 同九年四月内地に歸還功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり同年七月善行證書を附與せられ歸隊除隊した。今次支那事變の  
 起るや氏は昭和十二年八月を以て應召長野部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。斯くて九月七日より十二日に亘る  
 馬廠附近の攻撃に於て氏の所屬中隊は丁莊に先遣せられ友軍の進出を迅速容易ならしめ又補田准尉を長とする斥候員とし

て機敏に行動克く長を輔け通信不通なりし部隊本部との連絡或は敵偵察の任務を達成し次いで九月十三日より同二十四  
 日に亘る滄縣附近の攻撃に移りてより氏は第一小隊第六分隊第二彈藥手として九月二十一日午後六時戰闘を開始し人合庄  
 に於ける敵陣地の攻撃に参加し勇戦奮闘殊に分隊長の意圖を體し分隊間の連絡に努め以て分隊の行動を容易ならしめ且彈  
 藥の運送を円滑にし射撃の効果を遺憾なく發揚せしむるに與つて力があつた。愈々敵に近接するや水壕及鐵條網を突破し

中隊の突撃に際しては分隊長に續いて猛然疾驅敵陣地を奪取更に機  
 を失せず部落内の敵を撲滅終夜部落戰闘に伴ふ各種の困難に抗し遂  
 に南部人合庄に進出したる後二十三日午後六時姚官屯陣地攻撃に従  
 ひ愈々翌二十四日午前四時中隊が該陣地に向ひ突撃斷行の際又々分  
 隊長に續いて強頑不屈勇を鼓して遂に該陣地の一角を確保し尙も奮  
 戰中不幸顔面に手榴彈創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げたので  
 ある。

氏や入りては温厚父母に孝仕し出で、は社會公益の爲に貢獻精勵  
 す其の謹嚴身を持し義務心の旺盛なる固より其の處なりとす。果せ  
 るかな曩には滿洲の警備に従ひ勳章を賜り今次亦毎戰機宜の行動に出で又克く分隊長を輔佐して累次果敢の突撃を敢行し  
 延いて中隊の戰陣奪取に寄與する所大なるものがあつた。氏の武功や拔群にしてたとへ身は北支の花と散りしと雖も英名  
 永く聖戰史上に輝き一死の餘榮盡きざるものありと謂ふべきである。



氏は即日歩兵伍長に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鳩勳章を賜はつた。



陸軍歩兵伍長勳八等功七級 渡邊 徳 衛

氏は和歌山縣伊都郡大谷村大字大藪の人にして父を徳三郎母をかじと云ひ大正四年五月二十二日に生れ資性濃厚篤實にして進んで難局に當り責任觀念旺盛であつた。昭和五年三月大谷小學校高等科を卒業同六年三月青年學校を修業し昭和十



一年一月現役兵として和歌山歩兵聯隊に入營同年十二月上等兵に進級した翌十二年四月滿洲派遣隊として滿洲國に派遣せられ熱心精勵特に六月二十四日より七月六日に亘りては僻地匪賊の出沒する竹連鎮附近にあつて警備に任ずる外被服係曹長の業務を補佐し又宜昌屯附近の討伐には益田小隊に屬し擲彈筒分隊長として活躍し八月下旬より約一ヶ月に亘る間は三道流派遣の和田小隊擲彈筒分隊長として克く小隊長を輔佐し部下を督勵して湯原果内の討伐に参加し山岳滿地を突破克服し常に志氣旺盛にして熱心精勵其功績は優秀であつた。

昭和十二年九月二日竹連鎮西方約六軒四合堂附近の戦闘に於ては益田小隊の擲彈筒々手として機敏適確なる射撃を以て敵を震駭せしめ其の追撃に方つては先頭に立つて急進爾因屯東方二百米の地點に進出し獨斷射撃を開始し敵輕機を沈黙せしめたるのみならず更に前進し擲彈筒を用ふることは能はざるに至るや圍壁に據りて頑強に抵抗する敵の猛射を受けたるも毫も屈することなく沈着豪膽彈雨を冒して獨斷分隊員二名を指揮し小銃射撃を以て敵を墊伏せしめて我小隊の前進を容易

にし更に躍進せんとした其制敵彈は氏の右前膊部に命中した。然かし氏は之に屈せず前進を続け右前方に敵數名の増加せんとするを發見するや機を失せず直に之を射撃し更に敵前五六十米の地點に匍匐前進中再び左大腿部に敵彈を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

氏は皇軍主力が支那事變に参加し連戦連勝皇軍の武威を中外に宣揚しつつある間に北滿警備の重任に任じたるものである。今や滿洲國は王道樂土を謳歌せられありと雖も松花江流域就中三江省方面は治安完からずして匪賊の横行根絶せざるに際し之が鎮定治安を維持するは亦今次事變に貢獻する所大なりと謂はねばならぬ。氏の匪賊討伐に参加せる日は恰も前日來の降雨の爲所々深さ七十珊に達する濕地介在し四合堂附近より敵方に通ずる地域は自動車の運行は甚だ困難であつた。而して附近は雜草高梁繁茂し其高さ二米に達するものもありて通視を妨げ大豆畑は低姿勢の射撃を許さなかつた。一般住民は我に好意を有せず寧ろ匪賊に内通しある疑濃厚であつた。斯る状況下に氏は豪膽且積極的に行動し獨斷よく機宜に適し沈着よく精練なる射撃技能を發揚し以て克く匪賊討伐に大なる貢獻をなし不幸にして兇彈に斃れたが天晴れ皇軍の精華護國の神として其芳名を傳へらるべく又其功は皇軍戦史に幸記され其英靈は永世に生き國境警備の皇軍將兵を加護するであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 笠間 正 一 郎

氏は埼玉縣比企郡小川町大字小川の人にして父を善助母をすみと云ひ大正四年一月二十四日を以て生れ未だ獨身であつ



た。昭和四年三月小川尋常高等小學校高等科を卒業し爾來家庭にあつて父母を助け家業に精勵一方青年訓練所に入り熱心勉勵した。性質温厚にして而かも事に方つて勇往邁進積極的實行の人であつた。嘗て劍道に志し師の許に通ふこと數年技漸く習熟の域に達してゐた。

昭和十一年一月現役兵として東京歩兵聯隊に入營五月滿洲駐劄として渡滿し泰安鎮附近の警備に任じ六月八日より十日に亘り大平哨附近の匪賊討伐に参加し七月には歩兵一等兵を命ぜられ爾後安奉線警備李加堡子附近の戰闘双山子附近の警備大石門附近の戰闘馬堂溝附近の戰闘二且嶺溝附近の戰闘喜雀溝附近の戰闘に参加し克く其任務を遂行した。斯くて其の年十二月上等兵に進級し又同月上八里甸子附近の匪賊討伐戰に参加し滿洲國警備に盡した功績は多大なるものがあつた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや北支に出動し八月十六日より同二十三日に亘る萬全縣附近の戰闘には某歩兵聯隊の後發隊たる固武部隊に編入せられ八月二十二日固武部隊は本多部隊に追及し豫備隊として參加した。敵は天嶮に據り頑強に抵抗し思ふ如く攻撃進捗せないので本多部隊は夜陰に乗じ隘路の強行通過を企圖したが敵銃砲火は熾烈を極め死傷者續出し前進極めて困難であつた。此際氏は克く分隊長を輔佐し固武部隊が本多部隊司令部と共に水斜北方高地の攻撃に移る際率先頭に立ち所屬第三分隊を率ひ第一に該高地に突入し司令部を誘導した。而して翌二十三日午後零時三十分同山頂に於て敵偵察中の白銀參謀が敵弾に負傷するや固武部隊の傳令として附近にあ



りし氏は敵集申火をも顧みず山口副官と協力應急處置を講じ後方山麓の救護班に護送し其危急を救つた。而して固武部隊は山頂に工事を施し該位置を確保して司令部直接掩護の任務を受くるや此敵前作業に於て氏は彈丸雨飛の間勇敢に工事を指導し爲に氏が擔任の工事は速に完成した而して五時三十分固武部隊長の命により工事成済の件を司令部に報告せんとし折柄敵の迫撃砲彈が落下しありしが之を物ともせず勇敢に司令部に至り報告し其の任を果して小隊の位置に歸來せんとした際、一迫撃砲彈は氏の近くに炸裂し顔面に其の破片創を受け午後六時壯烈なる戰死を遂げた。

氏や眞に實行の士毎戰濺利たる銳氣を以て馳驅奮闘せる勇姿想察に難しとせず。其行動の沈着機敏なる或は上官の危急を救助し或は高地を占領確保し或は決死的の傳令勤務により司令部の作戰指導に資す功績眞に拔群と謂ふべく其忠魂は不滅に生き護國の神として皇國を守り亦遺族の守護神として祐を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級大で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 加納川幹一

氏は和歌山縣那賀郡麻生津村の人にして大正四年七月十九日生れである。谷川家より加納川家へ養子に入り實父は喜市實母はユキと稱し養家は養父岩太郎養母ヨシと三人暮であつた。性質温良篤實に加ふるに明朗果敢の氣性を兼ね備へて居つた。昭和八年三月粉河中學校卒業在學間配屬將校の行ふ教練の檢定にも合格して居る。同校卒業後は農村青年の中堅として郷黨の指導更生に任じて居た。

昭和十一年一月現役兵として歩兵第六十一聯隊へ入營爾來軍務に精勵恪勤の結果伍長勤務上等兵を命ぜられ又精勳章を



も附與されて居る。和昭十二年四月滿洲派遣部隊に編入されて渡滿した。其後三江省竹蓮鎮附近の警備部隊に屬し勤務したが其間或は關東軍測量隊の掩護に或は竹蓮區内の匪賊討伐に或は架橋護掩部隊の要員として窪丹河に派遣せらるゝ等頻繁多忙の諸勤務に従事した。思へば廣漠無聊の僻地の地に幾辛酸を嘗め乍ら氏は常に部下に率先し範を示して之を激勵し或は不眠不休を意とせず尊き任務の前に最も熱誠積極的努力を捧げたのであつた。氏の上官等が氏の勤務成績が特に優秀であつたと嘆賞するのも蓋し偶然の事ではあるまい。

昭和十二年九月二日四合堂附近に於ける戦闘には益田小隊の擲彈筒分隊長として参加し適切有効なる戦闘を行ひ以て同小隊の戦闘を有利に進展せしめ同月廿六日窪丹東南側附近の戦闘に於ては駐止斥候として窪丹東松花江左岸へ派遣されたが其夜十二時十分頃約十名の匪賊は小舟三隻に分乗して接近して來たのを逸早くも發見し沈着正確なる射撃に依り之を射殺し舟諸共流れ去らしめ根柢より其企圖を挫折せしめた。

同廿九日には中尾小隊の第一分隊長として孫大李附近の匪賊搜索に従事し同日午後四時二十分頃孫大李窩棚の村落に占據せる匪團と衝突するに至つた。最初搜索隊は微弱なる敵部隊と判斷したのだが敵の兵力は二百を算し我を猛射した。併し中尾小隊長は敢然攻撃に決し攻撃前進に移つた。氏は冷靜沈着克く部下分隊を掌握し刻々の戦況推移を看破しつゝ機敏適切なる射撃指揮に依り敵を辟易せしむると共に敵の猛射の間斷を利用しつゝ一進一止常に分隊の先頭に在りて果敢なる攻撃を續行した。逐次兵力を増加しつゝありし敵は突如我討伐隊の



左翼を包圍する如く肉薄して來た。氏は獨斷分隊の左半部を以て此敵に對戦せしめ小隊の攻撃を容易ならしめたが敵の兵力は既に數百を算し剩へ輕機三銃を以て頑強に抵抗した。味方は殆ど携行の彈藥を撃ち盡し猛射を浴びつゝ遂に敵陣地に突入した。氏は敵の輕機操縱手二名を突倒し勇戦奮闘したが兩側を包圍せる敵の狙撃を受け下腹部に貫通銃創を負うてどつと打倒れた。だが之に屈せず銃を杖に再び起たんとする一刹那もや一彈飛來胸部を打貫かれ萬歳を唱へつゝ壯烈なる戦死を遂げたのである。噫沈勇豪膽而かも慧敏戰機に投合して獨斷善戰せる氏は今や亡しと雖も不朽の勳功は永く討伐史上に輝くであらう。

即日氏は歩兵伍長に進級し勳八等白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 樺澤茂夫

氏は群馬縣勢多郡富士見村大字小暮の人にして父を竹次郎亡母をろくと稱し明治四十二年五月二十二日を以て生れ後ち兄守次義姉うたの准養子となり妻ちやうとの間に長女登美江外一女を擧げた。大正六年四月時澤尋常高等小學校に入り同十三年三月卒業更に群馬縣立勢多農林學校に入學昭和二年三月同校を卒業した。資性潑順而かも尙武の氣象に富み殊に柔道は其最も得意とする所であつた。昭和五年一月現役兵として高崎歩兵第十五聯隊に入營七月歩兵一等兵に進み翌六年七月歸休除隊となり更に其翌七年二月滿洲事變に應召し出征此の間上等兵に進級し十月召集を解除せられ四月以降時澤青年學校指導員として奮勵努力して居た。

斯くて支那事變の勃發するや氏は昭和十二年八月應召森田部隊に屬して北支の征途に就いた。而して同年九月十二日よ



り十四日に亘る永定河股家鋪門村附近の戦闘に於ては氏の所屬隊は最初豫備隊であつたが敵火の下渡河を強行し爾後門村に向ひ追撃を續行した。次いで九月十五日拒馬河畔東茨村附近の戦闘に在りては又豫備隊として後方の警戒に任じたのであつたが氏は此際猛烈なる弾雨を冒して敵情搜索等に當り克く其の任務を遂行した。更に又九月十六日平漢線東北地區馬辛莊各莊附近の戦闘に於ても中隊が蔣分莊を占領し終夜敵の攻撃を受けたる際第一線に立ちて奮戦力闘し功績大なるものがあつた。更に九月十七日より二十日に亘る平漢線西側地區澤畔店姥村附近の追撃戦闘に於て澤畔店附近攻撃の當初氏の中隊は豫備隊なりしが第一線大隊が澤畔店敵陣地を奪取するや南方平安店方向に戦果擴張を命ぜられ此の際氏は斥候として殘敵尙多數潜伏しある該村落に進入して偵察し適時敵情を報告して中隊の行動を容易ならしめ次で姥村附近に向ひ猛烈果敢に敵を追撃しやがて九月二十一日には氏の中隊は東莊附近に於て苦戦中の騎兵隊收容を命ぜられた。此の際氏の所屬小隊は夜暗東莊部落を包圍せる敵の翼側に迫り敵に多大の脅威を與へ騎兵隊の離脱を容易ならしめ遂に同隊を收容



し續いて二十二日大冊河黃村附近の戦闘に於ては中隊は大隊の左第一線となり黃村東方の敵陣地を攻撃した。其の時氏の中隊は中隊の豫備隊となり猛烈なる敵火を冒し隣接中隊との連絡に或は障礙錯雜せる高粱畑中に於て側背の搜索警戒に任じ愈々突撃に當りては機を逸せず第一線小隊の中間より前代遼南地方地區に向ひ戦果を擴張し潰走する敵に多大の損害を與へ翌二十三日より二十四日に亘る保定附近の殘敵掃蕩に於ては黃村附近の殘敵を掃蕩して保定西南端地區に向つて追撃

した。之等の各戦闘に於て氏は日夜危険勞苦を征服して終始奮闘努力し其功績偉大なるものがあつた。次で十月一日より石家莊附近の敵を攻撃し引續き順德附近に向て連日猛進撃し更に休む暇もなく磁縣漳河河畔に急進追撃し愈々十月二十四日より三十日に亘る豐安附近の戦闘に於ては氏の中隊は先づ豐安附近渡河點を確保し二十八日范莊を占領し二十九日夜氏は潜伏斥候となりて終夜辛莊附近に潜伏して警戒並に敵情監視に任じ翌三十日には第一線に立て勇敢に奮戦し遂に敵の退却するや氏は進んで孝民屯附近派遣斥候に加はらんことを志願し田野分隊長の指揮に屬して孝民屯西端附近に至り敵情偵察中午後零時三十分頃優勢なる敵の前進を認め直ちに記號により中隊に報告し氏は斥候長と共に尙敵の行動を監視しつつ、逐次後退せしが不幸其途中敵の一弾は氏の右大腿部を貫通し我が陣地近くに於て惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。氏や鞏固なる信念の下に毎戦沈着勇敢克く其任務を遂行す。殊に其の最期に在りては自ら進んで斥候の一員となり克く敵情を偵察機を失せず之を報告し中隊爾後の戦闘に重大なる貢獻を爲し其功績拔群であつたが不幸にして任務を果たし歸還の途中敵弾の爲に瘡る哀惜何ぞ堪えん。然れども氏が一死の忠は赫々たる武勳に一段の光輝を副へ其英名と共に永く芳を青史に留め氏の英靈亦護國の神となりて祐を皇國と遺族の將來に垂るゝであらう。即日氏は歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 川口元一

氏は兵庫縣赤穂郡赤穂町加里屋の人にして父を利七母をふみと云ひ大正四年一月十五日を以て生れ未だ獨身であつた。性温良にして幼時より兩親に仕へて至孝又弟妹を慈みて一家圓滿の中樞となり一度着手せしことは遂行せねば已まぬ氣概



を有し郷黨の模範青年として賞讃の的となつて居た。昭和二年三月鹽屋小學校を卒業し爾後補習學校青年訓練所を修業し同十一年一月青年學校卒業と共に現役兵として歩兵聯隊に入營し同年末上等兵に進級伍長勤務を命ぜられ初年兵掛として服務中昭和十二年七月今次事變により沼田部隊に編入せられ北支方面に出動し早くも八月二十一日潮宗橋攻撃に於ては安武中隊第一小隊擲彈筒分隊長として午前七時行動を開始し午後二時三十分愈々攻撃を開始するや敵の重火器を制壓して第



一小隊火線の増加を掩護すべき命令を受け午後三時敵掩蓋機關銃に對し分隊長自ら射撃を開始し、敵彈雨飛の下沈着正確なる射撃を實施し以て敵を震駭萎縮混亂せしめたるが將に第五發を裝填發射せんとしたる一剎那敵彈左胸部を貫通し壯烈なる戦死を遂げた。同分隊の迅速正確なる射撃は敵に大打撃を與へ第一小隊の火線増加の動作を容易ならしめたが爾後所屬中隊は有利なる態勢を以て戦闘を繼續し翌二十二日午前五時敵陣地を攻略するを得た。

氏の戦歴資料の蒐集は不幸にして極めて僅少なるを以て其全貌を窺知し得ざるを遺憾とするも戦闘時間其他敵軍活動の状態より察すれば相當の苦戦たりしを想察するに難くはない。而して分隊長自ら射撃操作に任じたるは最も機敏正確に敵掩蓋機關銃を制壓すべき戦機にして而かも氏が優秀なる射撃技能に信頼せる爲でもあらうか。兎もあれ分隊長の射撃の効果は第一小隊の火線増加に絶大なる援助を與へた事は明白である。即ち氏は與へられたる任務を適切に遂行し得たものと謂ふべきである。氏の所屬隊長は氏の動作は本戰闘戦勝の因を爲したものと確認して居る。

氏や郷に在りては忠良なる伍子であり軍に従ひては平素の成績抜群にして伍長勤務迄も命ぜられ更に戰場に出でれば以上の如き赫々たる武勳を奏し忠誠勇武の勇士であつた。寔に是れ軍民一般の鑑たるものにして其功は皇軍史を飾り其勳は千載に芳ばしく其英靈は護國の神と仰がれ永世に生くるであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍砲兵伍長勳七等功七級 川口敏郎

氏は靜岡縣田方郡西浦村の人にして父を外吉母をかくと稱し大正元年二月二十二日を以て生れ未だ獨身であつた。大正十五年三月西浦尋常高等小學校を卒業し爾後西浦村河内大工職海潮吉次郎氏の徒弟として實技を修習すること五年有餘であつた。性質温順にして自己の職業には頗る熱心忠實で其特殊技能は頗る上達し將來を囑目せられてゐた。

昭和七年一月十日高射砲第一聯隊に現役兵として入營同年四月滿洲事變のため出動し奉天新京等に駐屯し滿洲建國初頭に於ける防空の重任に當り後關東軍直屬の高射砲大隊に編入せられ事變のため在營延期となつてゐたが昭和九年五月現地に於て砲兵上等兵として滿期除隊となり歸郷し本業に精勵中昭和六年乃至九年事變の功により勳八等に叙せられ従軍記章及び滿洲國建國功勞章を賜はつた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや應召五弓部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就き天津に於ては南開大學附近の敵に對し地上射撃を以て之を撃滅し次で良郷に於て防空に更に檢修鎮に於て土肥原部隊の永定河渡河掩護に任じた。而して九月二十四日固定に向ひ前進の時は途中突如前方の重砲隊が四五十名の敗殘兵より襲撃を受けた。此時氏は小隊長の指



揮を以て該敵兵を攻撃し之を撃退以て友軍の危機を脱せしめた。

保定の對空戦闘に於ては九月三十日保定城外農科學院にあつて防空殊に保定驛の上空掩護に任じありしが午前六時三十分朝霧深くして視界蔽蓋の際爆音は聴取し得たるも機體明かならず辛くも之を發見せし時砲隊の頭上にありて敵機なるを認識し直に該機に發射したるも此時敵は既に爆弾を投下し氏の近傍四五米附近に落下せり。然かし氏は毅然として守地を守り爆片のため重傷を負ひ直に野戰豫備病院に搬送治療を受けたるも不幸程なく名譽の戦傷死をした。去りながら氏が四番砲手として



敏活正確なる照準に據り發射せられたる射弾は三杆前方に於て見事他の敵機を撃墜したと云ふ事であつた。夫れ對空戦に任ずる戰士は居常分秒の油断なく視聽を活躍せしめねばならぬ。而已ならず我彼の識別を明にするを要する爲めに雲霧の障碍ある場合の苦心たるや如實にその業務に従事する者にあらざれば到底想像し得ざるところである。氏は滿洲に於て今又北支に於て長年月間斯くの如く人に知れざる苦心に苦心を重ね來り遂に其の守地に於て燈れ現代戦に於ける最も悲壯なる犠牲となり然も敵機を墜落せしめたる功績は拔群たるのみならず北支戦線の重要上空を安全ならしめたる功績は偉大にして對空戦史に不滅の異彩を放つであらう。

氏は即日砲兵伍長に任ぜられ次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 川上壽雄

氏は岡山縣川上郡日里村の人にして父を勘吉母をサワヨと稱し大正四年十月十日生れで未だ獨身で在つた。資性温順寡言にして思慮周密然も果斷の所あり克く上下敬愛の道を辨へ同輩に親切なる而已ならず責任觀念強く立派な青年であつた。昭和五年三月明治小學校高等科を卒業し直に明治實業補習學校に入學昭和七年三月同校を卒業其後日里村青年訓練所に入所し同十年三月同所を修了したのであるが在學中勤勉にして成績優等衆の模範であつた。

昭和十一年一月現役兵として歩兵第十聯隊に入營同年七月には中隊特別射撃に於て又同十月には大隊劍術競技會に於て何れも成績優等隊長より賞状を授けられ次で同年十二月上等兵に進級伍長勤務を命ぜられた。

昭和十二年七月支那事變起るや間もなく北支方面の征途に就き八月二十日以降津浦沿線の戦闘には土光少尉の指揮する第三小隊第二分隊長として参加し先づ八月二十一日所屬中隊は七里堡の敵を攻撃するため午前十時四十分戦闘を開始し猛烈なる敵銃砲火を冒し遂に敵前二百米に接近したが敵は増援を得るものゝ如く頑強にして爾後攻撃意の如くならず敵の迫撃砲彈及チエツコ機關銃彈は霰の如く此時豫備隊たりし氏の屬する第三小隊は第一線に増加せられ氏の分隊は前日の豪雨により泥濘膝を没し且又繁茂せる高粱畑中に他分隊に先んじて火線を構成し敵に猛射を加え之が爲逐次我攻撃は進展し愈々七里堡東北角敵陣に對し突撃を實行し得る狀況に成つた。然るに氏は猛然と立ち激烈なる敵火を物ともせずよく分隊を掌握激勵し隣分隊と先頭を爭ふ如く勇敢に突進して敵を敗走せしめ更に敵を追ふて七里堡南方に進出し續いて追撃を敢行した。誠に本戦闘に於ける氏の機敏にして勇敢なる行動は比隣分隊の突撃發起を促し七里堡奪取の素因を作つたものである。翌二十二日中隊は東密附近の敵陣地を攻撃するため午前七時五十分行動を開始し敵火を冒して攻撃前進したが午前十



時過前方に三個のトーチカあるを發見したので中隊長は該地附近の敵情を搜索するに決し川上分隊長に部下二名を率ひて之が偵察を命じた。氏は勇躍出發し鐵道線路方向より前進し偵察の結果「敵の裝甲列車は靜海驛にあり又イ、ロの二個のトーチカは南北に在りて其中間に東西に連なる塹壕を有し守兵約二百あるものゝ如し」との報告を呈したので中隊長は直に夫々適切なる命令を與へ其結果中隊の攻撃は著々として進展し遂に他隊に先んじて敵陣に突入し之を奪取するに至つた。



次で所屬中隊は八月二十九日午前三時靜海縣城を出發して陳官屯に向つて前進し同地の敵を撃退し續いて前進中午前十時敵は裝甲列車を以て攻撃し來たので交戦約一時間遂に之を撃退したが此の間氏はよく分隊を掌握し勇敢に奮闘した。其後九月三日所屬中隊は豫備隊として唐官屯附近に向て前進し敵火の下を敵前六百米の線に於て散兵壕を構築し翌拂曉以後の攻撃を準備したが氏は豪雨にも拘らず部下分隊を督勵し短時間に所望の作業を完成せしめた。而して翌四日午前七時攻撃命令受領のため氏は中隊長の許に赴き受領後分隊の位置に復歸せんとせし時不幸敵迫撃彈は頭部に命中し甚に壯烈なる戦死を遂げた。中隊長より遺族に寄せたる書信には「爾後の戦闘に於て第二分隊は分隊長を失ひたるに拘らず一致團結し他分隊に先んじて勇猛果敢に敵陣に前進し得たり之は要するに日頃分隊長川上壽雄の部下掌握の宜敷きを得たる賜に外ならず」とある氏は實に郷黨に於ては孝悌友愛の公道に則り學校に於ては學業に勤勉優等の成績を得軍隊に於ては射撃に劍術に精進して其技は群を抜き戰場に於ては人和の妙語を發揮して一生を通じて渾身至誠の塊であつて實に武人として戦史を飾るに止まらず人間としての勲徳と稱すべきである。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級次いで勲八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功六級 吉田 太郎

氏は新潟縣中頸城郡新井町の人にして大正四年十月十日生である。父を吉太郎母をサミと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性温厚篤實父母に仕へて至孝弟妹に對する愛情も深かつた。昭和三年三月長野市鍋屋小學校卒業昭和八年三月長野商業學校を卒業後補助足袋株式会社社員として名古屋支店に勤務して居つた。商業學校在學間商品陳列案に關し優秀に付賞状及賞品を授けられたが入社後も集金計畫及其實施に關し成績優秀に付數回に亘り賞状を與へられた。昭和十一年一月徴兵として高田歩兵聯隊に入營し翌十二年四月より國境警備部隊に編入せられ渡滿した。入隊以來日夜軍務に精勵の結果射撃徽章並に射撃及び銃劍術の賞状を各々數回に亘り附與せられた。

北支の風雲急を告ぐるや京津地方警備の目的を以て南下した。斯くて九月二十三日より三日間は平地泉附近の戦闘に參加した。氏は第一機關銃中隊長高橋大尉の隸下に屬し其第一小隊第二分隊長として二十三日午前三時行動を起し敵砲彈下に在りて敵情地形を偵察し翌二十四日には敵主陣地の右翼に對して攻撃した。當時氏は最も勇敢なる行動と適切なる射撃指揮とに依り敵の掩蓋側防火器に對して猛射を加へ之を壓倒動搖せしめた。之が爲獨り第一線中隊の突撃を容易ならしめたるに止らず敵を包圍して其最右翼側背より近接し小銃部隊に先ち遂に小隊長と共に敵陣地に突入し接戦格闘の結果掩蓋機關銃一を鹵獲し次で退却する敵を猛射して殲滅的の打撃を與へ完全に敵陣地を占領した。本戦闘の戦勝は實に氏が周到



綿密なる敵情地形の偵察と勇敢適切なる戦闘指揮に俟つ所頗る大にして眞に拔群の武功と謂ふべきである。  
 超えて十月四日より同月六日に亘る間は原平鎮附近の堅陣を攻撃した。敵は部落城壁を利用し數線に堅固なる工事を施し頑強に抵抗した。所屬中隊は四日午前五時行動を起し本城の東南角より攻撃した。氏の分隊は敵前三百米に陣地を占領した其間敵の砲彈下を滑り小銃火の間を縫ひつゝ勇敢機敏に分隊を誘導したが隣分隊では敵彈に機銃を傷け搬送中の兵員中大腿部をやられて朱に染てるものもあつた。氏は部下分隊を激勵し敵の重火器を求めて猛撃し之を沈黙せしめた。時に夕陽將に西山に没し不眠の一夜を迎へた。友軍砲兵の猛撃は尙も續いて城内各所に火災を起し焰々天を焦し壯觀を極めた。翌五日拂曉攻撃再興となつた。氏は敵彈雨飛の中を敵前二百米に陣地を推進し我に最も危害を與へありし第一中隊正面の望樓附近の側防火器及左隣接大隊の戦闘正面に蟠居せる側防重火器を發見し之に猛火を浴せ遂に沈黙せしめ第一線諸部隊の突撃實施を極めて有利ならしめた。斯くて五日の日も暮れたが愈々翌六日總攻撃との命令に兵員皆死を覺悟し互に後事を頼む光景は悲壯そのものであつたが氏は泰然靜に日中の疲れを休めて居た。明くれば轟く砲聲續いて起る重機銃の音刻一刻と凄惨の光景が展開された氏は適切なる射撃指揮に依り必死の猛射を以て友軍歩兵に協力した。之が爲流石の頭敵も動搖を來たし遂に突撃の動機を作爲するを得た。時正に午前十一時卅分此處彼處にも相次いで喊聲が起つた。斯くて所屬中隊長の突撃命令を傳へらるゝや氏の分隊は先頭第一に第一線歩兵に跟随して突撃に前進した。今や城壁内に入らんとす



る一刹那敵の小銃彈の爲氏は下腹部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。  
 噫、風發叱咤身を以て分隊を指揮し慧眼克く戰機を捕へて重機銃の全威力を發揚し全軍戦勝の途を拓いてくれた氏は氣息奄々のいまわに幽かに 陛下の萬歳を奉唱して偉大なる功績の裡に午後一時瞑目した。併し皇軍歩兵に異彩を放つ精華として又一般軍人の鑑鑑として萬古不滅の大生命を與へられたのである。  
 氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつて破格の光榮に浴した。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 吉岡辰四郎

氏は兵庫縣城崎郡豐岡町永井の人にして父を賢二母をかめのと稱し大正五年三月八日の生れであつた。寡黙にして熱心加ふるに活達の性格は體力の強健と相俟て氏を少年の頃より特に武道競技の趣味に導いた。遂に其技は明治神宮競技の劍士として或は野球選手とし將又柔道初段の榮を獲得するに至つた。昭和四年三月豐岡町尋常高等小學校卒業後主家に六ヶ年勤續又此間入營準備教育を受けて模範兵として推賞せられた事もあつた。

昭和九年一月現役兵として歩兵第九聯隊へ入營同年四月渡滿し初めて北安鎮警備の任に就いた。爾來龍門附近の討匪に蚊河の掃蕩に或は仁和子の戦闘に参加し幾度か生死の境地に身を挺して勳功を樹てた事は云ふまでもない。昭和十一年一月警備の任を終へ内地に歸還し間もなく滿期退營同年七月歩兵上等兵を命ぜられ勳功に依り勳八等白色桐葉章を賜つた。

十二年夏支那事變勃發するや同年八月應召長野部隊に編入せられ勇躍再度の征途に就くことになつた。之れ將に氏の本



懐とする處であつたであらう。八月中旬北支に上陸直に馬廠附近の戦闘に参加した。越て九月十三日より同月二十四日迄滄縣附近の戦闘に第八中隊第二小隊第三分隊の輕機關銃第一彈藥手として氏の特技を奮つたのである。時は八月二十一日より二十四日に亘る滄縣敵主陣地に對する攻撃に於て二十一日午後十一時頃前方無名部落東南側獨立家屋を攻撃占領せよとの命令を受けたのが氏の屬して居つた小隊であつた。然し此の家屋は敵陣地前の要所であると共に我が中隊が突撃する據點であるが故に小隊の獨力攻略は難中の難事であることは云ふまでもない。抑々輕機關銃の使命を全ふせしむるには彈藥の補充を滞らしてはならない。氏の任務は彈藥補充が第一の主命であつた。小隊は愈々前面の家屋占領に邁進中氏は敵の猛射を受けつゝ克く分隊長の指揮に従ひ彈藥補充をして毫も遺憾なからしむる事に努力した。之が爲め我輕機關銃の威力を充分發揮せしめて小隊の獨立家屋占領を容易ならしめたのみならず頑敵の逆襲をも一蹴することを得せしめた。



斯て小隊は獨立家屋を占據し續て敵主陣地への突撃を準備することとなつた。斯くして敵主陣地に對する突入の機切迫せる二十四日午前には常に發見最も困難と云はれる敵自動火器の位置を確認し之を分隊長に報告して分隊射撃の目標を適確ならしめた。之が爲め敵の自動火器は我が猛射に依つて制壓せられ遂に中隊突撃發起の素因を齎した。今や中隊は奮進突撃の最中である氏の小隊も亦勇猛果敢に突撃前進を開始した。時將に敵の堅陣を抜かんとする直前十數米突附近を突進中一彈來つて氏の左胸部を貫き萬歲唱呼の裡に壯烈なる戦死を遂げ

たのである。  
 噫天は命を借さず今や聖戰の野氏の靈魂は滄縣の邊に永へに逝きて歸らずと雖も武技を盡して武に終れし氏は將に皇軍の史上傑として其勳功は永へに輝くであらう。  
 功により即日歩兵伍長に進級せしめられ後勳七等青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜つた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 瀧原武夫

氏は兵庫縣明石郡垂水町の人にして父を房吉亡母をみかと稱し大正四年四月二十五日その二男として出生未だ獨身にして一兄一弟を有するのみであつた。資性剛毅にして果斷頗る進取の氣象に富み幼にして母を喪ひ慈父の手一つに育てられしかば肉親思慕の情いと濃かにして親への孝養を怠らず兄を敬ひ弟を愛し家庭圓滿長ずるに及んでは兄と共に一家の支柱をなして居た。又極めて眞面目で責任觀念強く會社に勤務するに至るや其の進展を計り精勵努力の結果衆の信用を得更に又青年團幹部として郷土の公共事業に或は振武等に活躍し一方運動競技に長じ各地の競技會に出席しては毎に入賞するといふ傑出者であつた。昭和二年名谷尋常小學校を卒業し續いて垂水小學校高等科に入り同四年三月卒業後神戸柴田護謨株式會社に勤務中同十年一月現役兵として歩兵第三十九聯隊に入營し翌十一年五月北支守備のため渡航同十二年三月滿期除隊となり半歳を出でずして支那事變のため應召同年八月勇躍征途に上つた。所屬は兄の定治氏と共に沼田部隊であつて北支戰場を得れば兄弟手を握り相互に激勵し合つてゐた。八月二十日所屬中隊が河圈の敵を攻撃するに方り第二小隊第六分隊輕機關銃射手として正確なる射撃と速度を利用して敵に多大の損害を與へ初陣の功を擧げ以後九月十四日に至る間



部隊が馬廠附近の攻撃實施中は三間房の警備に任じ馬廠陥落後敵の追撃に當り九月二十三日滄州攻撃のため午後一時行動を開始し翌二十四日午前零時三十分豆店南方の敵陣地に對し夜襲を實施したが敵は長時日を費し鐵條網及び水壕を設け堅固に陣地を構成して待ち構へたることゝて我が夜襲を察知するや俄然猛烈なる射撃を初め爰に慘憺なる夜戦の展開となつた。氏は此時彈丸雨注の間を一進一止火網を滑りて躍進漸く敵に接近するや文餘の水壕を敢然超越し次いで工兵破壊班に



よる鐵條網破壊を持つ間も措かず射手數名と共に拳銃を以て恰も射撃する如き姿態を装ひ敵第一線陣地に突入し壯烈なる肉弾戦を演じ或は刺し或は突き該敵を驅逐し更に躍進第二線を経て第三線陣地に達した時健氣にも逆襲し來る敵に對し輕機關銃を以て射撃を開始したが此時氏は彈藥手として専ら彈藥の補給に努め以て敵の撃退に資し午前六時三十分遂に弱新庄を占領するに至つた。爾後同部落の西端小隊陣地の最左翼に位置して彈雨の下沈着機敏に彈藥補給を行ひ輕機關銃の効力を遺憾なく發揮せしめ中隊の攻撃を容易にした。之等功績は實に拔群と謂ふべきであつた。次いで九月二十七日以降德州に向つて敵を追撃中劉八里王院に於ける敵の抵抗に對し勇戦之を撃退し德縣に於ける爾後の作戰準備間即ち十月六日より同二十九日に亘り李莊の警備に任じ英氣を養ひつゝ治安の維持に服務した。

昭和十二年十月三十日より黃河北岸掃蕩作戰の開始せらるゝや氏は堀尾部隊長の指揮に屬する第一線中隊第二小隊にあつて十月八日午前八時四十分より張家の敵に對する攻撃に参加した。氏は此時小隊長傳令として猛烈なる敵の十字火を物

ともせず第一線を縱横機敏に馳驅し以て傳令の任務を完うし小隊は整然として逐次尙も攻撃前進を繼續し敵前約百五十米の地點に達せしに敵は我が猛攻撃に對し死に者狂ひとなつて猛烈なる集中射撃を實施せしため午後零時三十分頃氏は不幸左胸部及び左大腿部に百貫銃剣を受け小隊長と相前後して倒るゝに至つた。本戦闘に於て氏が傳令とし猛烈なる敵火を意とせず命令の傳達分隊との連絡に努め小隊長を輔佐して戰鬥指揮に遺憾なからしめ中隊の攻撃を有利に轉じて遂に午後四時二十分張家を奪取同地を確保するの素因をなせし功績は是亦拔群である。氏が重傷を負ひ苦めるを見た兄定治氏は思はず駆け寄り抱き起せば「兄さんかまはず前進して下さい」と却て兄を激勵した程だつたが敵彈益々激しく兄も亦左右肩連續に重傷を蒙り兄弟折重なつて倒れた。斯く日も時も場所をも同じうして傷つた兄弟は張家占領後陵源德州へと後送互に勵まし合ひ同じ列車にて十八日深更天津兵站病院へ擔架にて到着手術室に於ても「兄さん先へいやお前の方が傷が重い」と互に譲り合ひ軍醫も覺えず感激の涙に咽ばせられたが弟たる氏の傷は意外に重く手當の甲斐もなく絶望状態に陥り臨終迫りし午前二時兄は重傷の身を擔架に乗り弟のベッドの傍に並べて貰ひ「よくやつてくれたお前の仇は必ず俺が討つてやるから安心して逝け」と我身の深傷も忘れて探り寄り自分の右手を伸ばして弟の頭を抱けば「兄さん」の一聲を最後に然もかすかに玉の緒は斷えた。弟の唇に兄は涙にぬれたガーゼの死に水をとつてやつた。此の臨終の劇的の場面に居合せた湯淺軍醫高砂看護婦長四人の看護婦さん達も思はず貰ひ泣きして黙禱を捧げたとのことである。

嗚呼悌愛の至情感極まつて名狀するに言なし。其の由つて發する所畢竟之を孝の徳に歸せざるを得ず。而も我國忠孝は一本にして二元あるなく亦以て之を忠の徳に歸するを得べし。

要するに瀧原氏兄弟の永別に際して發露されたる眞情は是れ我國體の精華を如實に物語るものと謂ふべく戰場美談の優として正に千載に傳ふべきを思ふ。



抑々皇軍の武威中外の刮目する所となるは蓋し豺狼的蠻猛にあらずして忠孝の徳を根柢とせる眞の愛情の常に滅却されることなき點に存す。神州武人の精華即ち氏等兄弟によつて益々光輝の燦たるを見る。斯くて皇威は愈々宣揚せられ東洋平和の實體て完きを得るのであらう。氏は即日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 竹内春藏

氏は鳥取縣八頭郡大御門村大字西御門の人にして明治四十三年四月六日生である。父は熊藏母はたけと謂ひ氏は其の三男である。

大正十二年三月八頭郡殿尋常小學校を卒業し同十四年三月更に高等科を卒業した。幼時より學業を好み在學中の成績は優良であつた。性質温順にして眞面目善く父母に仕へて孝養怠らず兄を敬ひ妹を勞はりて懇切に之を指導し又交友に情誼厚く義務心に富んで居つた。小學校卒業の後志を立て、家郷を出で豊岡町某金物商の店員として就職し専心商業に従ひ日夜精勵して主人より信用せられ同輩より敬愛されて居た。

昭和六年一月十日現役兵として歩兵第四十聯隊へ入隊同年滿洲事變勃發に當り十二月二十二日勇躍征途に上り各地に轉戦して赫々たる武功を樹て昭和八年十二月二十八日凱旋した。戦功に依り勳八等白色桐葉章を賜はり滿洲國建國章並從軍記章を授與せられ同九年一月十日上等兵を以て除隊歸郷となり爾來大阪日本工具製作株式會社に入社同社員として熱心に勤務し大にその技術を認められ先輩の信頼も厚かつた。

昭和十二年八月三日支那事變に依り應召長野部隊に屬して勇躍征途に就いた。同月中旬北支の地に到着以來は惡路と闘ひ炎暑を克服し缺乏に堪へ幾多の辛酸を嘗めつゝ重要な陣中諸勤務に精勵し九月十日よりは馬廠の總攻撃に参加した。敵は天然地形を巧に利用し堅固なる陣地を構築し頑強に抵抗したが氏の中隊は聯隊の中堅となりて敵を猛攻し氏亦よく上官の命に従ひて勇敢に奮戦し遂に馬廠を占領した。其後南方に向つて敵を急追し遂に之を潰走せしめた。續いて二十三日



愈々敵が最後の抵抗線と頼める滄縣の攻撃は開始された。同地は戦略上の要地なるため敵軍は此地に於て皇軍を防止する爲め多大の力を用ひ地形を利用して堅固なる陣地を構築し鐵條網を數線に張りたるのみか深さ胸に達する水濘を以て周圍を廻らし防備極めて嚴重であつた。氏は此の日第三小隊第一分隊に屬して勇戦したがこの夜八時斥候長として敵主陣地の搜索を命ぜられた。蓋し戦闘間の斥候は敵の至嚴なる警戒の中を潜行して敵に近づき一瞬の視察に依り敵の配備火器の位置障礙物の狀況等を確知することを要するが故に最も卓越せる眼識を有して機敏に行動し然かも最も大膽不敵なることを必要とするのであるが、氏は巧に地形を利用して敵陣地に接近するや敵の猛射を受け夫れ以上敵に接近するは常人の甚だ困難とする所なるが尙ほ考慮をめぐらして率先機敏且つ勇敢に行動し仔細に敵情を偵察して貴重なる報告を提供し以て中隊長の爾後に於ける戦闘指揮を容易ならしめた。此の功績は正に拔群たるものである。次で同夜未明より更に猛烈なる攻撃を行ひ中隊が突撃に移るや氏は率先陣頭に立ち猛烈果敢敵陣に向つて突進中不幸にも敵彈の爲め腹部貫通銃創を被りて



倒れた。然かし氏は之に屈せず再び起ち上り敵前數米に近迫したが其際敵手榴彈の猛撃を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。誠に痛惜の極みである。然かし氏の勇戦奮闘殊に幾度かの大膽にして而かも慧敏熱心着眼適切なる偵察の結果が中隊長の決心を強固にし其指揮を適切ならしめ以て戦勝を齎らした事を思へば氏も満足して瞑目せられた事であらう。亦氏は滄縣攻略の華と散るも其偉大なる戦功は永く戦史に輝くであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 田口 光治

氏は群馬縣群馬郡瀧川村大字中島の人にして父を照藏母をヨウと云ひ大正三年三月十六日の出生八人兄弟の末子で未だ獨身であつた。五歳にして父を十三歳にして母を喪ひ兄の扶養により昭和三年三月瀧川尋常高等小學校を卒業し續いて瀧川青年訓練所に入り十九歳の折現役を志願して合格す性質快活にして志を斷行する氣概があり又一面人に親切で涙脆き點があつた。岩鼻火藥製造に勤務してゐた時剣道は特に上達し同所若手組の牛耳をとり同所代表として剣道大會に一再ならず出場し實力二段と云ふことである。昭和八年一月高崎歩兵聯隊に入營滿洲事變のため出動同年七月一等兵に進み同十二月歸還昭和九年十一月滿洲除隊の際上等兵に進級滿洲事變の功により勳八等に叙し白色桐葉章を授けられ。昭和十二年八月支那事變の爲め應召森田部隊に編入せられ北支方面の征途に上つた。八月二十二日より九月十二日に亘り輸送行軍の間は或は兵器協助手或は荷物監視衛兵勤務等に服し終始熱心其任を全ふした。昭和十二年九月十六日駱駝灣附近の戦闘に於ては品川隊石川小隊第一分隊輕機關銃手一番として午前十時戦闘を開始し彈雨の下沈着よく機關銃の觀測に任じ射手をし

て敵の重火器に對し適切確實なる射撃を行はしめた。午前十時五十分敵陣地中央高地に重機關銃出現したため小隊の前進困難となるや獨斷輕機銃陣地を選定して小高地に躍進誘導し迅速果敢なる行動により急襲的猛射を以て敵の重火器を制壓し爾後隨所に出現する重火器を求めては正確なる射撃を行ひ午前十一時一分雨下する敵火の中に危険を冒し射彈觀測中不幸

頭部及び頸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。



氏は曩に滿洲事變に参加して各地の討伐に任じ治安の維持に貢献したる而已ならず今又支那事變に従ひ滾刺たる勇氣を以て輕機關銃々手として重要な職責につき該銃使用の巧拙は部隊の戦闘に至大なる結果を及ぼすものなるが氏は我が攻撃を阻止する重火器を發見して之を制壓し或は輕機の威力發揚適切なるに陣地を發見し速に該地に陣地を變換して遺憾なく自動火器の威力を發揮して中隊の攻撃を容易にし遂に駱駝灣を占領するに寄與したる功績は拔擢である。假令不幸にして其身は河北の露と消ゆるとも聖戦に盡した其功績は

東洋平和の石づゑとして永く子孫の語り草となるであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



## 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 田中 隆

氏は栃木縣下都賀郡瑞穂村の人にして明治四十三年九月一日生である。亡父は清之丞母はセイといひ昭和十一年十一月結婚した妻靜子との間には氏の出征後長女タケが産れた。性温良従順にして未だ嘗て父母の命に逆つた事なく父の死後は専ら母に孝養を盡した。大正十四年三月高等小學校卒業後は自宅に於て農業に従事しその間五年の間瑞穂村南農業補習學校に通學修業したが在學中二回勳章を授與せられた。

氏は昭和六年一月十日徴兵として歩兵第五十九聯隊に入營後上等兵に進級し滿洲事變には當初上海に出動し同地停戦後滿洲に於て土匪討伐に任じ功に依り勳八等に叙せられ除隊の際は善行證書を附與せられた。尙氏は在營中給料を貯蓄して亡父の供養費として送金し又滿洲從軍中も妹の養育費として金五十圓を送金し凱旋に際しては何の樂もなき母を慰めんとレコード二十枚と貯金七十圓を持ち歸つた程の孝行者であつた。

支那事變勃發するや間もなく應召温井部隊の補機關銃部隊に屬し征途に上つた。かくて九月九日河北省永定河附近の戦及追撃戦に於ては指揮班に在りて常に中隊の先頭に前進し中隊長の命に従ひ中・小隊間の連絡に任じてゐたが當時連日の降雨に泥濘車輻を没し動々もすれば各小隊間連絡断たれんとする状況に氏は其泥濘を冒し各小隊間を奔走し或時は分隊の兵と協力して埋没車輻を引出し或は馬匹の誘導をなし以て中隊をして迅速追撃の任を達成せしめた。殊に中隊が霍家辛莊より辛橋に前進の際は暗夜にして雨中而かも地形道路等不明なりしにも拘らず先頭に立ちて進路を偵察し熱心中隊長を輔佐し以て辛橋に達する事を得せしめた。又九月十六日南台子の戦闘に於ては中隊長の命に依り敵火と困難なる地形を冒し第二小隊との連絡に任じたが完全にその任務を遂行して各小隊をして中隊長の意圖の如く行動するを得せしめその功績

顯著なるものがあつた。

九月二十三日大劉莊の攻撃戦開始するや敵は機關銃迫撃砲を猛射し戦闘漸次激烈となりしが沈着泰然として中隊長の傍にあり此時中隊長は其命令を第二小隊長に傳達する事を氏に命ずるや氏は雨下する敵火を冒し敏速に之を傳達し爲に中隊長の意圖徹底し戦闘を有利に導き得た事は實に偉大なる功績である。更に九月二十四日保定の戦闘にありては同じく指揮



班に屬し中隊長の命に従つて大隊本部と中隊との連絡に任じて居たが氏は彈丸雨飛の間を毫も意に介せず沈着勇敢に行動して完全に連絡を保ち中隊長の指揮を容易ならしめ又常に敵情に注意して居たが遂に我が左方約二百米の地點に敵の有力なる掩蓋機關銃陣地のある事を發見して中隊長に報告した。當時敵火は猛烈に中隊長の附近に集中し指揮班の大半負傷した程で在つたが中隊長は直に第二小隊をして右の敵機關銃を射撃するやう第二小隊長への命令傳達を氏に命じた。氏は猛烈なる敵火を冒し勇躍第二小隊長山崎少尉の許に至り命令を傳達し其重任を果した。かくて直に中隊長の許に歸らんと再び猛火を冒し約千米前進した時不幸左方敵陣地から飛來した敵彈命中し其場にどつと倒れるや直に收容せられ手當の上野野戦病院に於て厚き療養を受けたのであつたが傷は胸部首貫銃創で遂に惜しくも五日目の九月二十八日護國の神となつた。

由來戦線に於ける連絡とか傳令の任務は極めて重要にして而かも單獨に行動する事多く従て頭腦よく勇敢にして責念觀



念旺盛の者が選定せらるゝので既に氏が其重任に選ばれた事が氏の立派な人格能力を明示する次第である。中隊長が適切なる指揮を爲し克く優勢なる敵を撃攘し得たのも實に氏が連絡傳令の重任を立派に果し中隊長の意圖を各小隊長に徹底せしめた事が大なる素因を爲して居るので其功績は皇國聖戰史上に輝き永へに傳へらるゝであらう。

氏は傷死の日歩兵伍長に任ぜられ次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 田中重一

氏は大阪府中河内郡八尾町大字八尾中野の人にして父を房次郎母をヒデと云ひ大正四年二月二十四日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和三年三月八尾尋常高等小學校高等科を卒業し翌四年大阪實踐商業學校に入學同五年十二月都合あつて中途退學翌六年四月八尾青年學校に入學四年の課程を終つて昭和十年大阪中央郵便局通信事務員として勤務した。性質温厚篤實にして親に仕へて孝世人の信用篤かつた。昭和十一年一月大阪歩兵聯隊に現役兵として入營し七月一等兵に十二月上等兵に進み翌十二年滿洲に派遣せられ六月九日伍長勤務を命ぜられた。而して七月七日より八月三日に至る間樺川縣佳木斯附近の警備に任じ續いて八月四日より九月七日に至る間富錦縣富錦附近の警備に或は泥濘膝を没する濕地の肅正行軍に参加し殊に八月六日より同九日に亘り富錦縣西安鎮附近の討伐には下出小隊第二分隊第四番銃手として八月八日珞璣嶺附近に於て尖兵の直後を前進した。然るに午前一時十分頃突如敵と遭遇するや氏は暗夜靜肅迅速に機關銃を卸下し直に正確なる射撃を以て遂に敵を撃退した。續いて前進し午前八時三十分頃大平嶺附近に至るや忽ち六十餘名の共匪と遭遇し直に小隊長の命によりて銃を卸下し率先銃を搬送して所命の地點に陣地を占領し直に迅速正確なる射撃を送り匪賊を潰走せし

め尙も敗走する敵に猛射を注ぎ多大の損害を與へた其功績は偉大なるものであつた。其後九月八日午後五時頃五頂山西方約二軒の附近を前進中突如主力の右前方約八百米の村落内を約三百五十の騎馬匪賊東南方に逃走しつゝあるを發見し所屬銃隊は直に機關銃を卸下し其利那約四、五十名の匪賊は東南方に逃走又一部は尖兵の前方約五百米を襲歩にて横斷道路左側の部落内に隠れた。銃隊は直に尖兵の左翼に連なり五頂山西北方約一軒の高梁畑附近に陣地を占領し五頂山を越えて



大平村方向に逃走する敵に對し急襲的猛射を加へた。此の時氏は第二分隊四番銃手として頗る機敏に活動正確なる射撃を實施し敵に多大の損害を與へ殊に其後敵が前方高地に陣地を占領して抵抗し其の輕機關銃は猛威を逞うしありしが地物のため其位置は巧に遮蔽し爲に之が制壓に苦心しありし折氏は之を發見し獨斷之を猛射して遂に沈黙せしめた。然かし此時飛來した敵の一弾は不幸氏の胸部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げた。氏は死の刹那氣息奄々たるなかに幽すかに 陛下の萬歳を奉唱しつゝ莞爾として銃側を瞑目した。

嗟乎滿洲の地たる建國日猶淺く王化普からんとして匪賊の横行未だ全く跡を絶たず之をして眞の樂土たらしむるは當に極東の和平に資する所以なるのみならず八紘一宇の大精神に基き皇道を宣布する所以である。

氏や此の皇國の大使命を體し滿洲治安の維持に任じ終に討匪の軍に従ひて兇彈に墮る痛惜何ぞ盡きん。然れども一死崇高なる任務の遂行に殉ず其の勇名は偉大の功績と共に永く竹帛に存し五族の齊しく敬仰する所とならん。



氏は戦死の日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 田中鶴吉

氏は岡山縣和氣郡日生町の人にして大正二年六月十日生である。父を淺治母をマヤスと稱し氏の幼少の折兩親共に没し氏は未だ獨身であつた。氏は濃厚篤實克く業務に精勵し世人の信用も厚かつた。大正十五年三月日生小學校尋常科を卒業し勞苦の中に成人した。昭和八年十二月歩兵第十聯隊へ入營直に渡滿し滿洲事變に従軍し翌九年五月内地へ歸還功を以て勳八等に叙せられた。

昭和十二年八月四日應召勇躍征途に就いた。應召に當り實弟敏夫に遺言書を手交して後事を託し且所有品全部を兄弟に分與し一死報國を誓つて告別した。悲壯と云はんか冷徹と云はんか氏の環境を仔細に思ひやり氏の決意を靜かに味へば靜寂の夜に白菊を眺むる心地がする。通り一片の一死報國の語にあらずして腹のどん底からの誠忠以外に何物もなかつたであらう。斯くて津浦戰線に活躍する事になつた。

八月二十日より三日間は楊柳青及當城附近の支那軍掃蕩戰に参加し泥濘の難路と危險を冒し克く勇戰奮闘之を驅逐し附近の治安維持に任じた。同月二十二日午後五時七里堡出發泥濘を没する惡路と敵彈雨飛の中を前進し廿三日午前五時四十分西邊庄の敵を攻撃するや敵の銃砲彈は愈々猛烈十字火を浴びつゝ地形地物を利用して一進一止堅忍不拔の精神を以て敵に肉薄した。愈々突撃を執行するや氏は勇躍率先遂に敵陣地に突入し午前八時卅分西邊庄を完全に占領した。續いて東五里庄を攻撃して午前十一時之を占領し午後七時東密に轉進したが二十四日午前二時數倍の敵が小嶺にも猛烈に夜襲して

來た。氏は力戰奮闘敵に多大なる損害を與へて之を擊退した。

斯くて八月二十九日には王官屯附近の敵を攻撃し三十一日雙樓及姚家庄を占領し附近の敵情搜索に従事し九月四日より馬辛庄林庄及馬集の攻撃に参加し五日には曲庄陳庄を攻撃して之を攻略し當日午後二時より後屯を攻撃するや敵の銃砲火身等に集中したが毫も意とせず躍進又躍進敵陣地に近迫し率先敵陣地に突入し午後四時五十分之を占領した。戰場到着



以來幾何日數も經過せざるに早くも大小幾多の戰闘に参加し常に勇猛果敢なる行動に依り頑敵を屠り堅陣を抜き以て小隊全般の志氣を鼓舞し皇軍の武威を宣揚せるは洵に上下一般の愛敬と信頼とを一身に集めた所以であつた。所屬隊は九月十日午後一時行動を起し午後三時五十分より馬廠附近の攻撃に移つた。所屬中隊は實に其決死隊となり敵前上陸を敢行したのである。敵は掩蓋機關銃を以て我を猛射した文字通りの彈丸雨飛で中隊の前進は意の如くならずして先づ中隊正面に在る敵の掩蓋機關銃に對し猛烈なる制壓射撃を加へた。此時右方より飛來せる一彈は氏の所屬分隊長を噎した。だが分隊長

は神色曰若就中沈勇なる氏の精確なる射撃は能く敵に命中し小隊の前進は容易となつた。更に小隊の突撃點を猛射中午後五時憎い哉右側方より飛來せる敵の一彈は氏の肩を貫通した。勇敢なる氏は更に動ずる事なく射撃位置を移動し突撃に協力中又もや一彈飛來し午後六時十分遂に壯烈なる戦死を遂げた。氏は最後迄沈着豪膽の行動に依り中隊の士氣を鼓舞し後續部隊をして敵前強行渡河を容易ならしめ午後七時萬歲聲裡に馬廠の堅陣を奪取するの重要な素因を與へたものと謂ふ



べきである。

噫氏が誓へる一死報國の語は拔群の武功と共に殉難の華として語り傳へられるであらう。即日歩兵伍長に任じ勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を授け賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 辻 辨 之

氏は兵庫縣保郡神部村の人にして父を力松母をこまつと云ひ妻繁子との間に一男公策を擧げた。大正元年十月十三日長男として生れ資性温順にして小事に離礙せず衆人より敬愛せられて居た。大正十五年三月二十六日神部尋常高等小學校を卒業し後家にありて病弱なる父を助けて家業に従事し一方青年訓練所に入りて學業に勵み爲めに善行章を受くること屢々であつた。昭和八年一月現役兵として姫路歩兵聯隊に入營翌九年滿期除隊となつたが滿洲事變のため應召渡滿して警備の任を全うし功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり歸郷後農業に従事し郷黨に於ては篤農として認められ傍ら産業組合世話係及び青年團顧問などを勤めて公衆のため盡瘁する處が多く昭和十二年七月支那事變のため再び應召沼田部隊に屬し勇躍北支方面の征途に上り上陸後間もなく三軒房並に四黨口の戦鬪に参加し續いて津浦沿線の戦鬪及び陳官屯に於ける守備勤務に服したが當時十數年來稀有の豪雨により洪水の爲め泥濘なる道路を行軍し或は浸水地帯に於て奮戦あらゆる困苦を克服して其任務を完うし馬廠附近の戦鬪に於ては米澤中尉の指揮する第一線中隊第二小隊第六輕機銃分隊射手として九月九日午後十一時行動を開始し夜襲により滕莊子占領の目的を以て姚家庄を出發十日午前四時二十分遂に敵前二百米に迫りしが堅固なる陣地に據る敵は我に猛射を加へた。然かし一擧に敵陣突破を企圖せる部隊は之に應射することなく前進を續け

午前四時四十分敵前百米の位置に於て所屬中隊は大隊の右第一線となつて展開し氏の屬する第二小隊は中隊の左第一線として猛射を受くるも勇敢に前進を繼續し敵前五十米の位置より突撃に移り奮戦拮据の後完全に占領すると同時に第六分隊は直に東部丁莊の西端に進出した。時既に天明かるく氏は敗退する敵及び其第二線陣地に對し優秀なる射撃技倆を發揚して敵に多大の損害を加へ爾後第二線陣地奪取に際しては敵の重火器に對し適切なる射撃を以て敵を制壓してその暴威を封じ小隊の突入を容易ならしめ引續き第三線滕莊子の陣地攻撃のため丁莊西端に進出するや斜左の高梁畑に敗退せる敵の陣地より集中火を受け中隊全般の前進甚だ困難なるの状態を呈したため氏は率先既設陣地を利用し正確なる射撃を以て敵制壓に努め斯くして中隊主力の進出を容易ならしむると同時に小隊を滕莊子東端に進出せしむるに至り茲に氏は最後の突撃掩護射撃の位置に就くため前進を起した其瞬間惜しくも腹部に貫通銃創を受け遂に北支の華と散つた。斯くの如く氏の活動殊に其の精確なる射撃はよく敵を制壓し中隊の犠牲を減少してその前進を容易にし敵陣地を奪取するの因をなしたるものにして其功績は拔群である。

氏は郷にあつては家業に精勵以て家を齊へ社會に對しては産業組合或は青年團幹部として公益の増進を計り軍に於ては曩に滿洲の警備に今又北支に於て聖戰に従ひ敵が幾多の時日と現代科學を利用して構築したる堅固の馬廠攻撃に偉大なる功績を擧げ遂に身は北支の露と消へたが其偉勳は永く青史を照すであらう。

氏は即日歩兵伍長に任ぜられ次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



陸軍歩兵伍長勳八等功七級 司 清 松

氏は大分縣北海部郡保島村の人にして明治三十五年十二月七日生である。實母をタメと云ひ妻タカとの間に一子キミ子がある。性質快活實直にして公共事業に盡力し在郷軍人分會副長を勤める等郷黨の中堅人物であつた。大正三年三月穗門尋常小學校卒業し理髮業に従事し同業者間にも信望があつた。大正十三年一月歩兵第七十二聯隊に入營し翌十四年五月軍備整理に依り歩兵上等兵を以て歸隊除隊となつた。支那事變勃發するや長谷川部隊に召集せられ河野部隊に屬し勇躍江南戦線に出動した。



昭和十二年十一月十三日及十四日の劉河鎮附近の戦闘に於ては小野部隊長の指揮下に劉河鎮の攻撃に参加し大隊本部傳令として敵の猛火を冒し克く任務を遂行し又同月十五日より十二月十二日に亘る間は大場鎮古里村常熟蘇州無錫湯水鎮に於て〇〇部の直接警戒に任じ晝夜熱心に精勵し以て完全に任務を遂行した。十二月十三日所屬部隊は湯水鎮北方地区に進出せる敵兵約二千名を攻撃する目的を以て午前十一時行動を開始したが當時氏は大隊本部要員として之に参加し湯水鎮北方高地たる赤燕山と狼山との中間鞍部を占領し以て其北方谷地を東方に移動中なる敵を猛射し之に大打撃を與へて四散潰走せしめた。次で北方部落葛巷方面に潜在せる敵を攻撃するに方りては第一線に進出して勇躍前進し隱密に建するや倉庫内に敵兵の潜在せるを發見し敵彈雨飛の中を物ともせず頑丈なる扉を石を以て破壊して内

部に進入し之を掃蕩した。又本戦闘傳令として率先各部隊間との連絡を確保し大隊長の戦闘指揮を容易ならしめたが午後四時二十分頃所屬大隊が敵の包圍を受け奮戦中不幸にして敵彈飛來胸部に貫通銃創を受け甚に壯烈なる戦死を遂げた。其後所屬部隊は惡戰苦闘の後翌十四日午前七時三十分湯水鎮北方高地一帯の敵を撃破し同高地線を確保し得た。本戦闘は實に寡兵を以て敵の大部隊を撃破し赫々たる武功を奏したものであつたが氏の力戰奮闘が其重要な一礎石をなしてくれた賜であつた。氏や年齒既に後備役の終末に近く一家の柱石として將來家庭上重要な責務を擔ふ者であつた。然るに君國の爲一家の都合を顧みず一意聖戰の目的に邁進し劍電彈雨の中に死力を盡して軍人の本分を完うしたるは寔に是れ一般軍民の範範と謂ふべきである。今や颯爽たる英姿に接する能はずと雖も氏の英靈は永世に生き護國の神として皇國を安泰ならしむると共に一家の守護神ともなり遺族に清き魂を與へ其多幸繁榮を加護する事であらう。氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 津 久 井 梅 雄

氏は群馬縣山田郡相生村大字如來堂の人にして父を源三郎母をふくと云ひ大正三年七月二十五日に生れ未だ獨身であつた。昭和四年三月相生尋常高等小學校高等科を卒業し直に商業見習のため埼玉縣鴻の巣町近江氏方に勤務しあること二年有餘昭和六年八月家に歸り農業に従事した。人となり思慮周密にして少年時より一家の將來を慮り著々計畫を樹て身體の強健と意志の強固と相俟つて計畫の實現に努めてゐた。昭和十年一月現役兵として高崎歩兵聯隊に入營教練及勤務に精勵し特に射撃に秀で賞狀を附與せらるゝこと五回又劍術に於ても成績良好にして賞狀を受け且第二種徽章を附與せらるゝ。同



十年十一月上等兵に進級翌十一年十一月善行證書及び下士適任證書を附與せられ滿期除隊となり歸郷後農業に従事昭和十二年八月應召森田部隊に編入せられ北支方面の征途に就き鐵道及船舶輸送に方りては用意周到部隊所屬荷物の輸送を正確圓滑ならしめ九月中旬永定河の戦闘に於ては九月十四日午後四時中隊の右第一線小隊の分隊長として永定河の敵前渡河を敢行し對岸の敵を驅逐して該地を占領し以て中隊主力の進出續て車輛部隊の渡河を掩護した。次で九月十六日望海庄附近の戦闘に於て所屬松本部隊は拒馬河渡河後可勢務附近の敵を攻撃



するため前衛として前進中午後三時三十分約一中隊の敵は前衛の右第一線中隊の正面に逆襲し來たので松本部隊の豫備隊であつた。氏の所屬第五中隊は命により第一線に増加し該敵を攻撃することとなり敵の左側背に進出之を包圍攻撃した。氏は第五中隊第六分隊長として本攻撃に従ひ部下分隊を指揮して勇敢に前進遂に白兵を揮つて突撃敵に多大なる損害を與へて撃退し陣地を奪取して後可西務北端に向ひ追撃中敵飛行機の爆撃により壯烈なる戦死を遂げた。當時の戦闘に於て敵の側背に進出し不意の猛撃により敵をして我が半渡に對する攻撃企圖を挫折せしめ前衛の任務達成を容易ならしめたる功績は實に拔群であつた。

氏は戦線より父に通信せる一節に梅雄の事は御心配なく家を守る皆様こそ一層健康に注意し益々業務に精出す事を御願します戦争位其人の人格がわかり面白い事はありません。梅雄は決して人に後れは取りません必ずより以上の頑健な身體を以て働きますと切々家人を激勵し又澁判たる自己の心境を披露せるは氏の面目躍如たるものがあつた。氏の同郷出身の

親友は氏の戦死を通報して曰く梅雄君は第一小隊第五分隊長としてよく部下を愛撫し且自ら戦場の軍人として常に模範を示して居られたので最後の言葉は支那軍を徹底的にやつめて呉れと云はれました必ず支那軍を全滅させ梅雄君の靈に對へますと認めてある。以て死の斷末まで氏の責任觀念の旺盛さを窺ひ得るであらう。寔に是れ皇軍歩兵の精華であり又一般軍人の範疇である。今や護國の神として皇運を扶翼し奉ると共に其英靈は必ずや一家の守護神ともなり氏が生前念願せる家運の隆昌をも翼成せしむるであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級 中原 英雄

氏は岡山縣赤磐郡山方村大字黒澤の人にして明治四十二年一月二十八日生れである。父は實五郎母はよしと謂ひ妻を貞代と呼び受兒一あり幹雄と名付けた。資性温良父母に仕へて孝心厚く弟妹を慈しみつゝ郷里小學校卒業後は一家の柱石として家業に精勵し又村内青年團消防組の幹部となりて盡瘁し村民一同より厚き信頼を受けて居た。

昭和四年現役兵として姫路砲兵聯隊に入營し日夜精勵して學術其他諸勤務の成績優良にして上等兵候補者に擧げられ特別の教育を受け砲兵上等兵に進み滿期除隊後は愈々家業に精勵して居たが昭和十二年七月支那事變のため召集を受け福榮部隊に屬し勇躍征途に上つた。

氏は第二分隊彈藥車長として八月上旬北支に到着するや連日の豪雨の中惡路長途の行軍や輸送に勞苦をいとはず部下を督勵し熱心人馬の保健に注意し支障なく戦線に到着したる後も泥濘膝を没する惡路を冒しつゝ彈藥を搬送して諸隊の戦闘



に支障なからしめた。

昭和十二年八月二十五日より九月二十一日に亘る津浦沿線の戦闘に於ては長瀬支隊に配属せられ終始克く部下を掌握激勵して敵火の下に砲列線へ彈藥補給を行つたが泥濘深く車軸を没せんとし輓馬の疲勞甚しく殊に敵彈の飛來頻りであつたため動もすれば兵員の志氣を沮喪せしめんとした。斯かる際には氏は一層勇を鼓し率先垂範叱咤激勵以て猛進を続け遂に

其の任務を完うした。



同じく九月二十二日より二十六日に至る間は滄縣に向て猛追撃を爲し十月一日には赤少佐の指揮に屬し德縣に向て追撃した此時北霞口北方約千二百米の十二里口にありし敵は運河を航行中の我彈藥搭載船に向て猛射した。茲に於て氏の屬せる中隊は直に現在地附近に放列を布きて此敵を射撃した。夫れは午前の六時頃であつたが我が砲撃に約一千の敵は我が砲兵中隊に向つて攻撃して來た。この時氏は小銃分隊長を命ぜられ直に小銃分隊を指揮し第一線に立ち砲撃と相俟つて敵を射撃したるも砲兵中隊として携帶小銃彈は各銃僅かに三十發を有せるのみ之が爲分隊は藥彈を節用して自重の射撃を爲さざるを得なかつた。同時に砲兵彈藥も亦缺乏し而かも道路泥濘彈藥車の招致も覺束なき状態であつた。中隊長は大に決するところあり中隊全員をして遂に東方を拜して陸下の萬歳を奉唱せしめた嗚呼何たる悲壯の情景ぞや此の間敵は益々接近十米に迫り敵の飛來雨の如く中隊の將兵次を遂ふて砲列に喰れた。小銃分隊長たる氏は部下を勵し堤防其他を利用し多數の敵を射殺したるも敵は衆を頼み前面並に兩側方よ

り潮の如く突撃し來た。氏は遂に部下と共に白兵を揮ふて断然逆襲に轉じ敵中に突入許がる敵と勇敢に奮闘したが敵の一彈は氏の左胸部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げた。然れども中隊は氏を始め尊き犠牲者の忠烈奮闘に依り遂に敵を撃退するを得たので其の功績は所謂殊勳であり其の名譽は千古不滅である。宜なるかな即日砲兵伍長に任ぜられ次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

尙氏の手帳には次の辭世の句が認められて有つた。

輕き身は北支の野邊に朽ちるとも

止めおかまし大和魂

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 仲西義明

氏は宮崎縣兒湯郡富田村大字三納代の人にして明治三十三年九月十五日生れである。父は品藏と稱し妻ヨシエとの間に芳子と謂ふ愛子がある。明治四十年四月三納尋常高等小學校へ入學し大正五年三月優秀なる成績を以て同校高等科を卒業した。同九年四月徵兵として歩兵第六十四聯隊へ入營し同十年天津駐屯軍に編入せられた。爾後軍務に情勵し學術科に熟達して除隊の際は善行證書を授與せられた。氏生來體格頑健にして天津各國駐屯軍國際競技會に於て選手に選拔せられ長距離競争に優勝し國際競技會日本軍委員長より記録證書を授與せられた。性質濃厚篤實責任觀念極めて旺盛にして除隊後は郷里に在りて公共事業に携はり不言實行を以て衆庶の模範とせられた。昭和三年消防手となり小頭を命ぜられ以來八年間連續勤務し其成績優秀に付警察署長より表彰せられた。



昭和十二年八月支那事變に依りて應召九月一日歩兵上等兵に進められ間もなく沼口部隊に屬して征途に就いた。斯くて同年九月十九日乃至二十一日の唐家橋附近の強行偵察並に戰鬥に際しては紀家附近に於て側方の警戒に當つて居たが第三中隊の渡河困難となるや氏は屋上より掩護射撃を爲して其の渡河を容易ならしめ且所屬大隊長の身邊が孤立危険となりし際之が救援を命ぜらるゝや氏は迅速機敏に之に赴き上官の危急を救ひ出した。而して十月九日より十三日に亘る王家宅孫家宅方向への追撃戰鬥に於ては勇敢に敵を猛追して東周宅を占領し更に西唐宅南方無名部落の占領を命ぜらるゝや勇猛果敢に前進し分隊全員を激勵誘導して遂に敵を撃退した。



績て十月十五日紀家橋及齊家宅の敵に向て夜襲を行ふに際しては沼口中隊南少尉の指揮に屬して第三突撃隊となり午前二時第一線の第三小隊が齊家宅の北端一軒家を奪取するや唐家宅方面よりする劇しき側射を冒して同地に到着直に分隊を提げて齊家宅の中部並に其の南端を占領すべく夜襲を敢行し敵の抵抗を排除して齊家宅を占領した。次で第一線第二線小隊が敵の最後方陣地に向て突撃せんとするやクリーク崖特生垣等に依り突入の意の如くならず加ふるに我に約二十倍する敵はトーチカ並に掩蓋陣地に據り前方並側方の三方面より重火器及小銃を猛射し來り我小隊の損害續出し敵陣地の直前に於て我攻撃は一頓挫を來たさんとした。然れ共尙突撃を連呼せる中隊長の聲を聞くや氏は奮然として率先分隊員を叱咤激勵し進撃を敢行し獅子奮迅の勢を以て奮闘中敵彈左胸部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げた。本戰鬥は最も激烈にして中隊長以下幹部其他の死傷約五十名に達した。然し氏の勇敢なる行動及び適切なる指揮に依りて敵の數線陣地を占領する事を得前後の戰鬥を有利に進捗することを得しめた。

氏は齡將に後備役の終末期に達し動もすれば理智に長け身の安全を是れ圖る者皆無でもなき世相に氏は滿身是れ忠誠に横溢し多年鍛練せる軍人精神の迸る所勇往邁進克く皇軍の精華を發揚したるは眞に軍人の龜鑑たる者である。凡そ一度軍門を滑つた者は終世氏の如き氣魄を堅持したきものである。嗚呼目のあたり氏の勇戰奮闘の姿を目撃せる若き戦友の感激感奮は如何許りでありしぞや萬綠叢中紅一點の感なき能はずである。氏の忠誠勇武は亦後世軍民の鑑として清く尊く光を放つであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍砲兵伍長勳八等功七級 中村 和 亮

氏は福岡縣鞍手郡山口村の人にして大正二年三月三十日生である。父を鹿吉母をタクと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性温厚にして孝心深く弟を慈しみ熱心事に従ひ不屈不撓の氣概があつた。昭和二年三月山口小學校高等科を卒業し昭和五年三月山口青年訓練所を卒業した。昭和七年一月父に死別し翌二月には隣家より失火の爲家屋家具全部を類焼し涙の中に母を扶け熱心農事に従事し傍ら青年會幹部として克く其責任を全うした。昭和八年秋氏は山口村農會より選出され鞍手郡農會主催競梨會に出場し多々村に於て深耕法の講習を受けた。當時馬匹不足の爲僅に二回に亘り短時間の實習をなし得たるのみにて殘餘六日間は見學するに過なかつた。併し氏は其後涙ぐましき努力と創意工夫を凝らし遂に郡競梨會に於て一



等賞受領の榮冠を得たのである。以て氏の人となりの大要を知る事が出来やうと思はれる。昭和九年一月現役兵として小倉北方野戦重砲兵聯隊へ入隊日夜軍務に精勵し優秀なる脚術を修得し昭和十年十一月砲兵上等兵を以て歸休除隊となつた。支那事變勃發するや遠藤部隊へ召集せられ勇躍北支戦線に出動した。昭和十二年九月七日以來八日間に亘る永定河々畔の戦闘に於ては北平榆岱嶺間の行軍中飢食と惡道に悩まされ人馬疲勞の極に達したが氏は進んで故障車輛の應援に赴き常に積極的に行動し又第十三車輛の後馬駟者として細心の注意を以て馬匹を愛護し惡道難路を巧に突破し行軍能力を發揮した。抑々鞍馬編成の砲兵部隊の運動能力の如何は實に後馬駟者の脚術の優劣に依ると云ふも敢て過言ではない故に後馬駟者の細部地形の觀察駟法の判斷鞍馬誘導の微妙なる駟法等心身共に容易ならざる苦心のある事を知らねばならぬ。徒歩兵と雖も雜行軍と稱せられし前記區間を踏破し得たる氏の功績は賞讃に値するは此上贅言を要せぬ事と思ふ。



勇猛果敢車輛の全機動力を發揮し以て中隊戦闘に寄與せる所絶大で檢査留滞在間は能く鞍馬の飼育に注意し愈々永定河の戦闘に入るやあつた。九月十六日固安城攻撃に方りては敵の小銃彈雨飛の中に彈藥補充の命を受け毅然として部隊段列の彈藥受領に従事し又所屬中隊段列に位置しては後馬の側を放れず敵彈に驚く鞍馬を沈靜せしむる等常に其任務に忠實であつた九月下旬保定附近の戦闘に於ても勇敢に渡河及難路を突撃して車輛の機動性を發揮し且彈藥補充を圓滑ならしむる等積極的に活動し十月八日は第二大隊段列長木下少尉の指揮に屬し第十三彈藥車駟者として正定及滹沱河の戦闘に参加した。敵は正定

及滹沱河左岸の陣地より退却し滹沱河右岸の陣地に據れるものゝ如く友軍は之を追撃したが敵情不明の爲翌九日所屬大隊は午後一時より午後四時頃まで大林濟北端に集結待機し其後小林濟に向ひ前進すべき命に接し前進を起さんとせる時俄然滹沱河右岸地區の敵陣地より敵野砲及迫撃砲の集中射撃を受けた。敵の砲彈は我隊列附近に落下炸裂し馬匹二頭即死し外車輛の損害等ありて若干の鞍馬は驚奔せるもあつた。氏は從容として自己の定位を離れず馬匹の沈靜に努めて居たが不幸にして其一砲彈は氏の身邊に落下炸裂し氏の右側胸部及右腕關節附近に擦過傷を與へた。負傷部は一見輕傷の如く感ぜられしも相當重傷にして應急手當後の容態急變し遂に華北戦線の華と散つた。

噫、氏の生涯は尊いものであつた。縱令現世は短かかりしとは云へ其残せる足跡は力であり光であつた。其力と光に依て家族が生き村人が生き而して慘烈なる戦場に戦友が生かされた。氏の功績は獨り皇軍砲兵の精華たりしのみならず又皇軍全般の誇りでもあつた。氏の天地を貫く其至誠は崇高なる責任觀念となつて現はれた。古人曰く豹は死して皮を止め人は死して名を留むと氏の芳名は正に萬古大和櫻と咲き匂ふであらう。而して氏の英靈は永世に生き皇國を護り又一家の多幸繁榮を守り添へるであらう。

氏は即日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 中原 四郎

氏は岡山縣久米郡加美村大字越尾の人で亡父を貞市母をたみと言ひ大正六年十月三日の生れで未だ獨身であつた。昭和六年三月郷里の小學校高等科を卒業後久米郡加美警察署に給仕として誠實に勤務して居たが昭和十一年一月現役志願をし



て岡山歩兵聯隊に入隊し北支那駐屯部隊に編入せられ北支に於て服務し下士官候補者として特別教育を受けて居たが同年七月支那事變の勃發と共に直に出動し先づ通州附近の警備に當つた。此時は南門占領の爲め敵前數米に位置して至嚴なる警戒を爲し我が軍の通州内進入の掩護に任じ又軍の集中間に於ては高麗營と順義との連絡に服し部隊の自動車輸送に際しては警乗兵として熱心克く其の任務を完ふした。當時は勤務人員甚だ僅少にして爲に業務繁忙を極めたが氏は勞苦困難



を意とせず進んで難局に當り晝夜の別なく寢食を忘れて精勵し其功績顯著なるものがあつた。次いで七月二十七日には氏は古市部隊長の指揮下に入り戰車隊と協力して南苑附近の敵を攻撃したが同部隊は先づ南苑西北方揚家花園に集結して同夜は徹宵敵情地形の偵察をなし二十八日未明に至り勇躍馬家堡馬村の線に進出して敵の退路を遮断し續いて潰走する敵の掃蕩に任じたのであるが此の間氏は古市部隊指揮班に在りて各小隊及戰車隊本部との連絡に任じ勇敢機敏に動作して能く其の任務を完ふした。次いで同日午後二時頃豐臺附近の戰況急なるものがあつたので古市部隊は直ちに該方面に轉進を命ぜられ氏は戰車隊と共に自動車に依つて豐臺に急進をした。當時一文字山にあつた我が騎兵部隊と西五里店附近にあつた歩兵部隊の一部とは優勢なる敵の重圍に陥り苦戰中であり尙ほ有力なる敵は長辛店附近より蘆溝橋西側附近に進出して豐臺附近に向ひ前進中であつたので古市部隊は先づ蘆溝橋方面に進出する敵を攻撃するに決し洪大庄南側を通過して蘆溝橋南側地區に向ひ急進中午後六時頃楡樹南方に於て敵と遭遇した。この時氏は指揮班員として直接部隊長の傍にあつて傳令

に任じて居たが直ちに部隊の攻撃命令を突兵長に傳達し突兵長をして機を失せず部隊長の企圖する有利な態勢を取るを得しめた。次で古市部隊は全力を擧げて攻撃に移つたが當時指揮班長は戰車隊長との連絡のため又他の幹部は第一線小隊との連絡のため共に不在であつたので氏は部隊指揮班を指揮して機敏適切に行動して部隊長の指揮を容易ならしめ爾後敵彈雨飛する中を逐次躍進して敵前約百米に達するに及んで氏は中隊長より第一線小隊に突撃命令傳達を命ぜられた。此の時敵の銃砲火は愈々熾烈を極め殆んど絶頂に達し部隊長の周圍には敵彈殊に集中し遂に古市部隊長は名譽の戰死を遂ぐるに至つたが氏は直ちに指揮班員の一名を以て部隊長の屍體を擁護せしめ其の他の指揮班員を纏めて第一線小隊長に中隊長の命令を傳ると共に自らも小隊長の位置に前進し突撃の機熟するや小隊長と共に敵の左翼に向つて突撃を敢行し將さに敵線に突入せんとする其刹那氏は敵迫撃砲彈のため右下腿部に重傷を負つて倒れた。氏は尙ほ之れに屈せず勇を鼓し跛行しつつ遂に敵陣に突入したが出血甚だしいため再び倒れてしまつた。氏の勇猛果敢な奮闘と重傷を負ふも尙屈せず斃れて後已むの慨を以て突撃を敢行した行動は大に部隊將兵の士氣を鼓舞し攻撃の成功に大なる貢獻をなしたるもので武功拔群と認められた。氏は後天津病院に收容せられて治療を受けたが八月三日遂に北支の華と散つたのである。

氏や義勇奉公の念に燃え一死を鴻毛の輕きに見勇戰奮闘終に今次事變の勞頭に於て壯烈蘆溝橋畔の華と散る痛惜何ぞ盡きん。

今や聖戰日と共に効を收め極東萬代和平の礎將に成らんとす。氏の英靈亦護國の神座より更に皇運を扶翼し奉り亦遺族の福祉に祐を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



陸軍歩兵伍長勳八等功七級 中島 勇

氏は兵庫縣加古郡八幡村野村の人にして亡父を傳十郎母をかると云ひ大正四年二月十九日を以て生れ未だ獨身であつた。性温和にして事に忠實であつた。昭和四年三月八幡村尋常高等小學校を卒業し續いて同村青年學校に入學同九年三月同校を卒業した。昭和十一年一月現役兵として姫路歩兵聯隊に入



營同年十二月上等兵に進み十二年八月沼田部隊藤原隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。氏は終始中隊指揮班に屬して各地の戰闘に參與し八月三十日三間房附近の戰闘に於ては彈丸雨飛然も泥濘と洪水のため行動頗る困難なる地區によく連絡の任務を全うし馬廠附近の戰闘に於ては所屬隊は丁莊附近敵陣地を夜襲する爲九月九日午後九時行動を開始し其際氏の中隊は第一線部隊の突入を容易ならしむる任務を以て先づ東部丁莊に突入した。此際氏は傳令として彈丸雨飛の間而かも高粱畑と泥濘に行動困難を來たし殊に敵散兵壕前の水深は胸部に達するを物ともせず連絡を確保し續いて獨進して西部丁莊を占領し退却中の敵に大打撃を與へ同部落西南方堆士の線に進出し丁莊の占領を確實ならしむることを得た。又九月十七日沙官屯に對する黎明の攻撃及び九月十九日雪官屯攻撃に於ては何れも中隊と離隔せる第二小隊との連絡に任じ中隊長をして同小隊の掌握を確實ならしめた。次で馬落坡附近の戰闘に於ては九月二十一日午後九時より行動を開始したが氏は大隊命令により斥候兵として馬落坡附近の敵陣地の

搜索に任じ機敏適切なる活動に依り貴重なる偵察報告を提出し午後十一時中隊は展開を終つて攻撃前進に移り翌二十二日午前三時三十分水濠地點に達した。此の間氏は正面及側防火による十字火を浴び且又泥濘膝を没し歩行困難の中を不撓不屈再三連絡の任を完うした。其後指揮班に在りて前進中我より優勢なる頑敵に會し直前に在る水濠を突破して一舉に肉薄せんとして水濠中に躍り込みたる際不幸にも頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

氏は參戰以來終始一貫職務に忠實にして劍電彈雨を懼れず困苦缺乏に耐へ忍び克く適切機敏に命令通報等の傳達を遂行し又偵察に當りては頭腦明敏處作適切にして貴重なる情報を齎らす等中隊戰闘に寄與せる所頗る大であつた。然るに聖戰の半にして凶弾に玉碎せるは惜みても尙餘りある次第である。されど氏の功績は皇軍戰史に牢記せられ其芳名は千古に傳へらるべく。又其英靈は護國の神として尙皇國の爲遺族の爲其多幸繁榮を加護するであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 村尾 勇

氏は大正二年十月十五日兵庫縣城崎郡日高町久斗に生る。父を幸太郎母をたきと謂ひ妻久世及び一女あり。昭和三年二月日高等常高等小學校卒業資性濃厚篤實にして克く父母に孝養を盡し友情に厚く郷黨の信頼を受けた。昭和八年十二月一日鳥取歩兵聯隊に入隊同月十日滿洲守備に派遣せられ同九年五月四日内地に歸還し六月一日歩兵一等兵に同十二月一日歩兵上等兵に進められた。在營間は精勤章三回特別射撃賞二回銃劍術優秀賞一回附與せられ又下士適任證又善行證書を附與されて同十年十月十日歸休除隊となり戰功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。昭和十二年支那事變勃發するや八月應



召長野部隊に属して征途に就き九月二十一日滄縣附近の攻撃開始せらるゝや所屬中隊は人合庄敵陣地を占領して大隊の進出を掩護すべき任務に基き午後十一時人合庄の敵に向て夜襲を敢行したのである此の時氏は分隊長として勇猛果敢率先陣頭に立ち敵陣に突入格闘約三十分敵を斃し遂に敵を撃退して同地を占領せしが午後十一時四十分頃再び敵の包圍逆襲を受けしに氏は克く部下を激勵して敵彈雨飛の中に手榴彈を以て敵に肉薄し多大の損害を與へたが此時不幸敵小銃彈の爲め胸部に貫通銃創を被り壯烈なる戦死を遂げたのである。



因に馬廠附近の敵陣地は天然の地形を巧に利用して堅固なる陣地を構築し頑強に抵抗を續けたが所屬中隊は聯隊の中堅として之を攻撃した。此際氏の勇猛果敢なる奮闘は水際立ちて目撃ましいものであつた事は將兵一般の確認する所であつた。又滄縣附近の敵陣地は津浦線方面に於ける最後の抵抗線と頼めるもので敵はトーチカを要所々に設け複雑且堅固なる鐵條網及び水深胸部に達する水濠を縱横に掘開し陣地の強度を増加して居つたのである。されば皇軍の攻撃は頗る困難を極めたが氏の所屬中隊は又もや中央第一線部隊の光榮を擔ひ日夜を期し逐次前進を開始し雨霰と射注ぐ敵彈下を滑り泥濘に苦しみ水濠に阻まれつゝも敵陣地に肉薄し遂に壯烈なる拂曉戦に依り頑敵を屠り大勝を得たのであつた。本戦闘に於ては所屬中隊長も重傷を負ひ幾多の勇士も尊き犠牲を拂つたが就中氏の勇敢無比の行動は人合庄突角陣地を占領並に其確保に至大なる貢獻をなし所屬大隊の攻撃成果を最も有利に導いてくれたものであつた。

嗟笑へば子女も懐しみ怒れば猛虎も是れ怖る。行く所成績群を抜き戦ふ所鬼神も之を避くる氏が遂に北支戦線皇軍の華と散り去つたが勳は高く仰がれ其名は永世に芳ばしく獨り遺族に清き魂を傳へるのみか護國の神として常に皇運を扶翼し奉るであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 村上米一

氏は名古屋市中區大池町の人にして父を鎌吉母をシンと云ひ後同姓の他家を繼ぎ養父を咲太郎養母をノウと云ふ。妻アサノとの間には長男豊明十三歳を頭に三男二女がある。明治三十三年三月十八日に生れ資性温厚篤實敬神崇祖の念厚く不言實行を旨とし特に子女の教育に力を傾倒してゐた。大正三年三月七寶尋常高等小學校高等科を卒業し大正九年十二月現役兵として歩兵第三十三聯隊に入營成績良好にして歩兵上等兵に進級し射撃銃劍術はその長所で大正十一年十月満期除隊となり昭和三年四月濟南事變に應召出征し歸郷後洋品商を經營して店舗日を逐ふて發展し傍ら在郷軍人分會のため熱心盡力し所屬班の成績向上に努めてゐた。

昭和十二年八月支那事變の爲召集令狀を受くるや子供達へととして肉聲の遺訓「私はお前達のお父さんだよ。お父さんは立派にお國のために戦死するがお前達はよく勉強しお父さんの様に大きくなつたらお父さんに負けない様にお國のために忠義をつくし役に立つ立派な者になつてくれ。お母さんに孝行なさい」とレコードに吹き込み欣然應召中隊に編入せられ中支方面の征途に上つた。



斯くて十一月十二日より金山衛、松江、金山、嘉興等にあつて兵站の守備に任じ其間日夜各種勤務に熱誠精勵殊に屢々斥候又は傳令として危険と困苦を冒し克く其任務を達成し功績大なるものがあつた。

十二月二日所屬牧野部隊は石灣鎮（嘉興西南方約八里）を守備し南京攻撃のため西進する兵團の左側背を掩護すべき任務を受けた。當時杭州には約五箇師の敵が居り且つ附近人民の抗日意識は熾なるのみならず敗殘兵は各所に出沒する狀況であつたが牧野部隊は三日嘉興を出發翌四日無事石灣鎮に到着した。



然かし同地の住民は家財食糧などを洗ひ渡ひ携行避難したため微發すべき物資とて皆無の狀況に止むなく部隊長は嘉興より前進の途中宿營した桐郷へ物資調査のため塚本少尉以下十四名を派遣した。氏はこの調査隊一行に加はり十二月十日午前七時宿營地を出發タリートを下航し桐郷に至り仔細に物資調査を爲し再び一行は一隻の小舟に乗り午後四時桐郷を出發歸途に就き約一里を舟行し午後四時四十五分頃何妻村の丁字タリクに差しかゝるや突如機關銃手榴弾を有する約二百の敵より包圍せられ猛烈なる集中射撃を受けた。

當時塚本少尉大野主計少尉外兵三名は船中に在り他の九名は陸上を曳船して居たが塚本少尉は直に全員を右岸に上陸應戦せしめ一同死力を盡し奮戦力闘したが何分敵は十數倍の優勢にて我が死傷續出し塚本少尉は今之迄と榊原上等兵に圍みを脱し現況を本隊に急報すべき事を命じ自ら大野主計少尉以下殘存せる數名と共に「天皇陛下萬歲」を奉唱しつゝ群がる敵中に突撃し遂に全員壯烈なる戦死を遂げたのである。時に午後六時頃であつたが之より先氏は塚本少尉傳令として同少

尉の傍にありしが敵襲を受けるや幅二十米のタリクを武裝の儘涉り敵中に突入して忽ち敵の中尉李建屏を刺殺し更に敵二三名を虜したるも此の時氏も亦下腹部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げたのであつた。

因に本隊に狀況報告を命ぜられた榊原上等兵は其命を受くるや敵の包圍を脱しタリクを武裝の儘泳ぎ涉り途中幾度か溺れんとせしも辛じて對岸に達し困苦と疲労と戦ひつゝ一晝夜を費し十二日午前七時過石灣鎮に到着報告したのである。

而して以上の狀況は榊原上等兵の報告と其の後牧野部隊長が現場を實視調査の結果に依つたものである。

噫此の戦況に誰か悲憤の涙に咽ばざるものがあらうか。誰か其の忠勇義烈に感激せざるものがあらうか。然かし塚本少尉以下氏等の死は不運な徒死ではない。氏等の行動が如何に大和民族の忠勇義烈を中外に宣揚したか。如何に敵の膽を寒からしめたか。更に之を内にしては如何に我が國民精神を作興し如何に我々の子孫に教訓を垂れしか、其偉大なる功績は洵に量り知るべからざるものと共に永く青史に輝くであらう。殊に氏が出征に際し愛兒の爲にレコードに遺されたる教訓は愛兒の胸に刻まれ慈父としての肉聲は愛兒の一生を通し更に其子孫を常に鞭撻激勵し氏にも劣らぬ忠勇義烈の士を輩出せしむるであらう。氏や江南の華と散り再び其雄姿に接し難きも氏が英靈は不滅に生き護國の神となりて皇國を守り亦遺族の守護神として愛護を導き祐を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 武藤竹雄

氏は群馬縣山田郡休泊村大字龍舞の人にして父を泰太郎母をヨシと云ひ明治四十四年九月二十日を以て生れ未だ獨身で



あつた。大正十五年三月休泊尋常高等小學校高等科を卒業し引續き休泊村青年學校に入學昭和六年三月同校を卒業した。資性温良にして友情に篤く勤勉にして青年學校在學五ヶ年間皆勤又教練優秀の故を以て表彰せられ除隊後は選ばれて青年學校指導員として成績を挙げ家庭にあつては父母を助けて農業に刻苦精勵家庭の隆昌を圖る等郷土の模範青年であつた。昭和七年一月十日現役兵として高崎歩兵聯隊に入營時恰も滿洲事變中として内地に派遣せられ各地の警備に或は匪賊討伐に



任じ事變終了と共に内地に歸還せられ各地の警備に或は匪賊討伐により勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はつた。

昭和十二年八月支那事變のため應召森田部隊に編入せられ北支方面の征途についた。九月十三日より同十四日に亘る永定河畔辛莊附近の戦闘續いて九月十五十六の兩日拒馬河々畔東茨村附近の戦闘次いで九月十八日より同二十日に亘る京漢線西側地區澤畔附近の戦闘に参加し或は豫備隊として或は第一線にあつて或は警戒に或は戦闘に終始勇敢に奮戦任務を完うし更に九月二十一、二十二の兩日に亘る大冊河畔黃村附近の戦闘に方つては茂木大隊長の指揮下にありて第二中隊第一小隊擲彈筒分隊長として九月二十一日午前三時行動を開始し午前四時三十分戦闘に移り前進に次ぐに前進を以てし遂に敵前約百米突の地點に達したが前面の敵火力愈々熾烈にして我が死傷者續出せしが氏は毫も屈せず敵情を監視し擲彈筒數發を發射し敵漸く動搖の微あるや小隊長の突撃號令により分隊を指揮して率先敵陣に突入し敗退する敵二名を刺殺し續いて突進したが惜くも此時前方より飛來せる敵彈の爲頭部に重傷を負ひ壯烈なる戦死を遂げた。噫熾なる敵火網

内にあつて沈着剛毅機宜に適せる射撃を以て敵に多大なる損害を與へ又突撃に當りては勇猛果敢敵の心膽を奪ひ支軍の士氣を鼓舞す寔に是れ皇軍歩兵の精華であり一般軍人の範範であつた。氏が不朽の勳功は皇軍戦史に輝き氏が芳名は千古に傳へらるであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 浦上 實

氏は兵庫縣宍粟郡神戸村島田の人にして父を羽馬次母をよのと云ひ明治四十四年三月二十日を以て生れ家庭には一女實子あり。大正十三年三月神戸村尋常高等小學校を卒業し後神戸農民學校に於て青年訓練を受け昭和七年一月同訓練を修了した。資性温良父母に孝兄弟に悌郷黨に於ては模範青年として賞揚されて居た。かくて昭和七年一月鳥取歩兵聯隊に入營し四月滿洲警備のため渡航北滿一面坡横道河子官地等の警備に従ひ或は近木蘭二道河子湯原呼蘭を始め十數回に亘る討伐戦に参加し翌八年十二月上等兵に進級し九年五月内地歸還の上除隊となり翌十年四月其の功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。

更に今次事變の勃發するや昭和十二年八月應召長野部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。斯くて九月七日よりの馬廠攻撃に参加した。此際は氏の所屬隊は所屬兵團直轄部隊として花々しき第一線には立たなかつたが氏は屢々敵火を冒し各部隊間の連絡傳令に或は日夜の警戒に任じ熱心積極的に其任務を全うした。

次で滄縣附近の攻撃に移るや氏の所屬中隊は九月二十一日人合庄附近の陣地を攻撃した。此時氏は克く勇敢に第一線兵



として攻撃前進し愈々中隊が突撃を敢行するや氏は分隊長に續いて敵陣地に突入之を奪取し引續き部落の土壁に據つて頑強に抵抗する敵を攻撃し激戦の後二十二日午前九時遂に敵を撃退し引續き翌二十三日姚官屯の敵陣地を攻撃し夜に入たが

二十四日午前四時愈々中隊が突撃するや氏は此時も分隊長と共に敵正面に對し霰の如く降り来る敵の銃砲火を冒して突入遂に陣地の一角を奪取し更に戦果を擴張すべく白兵戦を交へ勇猛果敢に敵を掃蕩した。然るに偶々敵の一手榴弾は氏の顔面にあたり惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。



る殘敵の嵐に抗して壯烈落花の如く墮る。

噓、痛恨綿々として極まりなしと雖も氏の一死は本戦大捷の美果を結ぶの因を成し勇名千載に芳を留むるものと謂ふべく忠孝兩全臣子の範たりし氏の英靈は必ずや皇國を守護し又祐を家運の前途に致さるゝであらう。

即日氏は歩兵伍長に任官次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜つた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 内橋 純 司

氏は兵庫縣加西郡芳田村合山の人にして父を廣吉母をりやうと云ひ明治四十四年六月十八日を以て生れ後内田千次郎同こりゑの養嗣子となり未だ獨身であつた。性温厚篤實にして犠牲的精神に富み品行方正村内の模範青年とされて居た。大

正十五年三月芳田尋常高等小學校を卒業し爾來家にありて農業に従事し傍ら補習學校及び青年訓練所に學び昭和七年姫路歩兵聯隊に入營同九年四月滿洲事變に出動し功により勳八等白色桐葉章を賜つた。



昭和十二年七月支那事變起るや氏は間もなく應召沼田部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に上り輕機關銃分隊彈藥手として八月三十日三間房附近戰團に参加し續いて津浦沿線馬廠附近戰團の際には部隊大行李保護隊に屬し打撃ける豪雨に一面の湖沼と化したる地區を連日連夜行軍又は警戒に任じ第一線への補給に遺憾なからしめた。

其勞苦は誠に名狀すべからざるものである。次で九月十三日より滄州附近戰團に於ては第六彈藥手として十七日には沙官屯又十九日には雪官屯攻撃に勇戦引續き豆店攻撃の際には左火線分隊に在りて戰團中新たなる敵現出我が左翼を包圍前進し來るを發見し直に之を分隊長に報告する一方分隊長と共に猛烈に之を射撃し遂に敵の企圖を挫折せしめ誠に拔群の功績を擧げた。續いて馬落坡附近戰團に於ては第三小隊長片岡少尉の指揮下に當初豫備隊として二十一日午後十一時より第一線



に横行せしが敵陣地前にある水壕に近づくや一齊に敵重機銃の猛射を受けた。是に於て小隊長は速に敵の射撃地帯を突破超越すべく前進を命じたが當時既に小隊内には死傷を生じ殊に暗夜の事とて混乱を免かれざる状況なりしも氏は沈着勇敢に分隊長の指揮掌握を輔佐し小隊の前進を容易ならしめた。然るに敵は更に猛烈なる砲撃を開始し不幸其一弾は氏の身邊近く炸裂し遺憾にも氏は腹部に砲弾破片創並に頭部に貫通創を受け壯烈なる戦死を遂げたのである。

氏は兼に滿洲事變に出動し功に依つて勳八等に叙し今次亦北支の野に轉戦す。其の人と爲り注意周到にして而も敏活なる毎戦の舉措克く之を證するに足る。

其の最期に於ては暗夜の亂戦死傷續出の裡沈着克く分隊長の指揮掌握を容易ならしめ身亦頭腹共に大傷を蒙つて瘡る其死や壯烈其功や拔群永く青史を飾るものと謂はねばならぬ。

氏は即日歩兵伍長に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金瑞勳章を賜つた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 野間 福太郎

氏は栃木縣下都賀郡絹村の人にして父を字三郎母をユキと稱し祖母トクは古稀を超え尙健在である。大正三年九月二十三日生れで未だ獨身であつた。性温厚にして寛仁長上に敬にして同輩及び目下の者に對しては極めて親切であつた。昭和四年三月絹尋常高等小學校高等科を卒業し次で小山公民實業學校に入學同七年三月同校を卒業し爾來家に在つて家業を手傳つてゐた。

昭和十年一月現役兵として歩兵第五十九聯隊に入營教練勤務に勉勵し其年六月一等兵に同十二月上等兵に進級翌十一年一月伍長勤務を命ぜられた。氏は射撃及銃劍術に秀で共に賞状を授與せられ十一年七月歸休除隊の際には善行證書及び下士官適任證書を附與せられた。

支那事變の勃發するや昭和十二年八月應召坂西部隊野隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就き九月十四日永定河岸に據る敵の攻撃は敵彈雨飛の下水深腰を没する永定河の濁流を徒渉して勇往邁進奮戦の後敵陣地を奪取し次いで九月十八日敵が南北義安に陣地を占領しあるの報に接した中隊は之か偵察の爲斥候を派遣することとなり其際氏は選ばれて斥候の一員となり堅忍勇敢仔細に敵情地形を偵察し斥候長に有利の報告資料を提供した其功績は拔群であつた。



九月二十一、二十二日に亘る大冊河附近の敵攻撃に於ては敵は長時日を費し大冊河に水雷を敷設し其水を利用して水壕を廻らし鐵條網を設け散兵壕は數線に配置せられ之を連絡するに交通壕を以てし頗る堅固な陣地を構成して皇軍を拒止せんとしてゐた。之が爲晝間攻撃は多大の犠牲を覺悟せねばならぬのみならず其の成否さへ疑は

れる程であつた。茲に於て我軍の作戦は一擧夜襲により之を奪取するに決せられた。夜襲大隊に屬する氏の中隊は二十一日夜準備を整へ二十一日午前零時訪上部落を發し午前二時三十分全員枚を叩んで肅々腹部に達する大冊河の渡渉を始むるや敵は早くも之を察知し猛射を加へ暗夜に其機關銃口より吐く閃光は目映ゆきばかりであつたが中隊は強行渡河し對岸に上陸し鐵條網を破壊して敵陣に迫つた。此の時氏は中隊の左側警戒長として三名の部下を指揮し敵砲彈の炸裂小銃機關銃



弾の雨と降りしきる間を冒して中隊の側面を警戒しつつ前進し途中敵の監視兵を發見直に之を刺殺して前進を続けしが敵は益々猛射し遂に氏は胸部に貫通銃創を受けた。然かし氏は敵陣地直前の事とて屈せず勇を鼓し今は唯敵陣に躍り込み一人たりとも敵を刺殺して斃れんと鮮血淋漓たる身を起さんとするや無念敵の手榴弾は目前に炸裂し「やられた後を頼みませ」の一語を最後として壯烈なる戦死を遂げたのである。

噫氏北支の戦線に立ちて僅かに月餘其期間は甚だ短かゝりしも此の短期間に氏が皇國の爲致したる忠誠武勳は常人が其一生を通じて尙爲し得られざる偉大なるものである。たとへ大冊河の流れ絶ゆる時あらむも氏が遺されたる忠誠武勳は後の世に讃へられ其の忠魂は永へに生き護國の神となりて皇運を扶翼し奉り遺族の多幸を守護するであらう。氏は戦死の日歩兵伍長に任ぜられ次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜つた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 栗山照夫

氏は大正四年九月十日兵庫縣栗原郡戸原村川戸に生れ父を竹治母をこしずと謂ふ。昭和五年三月戸原村立尋常高等小學校卒業同年四月龍野弘導學館へ入學同七年病氣の爲め退館爾後農事する傍ら戸原村青年學校に通學した。性温厚にして淡白父母に仕へて至孝友情厚くして義務心強く村民より愛敬を受けた。昭和十一年一月十日現役兵として鳥取歩兵聯隊へ入隊同年七月二十日精勤章を附與されて除隊となつたが同十二年七月末支那事變に依り應召長野部隊に屬して征途に就き滄縣附近の戦闘に於ては第三小隊第六分隊輕機關銃射手として参加し九月二十一日午後十一時中隊主力が人合庄に於ける敵の第一線陣地に向て夜襲を敢行するに當り氏は輕機關銃の威力を充分に發揮して敵を制壓し其の後二回に亘る敵の逆襲を

擊退して中隊の人合庄敵第一線陣地を占領確保せしめた。續いて二十四日午前四時砲官屯に於ける敵主陣地突入前に在りては有効なる射撃を以て敵自動火器を制壓して中隊の突撃を準備し又中隊の突入に際しては率先先頭に立ちて突進中敵前十米附近に於て敵手榴弾のため顔面に爆創を被つて後方に收容せられ十月四日第一兵站病院に於て終に落花の最期を遂げた。



因に氏の所屬隊は八月二十七日天津の西南約十里なる良王莊の敵を攻撃して之を撃破したが當時敵陣地は制高の地を占めて我を窺ひ撃ち氏等は地形上輕機銃の射撃も出來ず附近の道路は浸水甚しく泥濘全く行動の自由を失ふた。前進！の合圖に氏も起上るや敵弾は鐵兜の紐を射切つて兜は飛切つた。戦すんで我身を檢すれば軍服は夥しき鮮血に彩られて居た。氏はさあらぬ態で元氣に參戦し數日後には二十名の便衣隊を捕縛し勇猛を發揮した。

九月廿一日以來馬廠附近の戦闘に於ては氏の所屬中隊は聯隊の中堅となり敵陣地に肉薄した。敵は天然の要害を利用し堅固なる陣地を構築し頑強に應戦した。氏は此間最も勇敢に奮戦し敵膽を寒からしめた事は將兵一般の確認する所であつた。

九月廿四日以來滄州附近の戦闘に於ても氏の所屬隊は第一線の中央に配置された。敵はトーチカを設け堅固なる鐵條網をめぐらし又縱横に水壕を設けて其水深は胸に達する有様で我軍の攻撃動作は甚しく困難を極めた。併し氏は常に率先難局に當り友軍の志氣を鼓舞し急霰驟雨の如き敵弾を物ともせず勇戦奮闘したのであつた。上官战友が氏の尊き犠牲を痛惜



せるは亦洵に謂ある次第である。氏や津浦戦線殉職の華と散り去つたが皇軍歩兵の精華一般軍人の勳鑑として末永く仰が  
るものであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜へつた。

### 陸軍衛生伍長勳七等功七級 栗原正巳

氏は茨城縣新治郡東村の人にして大正三年八月三十日生れである。父を有母をたけと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性  
豪放磊落にして武道を好み中學校在學中は柔道を學び又神田の相模會にて優勝せし事もあつた。昭和二年三月東村立小學  
校高等科を卒業後土浦町常盤學院中學部に入學し昭和六年三月同部を卒業し家庭に在りて商業に従事した。昭和八年十二  
月二十歳にて現役を志願し水戸歩兵聯隊へ入營後滿洲北安鎮に派遣せられ選ばれて齊々哈爾濱成病院に於て衛生兵教育を  
受けた。昭和九年五月凱旋の上宇都宮衛戍病院に於て引續き教育を受け衛生上等兵に進級し翌十年五月歸休除隊となり功  
を以て勳八等瑞寶章並に従軍記章及滿洲國建國功勞章を賜へつた。除隊後は上京して日本光學工業會社に入社したが北支  
の風雲急を告ぐるや召集令狀を待望し準備期間が一晝夜以上あらば云々數日間ある場合は云々の電報を頼むと郷里留守宅  
に依頼して來た。

支那事變勃發するや氏は欣然として石黒部隊に應召し勇躍北支戦線へ出動した。九月中旬永定河々畔及拒馮河々畔の戦  
闘には警備地区内に於て寸暇をも利用し患者の景況を調査して手當を施し又松林店驛に於ては騎兵隊の負傷者を收集看護  
する等衛生業務に貢献せる所甚だ多かつた。九月下旬大册河石頭附近の戦闘に於ては九月二十一日夜所屬大隊は大册河南

方小橋高地に對し午前二時行動を起し午前四時高地帯の敵陣地を奪取した。當時大隊の戦闘地域は泥濘を没し加ふるに  
數條の河川介在し行動極めて困難なりし外敵の十字火猛烈にして全く慘烈なる死闘であり従つて友軍の死傷者も續出し  
た。氏は此間に於て勞苦を厭はず危険を顧みず大に活躍して負傷者の看護に努め衛生業務に寄與せる所甚大であつた。

十月上旬渾沱河々畔陳村附近の戦闘に於ては其攻撃準備間積極的に行動して衛生保健業務に活躍し十日大隊の渡河命令



下るや濁流渦巻き水深背を没する渾沱河を決死的努力を以て前岸に  
達し所屬中隊と其第一小隊間の連絡を確保した。十月中旬石家莊及  
元氏附近の戦闘に於ては平林大隊長の指揮に屬する第一線機關銃隊  
に屬し十二日には中央軍の精銳商震軍と衝突した。所屬中隊は敵の  
石翼の堅壘たる孟村の敵陣地を攻略すべき任務を以て敵前近く陣地  
を占領した。氏は此時中隊指揮班員となり第一小隊との連絡掛を命  
ぜられた。時恰も彼我の銃砲聲喧騒を極め中小隊間は動もすれば杜  
絶せんとして居た。氏は彈丸雨飛の中を潜り萬全を期して連絡を確  
保した。偶々隣接の大隊砲隊某負傷せるを目撃せる氏は彈雨を知ら

ざるものゝ如く直ちに之に駆け付け應急手當を施したのであつた。其後歩兵部隊前進し次で所屬機關銃中隊も前進したが第  
一小隊第三分隊長諸岡氏戦死せるを以て同分隊の前進はおくれた。氏は駆寄つて之に手當を施し更に所屬部隊に連絡せん  
として駆出したが其前進地域は敵機關銃の掃射地帯であり不幸氏は兇弾の爲頭部貫通の銃創を受け茲に壯烈なる戦死を遂  
げた。



氏は衛生兵として將た指揮班の一員として其任務を完全に遂行し又分隊長を喪へる分隊員を激勵して中隊主力に追及せしむる等其功績は赫々たるものである。寔に是れ皇軍衛生兵の精華たるのみならず一般軍人の鑑鏡であつた。今や熱誠精悍なる氏が雄姿に接する能はずと雖も芳名は皇軍衛生戦史に輝き氏が英靈は永世に生き皇軍を加護し又遺族の守護神ともなり強き力と清き光とを投げ與へるであらう。

氏は即日衛生伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 黒崎 林

氏は栃木縣鹽谷郡矢板村の人にして父を長五郎母をフヨと云ひ大正三年十月十日生れで未だ獨身であつた。性質極めて温良同情心に富み級友の信望厚かつた。又勤勞を愛好し校内掃除等の際は黙々として率先之に従事し毫も怠日向なく職員學友の愛敬を受けて居つた。家庭に在りては家業を手傳ひて父母を扶け暇あれば書籍に親み研學修養並び行ひ其學業成績も常に優良であつた。昭和四年三月矢板小學校高等科を卒業し同八年三月矢板町川崎農業補習學校を卒業し同十年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊へ入營し同年六月陸軍歩兵學校教導隊通信隊要員として分遣せられ翌七月歩兵一等兵に同年十二月上等兵に進級し翌十一年七月歸休隊となつた。在營間成績優良にして兵精勳章を附與せらるゝ事前後三回に及んで居る。

支那事變起るや坂西部隊に召集せられ勇躍北支戦線に出動し九月中旬所屬隊が檢嶺嶺南方永定河渡河戦の攻撃準備間氏は第四有線班長として永定河々岸搜索部隊たりし直木隊と部隊本部間との連絡に任じ克く部下を掌握し完全に連絡の目的

を達し適時適切に情報の傳達及其他的通信連絡を確保するを得た。



氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

九月十四日揚家屯附近拒馬河の渡河戦に於ては同じく第四有線班長として渡河掩護部隊たりし第二大隊と〇〇司令部との連絡を命ぜらるゝや敵彈雨飛の間危険を冒し在拒馬河左岸第二大隊本部との連絡を完了し次で同大隊本部が拒馬河右岸に進出するや近距離よりする敵の熾烈なる側防火を物ともせず通信網架設を敢行した。爾後萬難を排し前岸に到達し茲に所望の連絡を完成したる一刹那敵の迫撃砲彈飛來足下に炸裂し茲に壯烈なる戦死を遂げた。あゝ敵前に河川横斷の電話線架設たるや是れ決死的行動である。されど氏は貴き使命の前には眼中河川なく又敵火もなかつた。一意専心皇軍戦勝の爲全身全靈を捧げたのであつた。寔に是れ軍人の鑑鏡であり又死力を竭して完成せる通信網は爾後の戦闘に至大なる影響を及ぼせる事は敢て贅言を要せざる所にして不朽の功績と云はねばならぬ。今や其肉體は華北戦線の花と散つたが其英靈は萬世に生き護國の神と祀られ又遺族の守護神と仰がれ其名は大和櫻と末永く語り傳へられるであらう。



陸軍衛生伍長勳八等功七級 工藤祐次郎

氏は秋田縣鹿角郡柴平村平元字小平の人にして父を祐幸母をソメと云ひ大正四年三月二十四日に生れ未だ獨身であつた。昭和六年三月平元尋常高等小學校を卒業し續いて鹿角郡小學校教員檢定準備場に入學研鑽した。性質溫良にして郷黨に於ける模範青年であつた。



昭和十一年一月弘前歩兵聯隊に入營衛生兵として同年二月弘前陸軍病院に轉じ其學術を修め五月北支駐屯歩兵聯隊に編入せられ北支に勤務中十二年七月支那事變突發し直に中島中隊附看護兵として出動し所屬中隊は八日午前五時より敵を攻撃し永定河右岸鐵道橋附近を占領し午前七時同河左岸に轉進午後八時半頃宛平縣城北側長豐支線堤防を占領爾後の攻撃準備の爲め九日拂曉に及びたるが此間氏は勇敢沈着彈丸雨飛の間常に最前線に進出して傷者の救護に任じ幾多傷者の危急を救ひ殊に八日の戦闘に於て永定河渡渉中の洲及同河右岸地區に於て中隊が敵の猛射を受け死傷續出するや屢々身を危地に投じ救護に従事し其數十四名に及んだ。又一方傳令として猛火を冒し永定河を渡渉し鐵道橋東側附近にあつた第三小隊に命令を傳達した等其功績は顯著であつた。

七月二十七日中隊は潘家廟附近を占領し新行宮附近の敵情を偵察するに方り氏は炎暑に屈せず指揮班長の命に従ひ傳令として精勵中隊長の指揮を容易ならしめ又翌二十八日中隊が槐房附近の攻撃に際し戰場は高粱水田豆畑等甚だ交錯せる耕

地にて通視運動共に困難而かも所在不明の敵より猛射を受け連絡極めて容易ならざる状態であつたが氏は死傷者の救護に任ずると共に傳令として中小隊長間を馳驅して連絡に任じ以て中隊の指揮を著しく容易ならしめた。又大隊主力が槐房に突撃を實行する際中隊長の突撃命令を遠隔せる第三小隊長に傳達する事を命ぜらるゝや勇躍前身敵彈を浴び而かも泥濘腰を没する水田を跋渉し完全に任務を達成し歸來して中隊長に其復命を終らんとせし刹那右腰部に砲彈破片創を受けた。然かし氏は尙後退を肯ぜなかつたが命により救護班に收容せられ豊臺兵營に後送せられた。然かし出血甚だしかりし爲遂に午後四時惜しくも華と散つた。

氏やたとへ本務たりと雖も猛烈なる敵火の下に傷兵の救急に身を以て奔走努力せるの姿態は洵に敬仰轉々禁ずる能はざるを覺へしむ而も又重要な傳令勤務を完うし重傷屈せず斃れて猶未だ已まだらんとするの意氣に至りては勇壯眞に懦夫を立たしむべく其偉大なる功績と共に永く青史に芳名を留むるものと謂ふべし。

氏は戦死の日衛生伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 桑田鐵造

氏は明治四十四年九月一日兵庫縣出石郡高橋村平田に生れ父を金治母をせと謂ふ。氏は質朴寡言にして實行力に富み父母に仕へて孝順兄弟相和し協力して農事に精勵し勤儉産を治め家運の隆昌を圖る等現代稀に見る模範青年にして郷黨激賞の的となつた。氏は朋友と交はりて亦信義を重んじ自らは絶対に禁酒禁煙で押通した。故に友人等は氏を畏敬すると共に厚き信望をかけて居た。父母親戚は氏に縁談を勧めても成功する迄暫くと耳を藉さず常に専心農事の研究改善に努め篤



農家を目ざして奮勵して居つた。大正十五年三月平田尋常高等小學校卒業昭和六年十一月平田青年訓練所の課程修了同七年一月十日現役兵として歩兵聯隊に入隊し同年四月滿洲事變に出征各地に轉戦して偉功を起て同年七月十日歩兵一等兵に進み同九年四月凱旋同年五月上等兵に進級除隊となり戦功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。

昭和十二年八月支那事變に依り應召し長野部隊に屬して勇躍征途に就き同年九月七日より馬廐附近の戦闘に参加し中隊は挺進隊として敵彈下の悪路を突破郝庄に前進した。次で中隊が流河鎮小王莊附近の敵掃蕩に當りし際氏は分隊長と共に敵情を搜索中小王莊及流河鎮の中間高梁畑に潜伏せる敵十數名を發見し背後より突入襲撃にして數敵を斃し以て中隊の志氣を振起せしめた。同年九月廿二日滄縣附近の戦闘には第九中隊第二小隊長の指揮する第五分隊第二彈藥手として之に参加し大隊主力の前進に際し小隊は尖兵となり線路西側地區を前進中姚屯官並に人合庄方面に敵の自動火器を發見し直に猛撃克く之を制壓して友軍の進出を容易ならしめた。九月廿三日姚屯官驛攻撃に際し氏は驛の西方敵「トーチカ」の猛威を振ひ我が前進を甚しく妨害しあるを發見し機を失せず之を狙撃沈黙せしめ小隊の驛占領を容易ならしめ翌廿四日拂曉追撃前進に移らんとする際姚屯官部落にありし敵兵約三百我側背より逆襲し來り手榴彈を猛射したるも氏は之に屈せず單身敢然と敵中に突入奮迅の勢を以て縱横奮戦中右方よりせる敵手榴彈の爲め大腿部に爆創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

暗氏は郷に在りては眞に忠良なる臣民として無言のまゝに垂範示教し軍に従ひては忠誠勇武眞に皇軍の眞價を發揮し得た。彼の寡少なる斥候の人員を以て數十名も群る敵中に突入せるが如き又敵の逆襲を受けし際敢然之に突入して奮戦せるが如きは全く豪膽不敵の行動であり又敵のトーチカの活躍を逸早く發見し之を狙撃して迅速に沈黙せしめしが如きは戦機の看破適切なると其射撃技能の優秀を證明せるもので物心兩方面に亘り偉大なる戦闘威力を發揮せるもので寔に是れ皇軍の精華軍人の魁鑑と仰ぐべきである。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍工兵伍長勳八等功七級 熊倉 倉 一

氏は新潟縣北蒲原郡安田村の人にして明治三十四年一月二十日生である。父は新吉母はスイと云ひ妻キソとの間に長男新作外二愛兒がある性温良にして沈勇寡言にして飾らず愛兒に對する教訓の一節に二宮尊徳翁を教材にせる點より察しても氏の性格の一端を知る事が出来やうと思ふ。大正五年三月安田小學校の高等科を卒業し大正十年十二月工兵第十三大隊へ入營翌十一年七月より同十二年五月迄尾港北樺太等に於ける道路改修、橋梁、補修、電信線路開伐作業に従事し大正十二年九月には東京大震災救援の爲約一ヶ月餘東京に派遣された。斯くて同年十一月除隊となつたが北支事變勃發するや昭和十二年十月十九日仙臺工兵聯隊に召集せられ後野戰電信隊要員として聖戰に参加する事となつた。

氏は野戰電信隊建築小隊に編入せられ昭和十二年十一月中旬江蘇省〇〇に上陸以來日々線路の點檢補修を行ひ前進又前進湯すれど水なく約一ヶ月の連續行進中晝間は一回も飲用せず遂に習性となれり。是れ偏へに神様のおかげ御兩親の信心の賜と父母に通信して居る。氏の克己心並に敬虔性は茲にも現はれて奥床しさを感ぜられる。朝は高霜を踏んで假眠の宿を出で晝は月餘も雨なき友道を歩み続け夜は外套一枚に假眠し食物の給與も思ふに任せぬ中を唯君國の爲日夜精勵任務に邁進した。

昭和十二年十二月二十日所屬隊長は湖州西南方に對し軍並に師團の前進を豫想し電信線構成を企圖し眞保少尉の指揮を以て將校以下二十四名を自動貨車に搭乘せしめ午前九時湖州出發李家村に派遣を命じた。氏も亦此一行に加はつたが午前



九時三十分頃湖州西南約二十四軒即ち李家槍北方約五軒に在る浙江省包家場附近の隘路に差かゝりし時右前方五十米の山腹既設陣地に據れる重機三を有する約二百名を下らざる敵の邀撃を受け其第一弾にて自動車エンジンの命中停止の息むなきに至つた。小隊長は直に道路左側に下車應戦を命じたが下車に當り安齋上等兵は頭部貫通の銃創を受けて戦死した。小隊長は應戦動作に移るや否や更に左側方七十米の山腹より敵の小銃齊射を受けた。此時不幸にして氏以下四名の兵員は戦死したのである。戦友某は氏の最後を次の如く通信して居る。



熊倉氏は杭州攻撃の第一日に戦死された。私が顔の血を拭つてやり且死體を擔いで火葬にしてやつたのはせめてもの心遣りであつた。氏の最後が實に立派であつた事を語るは私の悲痛の中に誇を感じる次第である。自動車は運轉不能となり直に散開應戦したが氏の度胸は素晴らしいものであつた。無口で温和であつた氏は内地の鐵道輸送中各驛では萬雷の如き萬歳の聲に歡送されても人を搔わけて窓口に顔を出した事もなく戦友等の浮立つ姿を靜に眺めて居た。處が三方の高地から急震の如く敵の集中射撃を受けた此場合にも神色自若として應戦し最初は前方五十米の敵と奮闘したが味方の彈藥盡くる頃には敵は二十米附近より小銃機關銃手榴彈を雨射するので熊倉氏外數名は小隊長を護衛し三時間の間頑張つた。斯くして一部の兵員が後方有利の地點まで後退する動作を容易ならしめ且小隊長の肩章が目標になるからとて多忙の中を之を取外してやり最後の自決用に一弾を残して携行彈藥を撃ち盡くし「小隊長殿愈々之が最後です覺悟致しませうと云ひも果さず鐵胃の下耳の邊に貫通銃創を受け壯烈なる最後

を遂げた」とある。折しも前方湯山に派遣せられありし師團司令部の自動車急行し來れる爲敵は我増援隊と誤認し一時後退した。所屬小隊長は一部と共に敢然逆襲に轉じ一部を後方五百米の橋梁に後退せしめた。敵は尙路上に止りて遂に我自動車に手榴彈を投じて焼却したが小隊長は自兵に信賴して近く敵と相對し増援隊の來着を待つた。午前十一時三十分重機一を有する一小隊の増援を得たるも敵は頑強に抵抗し益々我を猛射した。後逐次歩砲兵の増援を得て當面の敵を攻撃したが當日は戦闘交戦状態となつて夜に入り翌拂曉敵陣地を粉碎突破するを得た。當面の敵は約二百を下らざる正規兵で地の利を占め頑強に抵抗した。思ふに戰鬥力の微弱なる電信隊の小部隊が最も不利なる地形に進退の自由を失ひつゝ長時に亘り持久し又所屬小隊長の身邊を氣遣ひ周到なる着意を以て之を護衛せるは氏の沈勇と犠牲的精神の賜である。即日氏は工兵伍長に進級し勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を受け賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 桑原賢記智

氏は長崎縣西彼杵郡蚊燒村の人にして父を長次郎母をツネと稱し明治四十二年七月二十二日生れで妻スナとの間に三女がある。資性温順にして孝養克く父母に仕へ業務に對しては心身を傾倒して之に従事し従つて常に行く所佳ならざるはなき成績を擧げた。小學校在學中毎學年の成績優良且つ品行方正の故を以て賞状を授與せられたるが如き又軍隊に在りては銃劍術成績優良の故を以て賞與を受けたるが如き更に又退營に際し聯隊長より善行證書を附與せられたるが如き皆氏が眞摯熱心を物語つて餘りあるものである。

大正十三年三月蚊燒尋常高等小學校高等科を卒業し爾後家庭に於て父母を輔けて農業に従事し昭和五年一月現役兵とし



て歩兵第四十六聯隊に入營し隊務に精勵成績優良にして一等兵に更に上等兵に進み昭和六年七月歸休除隊となり爾後家業に従ひて家庭の和樂團樂を致し出でゝは在郷軍人分會の爲に盡し頗る世人の信望を擔つてゐた。

支那事變の勃發するや精銳無比の皇軍が河北に江南に奮戦しあるの時遠く西天を望み鶴首命の下るを待ちつゝありし氏は昭和十二年九月中旬應召宮地衛生隊に編入せられ十月初旬勇躍征途に上り柳川部隊に隸屬して名にし負ふ杭州灣敵前上



陸を敢行したのである。同灣は潮水干満激烈の地方として世界でも有名な所で上陸作業は困難であつたが其際宮地衛生隊の一部は手塚少將の指揮する左翼突破隊に配屬せられ柳川部隊主力の左翼に上陸することとなり十一月五日午前十一時頃第四回上陸班として氏は中隊長以下三十一名と共に乗艇し午前十一時二十分全公亭鎮南側海岸に上陸した。時恰も満潮時にして左翼突破隊の第一線歩兵はさながら潮水に追はるゝやうに敵の既設陣地に對して攻撃前進しやがて敵前四百米附近に達するや猛烈なる敵の銃砲彈により死傷者續出流石に敵前上陸の壯絶なる場面を現出したが氏は率先戦傷者を收容し手當を爲しつゝあつた。其際不幸胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

大凡軍の構成は複雑なる各種の機關よりなり各機關は有機的に活動を要し何れ劣らぬ重要性を有するものなることは言ふ迄もない。夫の第一線に活躍して敵と輪贏を争ふ固より武人の本懐何人も之を欲せざるなき花々しき所帯である。之に

反し第二線とか後方勤務とかになれば兎角人の目につきにくきのみならず其の苦心慘愴たる努力には涙ぐましいものがあるのである。氏の屬した如き衛生隊に至りては絶えず第一線に出で死傷者の收容手當に任じ危険は第一線戦闘兵と同様で而かも常に受働の位置に立ち銃の代りに擔架綱帶等を携へ戦死者を收容し傷者に手當を施して迅速に治療せしめ再び戦線に立ち得る様に努力し謂はゞ第一線の培養素とも稱すべき機關であるから戦闘兵にも劣らぬ大切なものである。氏は衛生隊員として燃ゆるが如き盡忠報國の精神を以て第一線を馳驅し彈丸雨注の間再三再四傷者の手當を施し任務遂行中不幸敵彈のため杭州灣頭の華と散つた。斯く崇高なる犠牲によつて敵前上陸は完成せられ敵をして心膽を寒からしめ以て上海の攻略は勿論南京の陥落を疾風迅雷的に完成したのである。尊いかな氏の犠牲。

氏は即日歩兵伍長に進級次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 山本澄夫

氏は兵庫縣揖保郡龍田村松尾の人にして父を菊治母をよしのと云ひ大正四年九月二十五日長男として出生未だ獨身であつた。昭和五年三月龍田尋常高等小學校高等科を卒業し資性温厚にして父母に仕へて至孝弟妹に對し慈愛を盡し勤勉で家業を勤み郷黨に於ける模範青年であつた。昭和十一年現役兵として姫路歩兵聯隊に入營教練諸勤務に精勵上等兵に進級し昭和十二年八月事變により沼田部隊岡本隊に屬し北支方面の征途に上り指揮班員として各地に轉戦した。昭和十二年八月二十五日より九月十四日に至る馬廐附近の戦闘に於ては三間房附近の警備に任じありしが滄州附近の戦闘に於ては先づ九月二十二日馬落坡附近の戦闘に参加し翌二十三日より二十四日に亘る張新庄の戦闘には所屬中隊は二十三日夜行動を起





し敵の敷線に亘る陣地を攻撃せしが終始大隊内右第一線として攻撃を敢行し遂に張新庄を占領し後敵は數回遊襲して來たが毎回之を撃退した。此戦間氏は各小隊間の連絡に任じ大豆又は高粱畑にて行動頗る困難なる地形を縦横機敏に動作し中隊長の意圖の如く各小隊を誘導し然も至近距離よりする敵の狙撃弾を浴びつゝ其任務を完うした。續いて德州に向ふ追撃間に於ては九月二十七日于庄附近同二十九日劉八里庄附近十月二日小屯附近の戦闘に参加し越えて十月三十日より以降黄河北岸の掃蕩作戦中十一月八日苗家の敵を攻撃するため中隊は午前五時行動を開始し午前九時攻撃前進に移つた。敵は水濘と圍壁を繞らした村落に據り且道路には所々に障礙物を設けて平坦開豁地を前進する我に對し猛射を加へた。氏は「重火器の支援射撃の開始は發煙直後とす」との旨を各小隊に傳達の任務を受け出發萬難を排して之を傳達し之を復命せんとして歸る途中道路横斷の壕を飛越したる刹那敵弾のため胸部を貫通せられた。然かし氏は氣息奄々たる裡に傳達を終りたる事を復命しつゝ遂に壯烈なる戦死を遂げた。本戦闘に於ける氏の勇敢迅速確實なる傳令勤務は中隊突撃準備を圓滑ならしめ突撃奏効の素因をなしたもので其功績は拔群である。

氏は誠實にして頭腦明敏所作亦敏捷であつた爲選拔されて在隊間より中隊長の當番兵であつた一度戰場に臨むや常に中隊長の身邊に注意を拂ひ其命令通報の傳達に服するや萬難を排し神速機敏に任務を遂行し以て中隊長の戰闘指揮を容易且確實ならしめた。所屬中隊長岡村大尉は氏の壯烈なる戦死に讀み萬感劇に迫り戰場倉皇の間即日筆を執り氏の戦死状況を認め遺族へ通報して居る。將兵一體の遺情亦一擲の涙を禁じ得ないではないか。噫忠誠勇武の勇士今や聖戰の尊き犠牲となつたが其功績は天晴軍人の龜鑑として皇軍戦史に光を添へ其芳名は千古に薫るであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級大で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 山原壽一

氏は大阪府南河内郡天野村大字小山田の人にして父を松太郎母をキクエと云ひ大正四年十月二十七日に生れ未だ獨身であつた。昭和五年三月小山田尋常高等小學校高等科を卒業し次で大阪府立富田林中學校に入り昭和九年三月同校四年を修了した。性質明朗快活にして人を疑はず廣く人と交はりて頗る信頼せられて居た。昭和十一年一月徴兵として大阪歩兵聯隊に入營翌十二年四月渡滿して奉天附近の警備に服し六月上等兵に進級した。而して奉天附近の警備間は兵器被服等諸材料の運搬整理に或は衛兵勤務等に從事し能く上官を輔佐し其功績顯著であつた。更に六月二十七日より八月十一日に至る間は樟川縣太平鎮附近の警備に任じ屢々警戒勤務或は肅正行軍に参加し七月十一日より同二十二日に至る間は大山小隊丹野分隊に屬し輕機關銃射手として興安鎮附近の討伐に参加したが偶々丹野分隊長は一時行李の警戒勤務に不在となるや氏は其間分隊長代理を兼ね克く小隊長を輔佐して勇敢に討伐戦闘に終始した。次いで七月十四日には復歸せる丹野分隊長の下に東筆架山附近の戦闘に参加し輕機關銃射手として敏活機宜なる行動をなし特に匪影を認むるや分隊長の命に従ひ機を失せず迅速確實なる射撃を以て敵に尠からぬ損害を與へ分隊の戦闘を頗る有利ならしめた。

八月十二日突如永安宅に王師長匪約百五十名ありとの情報に接して向井討伐隊が派遣せられた。氏は其討伐隊中村小隊



の傳令として參加したが永安屯より中村小隊は尖兵となり追撃前進中氏は小隊長に跟随し俗稱朝鮮城跡高地（柳樹河子西南方約五軒閉鎖曲線高地）に匪賊の監視兵二名退却中なるを發見するや小隊長より命ぜられて之を討伐隊長に急報し直に小隊長の許に歸着した時敵匪の一部退却中なりしかば直に之に對し的確なる射撃を實施し撃滅した。斯くて氏の報告其他に依り討伐隊長は高地占領の決心を爲したのであつた。斯くて爾後戰團に移るや氏は小隊長と共に匪彈雨飛の間水深胸部



敵に猛撃を加へ肉薄せんとした其利那右方の陣地を占領せる匪賊の輕機銃の爲遂に左胸部に貫通銃創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

氏や滿洲警備の重責を擔ひ精勵克く所命の任務を遂行し屢々危難を冒して討匪の事に従ひ終に綿々盡きざるの恨を遺して柳樹河畔の華と散る然れども其壯烈なる最期は遂に是れ極東恒久の和平を築くの一礎石にして其貴重なる犠牲は千載の

に達する柳樹河及び泥濘膝を没する大濕地を通過する際にも終始傳令任務の重大なるを痛感し小隊長と討伐隊長間の連絡を密接に保持しつゝ巧に高粱畑及藁の小堆積を利用し漸く午後四時匪賊の占領せる高地に迫りついた。此の時逐次増加せる匪賊は各方面より斜射側射を受くるも意とせず侮るべからざる状況であつた爲めに氏は吾が兵員僅少なる事を顧慮し連絡の任務を遂行しながらも射撃をなし敵匪を制壓しつゝ前進し午後六時二十分辛うじて敵前五十米に達した時恰も中村小隊長は匪彈に頭部を打貫れたのである。之を看た氏は怒髮天を衝き猛然立つて小隊長の右前方に出で小隊長を掩護しつゝ

下東亞五族の齊しく敬仰して措かざる所其の功績や赫々として竹帛に輝かん。

氏は即日歩兵伍長に進級大で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 山田和夫

氏は東京市荒川區日暮里町の人にして父は既に歿し母をていと稱し明治四十五年二月二日生れで未だ獨身であつた。資性優良父母に仕へて孝兄妹に對しても優しかつた。交際極めて圓滿にして氏の奉職せる會社内では登山會を組織して其世話役となり毎月一回は必ず登山を實行し心身を鍛練して居つた。氏は又攝影に興味を有し攝影機は氏の出張時の必携品であつた。大正十三年三月日暮里第四小學校を卒業し昭和四年三月府立第五中學校を卒業昭和八年三月日本大學法科を卒業して居る。氏は頭腦極めて明晰にして各學校卒業時には常に首席であつた。

昭和八年六月近衛歩兵第三聯隊機關銃隊へ入營し昭和九年十二月下士適任證を附與されて除隊した。其後明治製菓株式會社へ就職して手腕を發揮し上下社員より厚き信頼を受け前途を囑望されて居た。

偶々支那事變勃發するや召集令に接し獨立機關銃浦野部隊に編入せられ勇躍征途に就いた。九月二十八日より十月三日に亘る吳淞西方地區の戰團に於ては氏は曹家沙附近に於ける戰團準備及警戒勤務に任じ献身的努力を以て任務を遂行した。次で十月四日より同十八日に亘る間は陸家橋及張宅附近の戰團に參加したが十月七日の郭宅附近の敵陣地攻撃に方りては第三小隊第五分隊に屬し六番彈藥手として張宅南側陣地を占領した。折しも第一線中隊は午後三時十分頃敵前約百米に近迫せるも郭宅東北方の敵掩蓋機關銃の側射を受け死傷續出し極めて危険なる状態に陥つた。氏は此状態を目撃するや





憤然として敵重火器の十字火を浴びつゝ率先克く射手と協力し前方堆土に陣地變換を行ひ有効適切なる猛射を開始し敵に多大なる損害を與へ遂に第一線中隊の危急を救援せるに止らず更に突撃の動機を作爲し戦勝の途を開拓した。此時氏の分隊長は不幸にして敵彈に喰れたるを以て氏は直に分隊長代理となり分隊を指揮し適切有効に敵を制壓し以て第一線中隊の突撃を成功せしめたるは實に氏の功績に俟つ所甚だ大であつた。超えて十月十六日には第五分隊長として塘北宅の敵陣地を攻撃するに方り西趙家角西南方約百米に陣地を占領し克く部下分隊を掌握し戦機を看破適切にして重要目標を逐次に撲滅し以て第一線中隊の攻撃前進並に突撃を有利ならしめた。同月十七日より同月二十三日に亘る間は徐家巷附近の戦闘に参加したが氏は依然第五分隊長として二十一日には果敢なる行動を以て敵前數十米に陣地を占領し我に最も危害を與へありし三軒家方向の敵側防火器並に北桃園濱北方の自動火器を逐次迅速に撲滅し以て第一線中隊の突撃を容易ならしめ又二十二日には南桃園濱西北に陣地を變換し配屬せられたる歩兵大隊を猛烈に側射中の敵重火器を撲滅し以て同大隊の攻撃前進を容易ならしめた。

斯くて十月二十四日より同月二十八日に亘り走馬塘附近の戦闘並に追撃戦に入つたが二十四日には第二小隊第三分隊の射手を命ぜられ走馬塘クリークの線に陣地進入を終るや直に正確なる射撃と適切機敏なる敵情監視とに依り有効適切なる射撃効力を収め特に第一線中隊が該クリークを渡河するに方りては之を右方より側射中の敵側防火器を撲滅し以て第一線

中隊の渡河及突撃を成功せしめた。

九月二十九日より十一月五日に亘る間は蘇洲河の渡河戦闘並に追撃戦闘であつたが氏は前記第三分隊の射手となり張巷クリークの線に進出したが敵火熾烈を極め友軍の前進意の如くならず苦戦に陥つた。氏は勇敢にも敵前五十米に挺進陣地を占領し瞬間にして敵の側防火器を撲滅し續いて退却中の敵を發見し正確迅速なる追撃射撃に依り敵に殲滅的の大打撃を與へ以て第一線中隊の戦果を擴張しつゝありしも不幸にして屈家橋方向より飛來せる敵彈頭部を貫通し其場に斃れたが幽かに 陛下の萬歳を奉唱し心靜かに瞑目した。

噫氏や江南戦線へ参加以來實に不眠不休勇戦又奮闘各戦常に拔群の武勳を奏し逝くや死に顔に微笑さへ浮べて居つたとの事である。平素修養の程も窺はれて奥床しき限りである。蓋し一死報國の赤誠に徹底せる者ならでは出来ない事だと察せられる。芳香馥郁たる寒牡丹のそれにも似て幾世も江南戦蹟に大和男子の精華と咲き薫るであらう。見渡す限り江南の地獄戦面して輝かしき皇軍戦捷の陰に氏の尊き犠牲に對し心からなる感謝の涙を捧げずには居られまい。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 山澤 清

氏は大正四年一月十五日鳥取縣西伯郡日吉津村大字富吉に生れ父を清市母をきよのと云ふが氏は未だ獨身であつた。資性温厚にして責任觀念に富み又不屈不撓の氣概があつたが昭和四年三月日吉津尋常高等小學校卒業同六年三月同補習學校卒業同十年三月同青年訓練所全課程を修了した。昭和十一年一月十日現役兵として松江歩兵聯隊に入隊同年七月十日一等



兵に進み兵精勳章を附與せられ同年十二月一日歩兵上等兵に進級の上更に同月十日兵精勳章附與同十二年七月九日善行證書を附與せられた。

支那事變起るや同年七月二十七日福榮部隊第二中隊に屬して征途に就き同年八月二十五日より津浦沿線附近の戦場に參加し九月三日大鄭庄附近の攻撃に當りては當初豫備隊に在りて行動したが第一線に増加を命ぜらるゝや敵の退路を遮断して多大の損害を與へた。九月四日豐庄附近の攻撃に際しては中隊が豐庄東端を占領すると同時に敵は俄然西方の屋上より中隊に向つて射撃を集中し漸次熾烈となり此時所屬第三小隊はその一部を以てこの敵を狙撃すべく命ぜらるゝや氏は率先勇敢に屋上に上りて該敵を猛射制壓し以て中隊の突撃を容易ならしめた。又九月五日中隊が左第一線となり燒密盆の敵に向て攻撃を開始するや敵の銃砲火は愈々猛烈加ふるに土地泥濘前進頗る困難なりしも氏は之を意とせず分隊の最先頭に立ちて猛進し敵前百五十米に達した。此時敵の一彈飛來して氏の腹部を貫通し重傷の爲め進退意の如くならず戦友に助けられて後方に收容せられ厚き手當を受けたが九月七日遂に野戦病院に於て落花の最後を遂ぐるに至つた。



因に燒密盆は唐官宅の東南約三吉米に在る小部落である。此附近は唐官宅の障地と相俟ち防禦上の要點を形成し敵が數ヶ月の日子を費し堅固な陣地を構築して居た。氏の所屬中隊は之を攻撃すべき任務を以て果敢なる攻撃を續けたが連日の降雨に加ふるに馬廠河及南運河の決潰に依る泥水の氾濫は道と云はず畑と云はず浸水し朝へ敵銃砲の十字火は熾烈を極め

我が攻撃前進も甚だ困難であつた。然るに氏は率先勇猛果敢なる行動を以て一隊の志氣を鼓舞し突撃準備中腹部貫通の銃創を受けし場合も意識明瞭にして何クツと叫び前進を續けたが重傷の爲再び起つ能はずして後送された。其際戦友が氏を介抱せんと走り寄りや氏は傷は浅いぞ心配するな今綱帯する時機ではない君等は確かりやれと分隊の兵を勵まし戦鬪を繼せしめた。噫何たる尊き言葉ぞや戦友等は氏の尊き言動に萬感胸に迫り悲憤の涙を抑へつゝ勇戦奮闘遂に敵を粉砕して光輝ある戦勝を獲得した。氏の肉體は今や歿したが氏が忠勇武烈の英靈は照々として萬古に生き其名は末永く語り傳へて軍人の勳鑑と仰がるゝであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 松井時茂

氏は大阪市西成區粉濱東ノ町の人にして父を幸三郎母をギンと云ひ大正四年四月廿七日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和四年三月小學校を卒業し續いて商業專修學校前期を卒業し爾後家に於て父の業を助け其傍ら青年學校に學び卒業した。資性温順酒も煙草ものもせず只管父母に孝養を盡し在隊間休日には家に歸り家業を手傳うを常としてゐた。又青年學校に入校せし際入學者の餘りにも少いのを慨き入資格者を論し其父兄にも説明し遂には在學者數百餘名に達し模範青年として表彰せられた。昭和十一年一月現役として大阪歩兵聯隊に入營翌年四月滿洲に派遣せられ警備其他の諸勤務に精勵し殊に昭和十二年七月二十日より廿九日に至る樺川縣蘇家店附近の討伐には第三分隊長とし連日の豪雨惡路を冒し肅正行軍の上二十五日東板子房に於て土匪を討伐し八月六日より同九日に亘る富錦縣西安鎮附近の討伐には第四分隊長(擲彈筒)長とし



て同嶺西方八軒の大平嶺の青山匪討伐をなし何れも適切な指揮により勇戦奮闘多大の損害を興へ大なる武功を樹てた。  
 九月八日午後二時頃富錦縣五頂山附近に共匪三百在りとの報に接し中隊は之を攻撃するに決した。此際氏は尖兵小隊の擲彈筒分隊長として急進午後五時半頃五頂山西側部落に到着續いて中隊展開後左第一線小隊の後方にあつて猛烈なる敵火の下巧に地形を利用し五頂山高地脚に取り付き小隊長の命により頂上の敵を猛射し午後六時機熟し小隊長突撃を命ずるや



峻なる山地を攀登小隊長に續いて突入部下分隊を適當なる地點に進出せしめ直に射撃を開始し有効なる射撃を送り共匪に大なる損害を興へた。然るに此時右側方より飛來せる敵彈の爲め右足部を貫通せられ分隊長の右側にゐた岸本二等兵は其の出血を見直に之を繙帯せんとしたが「自分は大丈夫だ擲彈筒のことを頼む」と叫び部下に射撃目標を指しありしが午後六時三十分頃岩本小隊長負傷の事を聞き期せずして「教官殿」と叫ぶと同時に右斜方向より飛來せし敵の一彈は氏の頭部を貫通し氏は尙擲彈筒のことを叫びつゝ壯烈なる戦死を遂げた。松井伍長は初年兵當時より岩本少尉の當番兵として少尉の身邊に影の形に添ふ如く常に其身を庇護し來り小隊長を思ふ切實なる衷情は單に上官部下としての隸屬關係に止まらず互に相許し相信したる間柄にして氏が負傷しつゝも岩本少尉の負傷を聞き思はず「教官殿」と叫んだのは人情極致の發露であり皇軍の上下渾然一體となり精悍無比なる一要素と稱すべく尙氏は擲彈筒分隊長として特種兵器の性能を發揮して敵をして有形無形上の威力に驚愕せしめ小隊をして戦勝の端緒を開かしめた。其功績は拔群なる而已ならず擲彈筒に對する尊

重と愛護の信念は死に至る迄擲彈筒の事を叫びたるを以ても察知せらるゝ次第である。天は此勇士に幸せず命を滿洲の廣野に隕す雖も其死は友邦滿洲國の治安に資し其功績は生々發展する同國の興隆と共に永く稱せられるであらう。

氏は即日歩兵伍長に任官次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 牧田正三

氏は北海道常呂郡野付牛の人にして明治卅五年十一月一日生れで兩親は既に歿したが父は金藏母はタカと稱し妻清子との間に長男正嗣以下三人の愛子がある。

氏は性温良家庭に在りては父母に孝兄姉に對する愛情亦濃やかであつた。又妻子に對しては嚴格なる一面極めて朗かで優し味もあつた。職務に對しては極めて忠實にして會社の上役並に部下の者より絶大なる信用を受けて居つた。大正七年三月郷里の高等小學校を卒業同十一年十二月歩兵第廿七聯隊へ入營同十三年十月歸休となつた。在營間の成績も極めて優秀にて除隊に方り下士適任證並に善行證書を附與されて居る。大正十四年四月より野付牛鐵道車掌區へ就職して三年間勤続したが昭和三年五月より樺太眞岡町の王子製紙株式會社へ就職し山林部出張所に勤務して居つた。

昭和十二年八月三十一日勇躍某歩兵部隊に應召し間もなく征途に就いた。氏の参加せる戰場は奥湊クリークの邊り東郭洞濱であつた。時は昭和十二年十月十日氏の所屬せる篠原中隊は東郭洞濱に位置し金家宅より小宅間の戦鬪並に警備中左記要旨の大隊命令に接した。

第三中隊は鐵舟に依り沈家宅に於てクリークを渡河し西唐橋に進出し紀家橋の右岸を占領すべし。第四中隊(篠原)は小



宅より前面唐家宅の敵を猛射し之を制壓すべし。

所屬中隊長は此命令に接するや豫備隊を第一線に増加し自ら指揮班を随へ小宅の第一線に進出して戦闘の指揮を執つた。氏は此時中隊長の命令に依り支那家屋上に在りて姚家灣に展開せる第二中隊の射撃開始を監視中第二中隊よりの合圖を確認して中隊長に報告するや所屬中隊も一齊に火蓋を切り敵を猛射した。敵亦重機銃及小銃を以て猛烈なる應戦を



なし凄惨の光景は名状すべくもない。就中氏の身邊は彈雨の中に晒されたが氏は泰然自若不屈不撓の精神を以て難局に當り克く其任務を完了した。斯くて同月十三日には中隊長常盤野中尉の指揮下に中隊指揮班連絡係りを命ぜられ奮戦した。

十月十二日夜所屬中隊の第二小隊長は部下三分隊を指揮し江家宅に派遣されて居たが當面の曹宅張家宅の敵と猛烈なる戦闘を開くに至つた。同小隊は全般戦線の關係上十字火を受け小隊長以下の安否は甚だしく氣遣はれたから中隊長は鎌戸軍曹を連絡長として派遣を命じた。此時氏は自ら進んで鎌戸軍曹の指揮下に連絡兵たらん事を懇望した。中隊長は氏の進んで難局に當る意氣に感じ之を許可したるに氏は大に喜び勇躍江家宅に向ひ出發した。竹林に沿ひ挺身する事百米今や開霽せる細畑に差掛り身を屈して約五米を進出するや左前方張家宅に陣地を占領しありし敵陣地より猛射を浴びた其隣頸部貫通の重傷を負ふ。時に十三日午前六時五十分である。其後氏は厩村第四野戦病院に收容されたが哀れや同日午前十時遂に殉難の華と散つた。

凡そ指揮班の連絡勤務の適否は戦闘の勝敗に重大なる影響を及ぼすは近代戦の一特色である。されば其要員には適任者を厳選さるゝは素より當然であるが慧敏にして剛毅熱心にして沈着常に進んで難局に當り職責の存する所水火をも辭せざりし氏の如きは典型的の人材であつて多年の修養と確乎たる信念を有する者ならでは實現は困難であらう。常盤野中隊長は深く氏の忠誠に感じ哀悼極まりなき弔詞を遺族に寄せて居る。即ち當時の戦況通報を要約すれば中隊主力陣地の南方約五百米にある江家宅を占據せる第二小隊は敵の猛射を受けつゝ孤立しあるを氣遣ひ連絡員を派遣するの必要に迫られたが此地を既に數回往復せる氏は自ら進んで難局に當つた。而かも途上約三分一は敵前に暴露せる地帯であつた。氏は用意周到に地形の特性を承知し今や急速躍進に移らんとする際恰も其稜線出現を待ち構へた敵の重機銃の猛射を受けた次第である。負傷せる氏を中隊本部に後退せしめ假纏帯を施し戰友等は牧田確りせ！と勵ませば氏はウンと肯く程度であつたが受傷後一時間四十分野戦病院の完全手當の終つた時は忠魂既に肉體を放れて居た。氏は應召以來實に誠心誠意活躍し中隊團結の一礎石を成形して居た者で哀情窮なしと切々の筆を執つて居る。

宜なる哉即日歩兵伍長に任じ勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつたことや。

### 陸軍騎兵伍長勳八等功七級 深堀 博

氏は長崎市山里町の人にして亡父を道三郎母をヒデと云ひ大正二年十一月五日を以て生れ未だ獨身であつた。性質温厚篤實で昭和八年三月海星中學校を卒業同年六月佐世保海軍工廠に採用せられ在職一年有半にして昭和九年一月現役兵として久留米騎兵聯隊に入營同年十二月上等兵に進み翌十年十一月射撃優秀を以て射撃徽章を受け次で善行證書を附與せら



れ十一月末日満期退營した。

昭和十一年二月長崎重工業三菱製鋼所に入社し勤務中昭和十二年九月應召小池部隊に編入せられ十月中支方面の征途に上り機關銃小隊第二分隊射手として十一月十九日楓徑鎮附近の戦闘に参加し勇敢に奮戦特に中隊の威力偵察の實行に方つては自己の危険を顧みることなく射撃を繼續して敵を制壓し以て中隊の敵情偵察を容易ならしめた。續いて翌十一月十日嘉善附近の戦闘に於ては松田大尉の指揮に屬し機關銃小隊第二分隊射手として追撃に任じ松州部隊が長濱(嘉善東方)西方クリーク橋梁に達するや錢家濱東側のトーチカ陣地より突如敵の猛射を受けた。機關銃第二分隊は中隊の展開を掩護するため直に機關銃を卸下し本道右側にありし堆土に陣地を占め敵の猛火を冒して該トーチカを制して敵の心膽を寒からしめ其猛威を抑壓し遺憾なく其優秀なる射撃するに努め適確なる射撃撃技術を發揮したるが午後六時稍前不幸敵弾のため臀部に盲管銃創を受けて後送せられ惜くも十一月二十日第一兵站病院に於て落花の最期を遂げた。併しその勇敢なる射撃は橋梁東側トーチカの敵を撃退するの原因を作爲したと謂ふべきである。

嗚呼氏の豪膽沈着は克く友軍の志氣を鼓舞し慧眼克く戦機に投合する正確なる射撃を以て重要目標を制壓し以て敵情捜索を容易ならしめ或は之を潰滅して敵の心膽を奪ひ突撃の動機を作爲した。聖戦半ばにして斯る男子を失ひしは寔に痛惜に堪えないが天晴皇軍の精華として其名は江南戦史に輝き不滅の勳功は彌高く仰がるべであらう。

氏は即日騎兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍工兵伍長勳八等功七級 藤井政吉

氏は千葉縣君津郡昭和村の人にして父を寅吉母をいせと云ひその次男で一兄及び四人の弟妹を持ち大正元年八月十四日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚にして義務心強く昭和五年三月昭和尋常高等小學校を卒業後父母を助けて農漁に従事し昭和八年十二月赤羽工兵聯隊に入營し勤務に勤勉で殊に漕舟に至つては入營前の経験と相俟つて優秀自他共に許してゐた。同十年上等兵に進級し満期除隊となり業務に精勵克く良民として在郷軍人の名譽を保ち郷黨の信望厚かつた。

昭和十二年十月支那事變に應召小金澤部隊に編入せられ勇躍江南方面の征途に就いた。

應召以來晝夜の別なく輸送業務其他の勤務に精勵し十一月十日軍が杭州灣に敵前上陸を開始するや敵は死力を盡して妨害し爲めに我死傷も相當續出し之が收容と又一方第一線の前進は驚異的神速さであつた爲後方輸送の施設は之に伴はなないので上陸點附近は猫の手も借りた状態であつた。當時氏は千載の一遇此時とばかり舟長として死傷者を双橋に集收し或は彈藥の輸送に渾身の努力を續け其功績は赫々たるものがあつた。

昭和十二年十一月九日以降湖州攻撃に移るや所屬中隊主力は片岡先遣部隊に協力し同隊を鐵舟或は木舟に分乗せしめ同十九日双橋を出發意氣軒昂運河の廻江を始めたのである。氏は先遣隊の耳目たる搜索歩兵隊に協力し敵の正規軍或は地方保安隊又は土民軍等を逐次撃破掃蕩し二十二日湖州東南三里強の袁家涯に到着茲に湖州一番乗りを腦裏に描き嚴重なる警戒の裡に一夜を徹し明ければ十一月二十三日午前五時三十分周圍の風物夜の帳に包まれある時先づ將校斥候出發次いで尖兵が出發した。氏はその尖兵を乗船せしめ舟長として搜索隊の尖端にあつて發航クリークの水はつめたく竿持つ手は切れ



る程痛い。斯くて湖州南方一里半の地點で敵將校の指揮する約一小隊の敵と遭遇し之を血祭に上げて運河の濶層たらしめ更に尖兵は左方山地にある敵に對し攻撃前進して鎧袖一觸之を潰走せしめたる後再び舟航を續け正午湖州南方約二杆の金蓋山麓に停舟尖兵を下船せしめた。後氏は舟員三名を上陸せしめ直接敵情の監視警戒に任じさせたが突然前後の山腹より



機關銃の猛射を受け直に陸上の三名に應戦を命じた。一方前進せる歩兵尖兵も頗る苦戦し速に此現況を後方に報告せられたしとの要求があつたから船中の氏は決死之を報告せんとした。其時船體には數發の敵弾を受けたが氏は敢然として鐵舟を推進すること約十米此時不幸にも左胸部より右胸部に亘る貫通銃創を受け午後一時三十分擧竿を握つた儘壯烈なる戦死を遂げ江南の華と散つたのである。氏は敵前上陸倭德の際重要な任務を以て上陸作戰の遂行に資し爾後湖州攻撃に方りては上陸軍の名譽と湖州併呑の意氣に燃え五日間に亘り漕いで漕いで漕ぎ抜き手皮は破れ全身綿の如くなる迄歩兵部隊と

完全なる協力の實を擧げ爲に我部隊の神速なる前進により敵の心膽を寒からしめ遂に敵をして南京拋棄を速かならしむる素因を作つた次第である。  
噫氏の肉身は遂に江南の花と散つた。然かし其の忠魂は永へに生き護國の神として祀られ其赫々たる武動は假令長江の流れ絶ゆる時あらんとも後の世に盡くる事あるまじ。  
氏は即日工兵伍長に任ぜられ次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 藤原 裕

氏は岡山縣兒島郡日比町大字玉の人にして家庭には母善及愛兒侃あり。明治四十四年九月十九日の生れ大正十三年三月玉尋常高等小學校尋常科を卒業昭和七年現役兵として入營翌八年上等兵として滿期除隊し昭和十二年八月事變のため應召



赤柴部隊に編入せられ八月十日北支方面の征途に上り同日二十日より九月四日に亘り行はれたる津浦沿線の戦闘には第三中隊第一小隊長の指揮に屬し八月二十二日楊柳青の警備を交代東邊庄に於て苦戰中なる第一大隊は彈藥糧食の運搬を命ぜられ前進せしが午前五時西邊庄北側に於て敵の一部と遭遇交戦す。此時氏は第一小隊第四分隊にありて分隊長を輔佐し勇敢に奮闘遂に敵を撃退し翌二十三日東邊庄に到着彈藥糧食を交付し同夜の夜襲戦にも參加奮闘した。次いで八月二十九日陳官屯附近の戦闘に次では所屬第三中隊は當初尖兵として前進し後第一線となり氏は終始克く危険を冒し勇戦した。更に又九月三日よりの唐官屯附近戦闘に方りては三日午前九時三十分行動を起し午後二時第一線たる第一小隊第四分隊員として攻撃準備位置に就きしが此時敵は迫撃砲及小銃を以て猛射を加へ來り一進一止夜に入りて漸く敵前四百米附近に突撃準備の陣地を占領し徹夜陣地の構築に従事した。然かるに夜半豪雨至り寒氣頓に加はり壕内は雨水流入して腰部以下を浸し加ふるに敵彈の飛來終夜絶ゆる事なく陣地構築作業の進捗爲めに著しく阻害され漸く抛擲其完成を見るに至つた。明くれ



ば四日午前八時我砲兵の第一次支援射撃の開始と共に所屬中隊は一舉に前進を起し敵陣に近迫した。之がため終始我に集中射撃を浴せつゝありし敵の突角陣地は沈黙するに至つたが其兩側よりする十字火は猶未だ已まず此に於て我砲兵の第二次支援射撃の下に第一線は勇敢に敵陣に突入し遂に之を占領し續いて陣地内殘敵を掃蕩し逐次後方の敵を撃破しつゝ尙も前進中氏は右胸部に貫通銃創を受け續いて他の一弾は前頭部を貫通し終に壯烈なる戦死を遂げた。時に午前九時であつた。

噫、氏や不眠不休敵火の下降雨と戦ひ寒苦に抗して陣地の構築に努力し更に勞軀を挺して頑強なる敵陣の強襲に従ひ遂に壯烈鬼神も哭するの最期を遂ぐ。

戦果氏の肉眼を憐ばす能はざりしを憾むと雖も氏の死や決して徒爾にあらず爾後僅々一時間半を経て目指す唐官屯は其の南端に至るまで完全に皇軍の占有に歸したり。

去つて護國の神座に就かんとするに先ち氏の英靈亦必ずや偉大の戦績に満足されたことであらう。

氏は即日陸軍歩兵伍長に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 福本勝治

氏は兵庫縣揖保郡神岡村澤田の人にして父を彌一母をたけのと稱し大正二年七月二日生れで未だ獨身であつた。資性温順にして勤勉又責任觀念に富み世人の信用も厚かつた。大正十五年三月神岡尋常小學校を卒業し次で龍野商業學校に入り二學年修了の後家事の都合にて退學し父母の業を手傳ひ昭和八年十二月當時滿洲にありし歩兵第三十九聯隊に入營し新京

附近に於て警備に任じ嚴寒酷暑に耐へ克く其任務を完うし滿洲建國當時に於ける基礎工作に貢献したる結果昭和九年四月勳八等に叙し瑞寶章を賜はり又滿洲建國功勞章を受領し同年四月内地に歸還し翌十年十月劍術優等章及善行證書並に下士適任證書を附與せられて除隊となり歸郷後は部落在郷軍人會幹部を勤めてゐた。

昭和十二年八月支那事變のため應召沼田部隊に編入せられ北支方面の征途に就き上陸後は連日の豪雨と河川氾濫せる浸



水地帯を或は泥濘なる悪路に悩みつゝ之を踏破し八月二十五日より

九月十四日に亘る馬廠附近の攻撃戦には岡本隊第二小隊小銃手として三間房附近の警備に任じ次いで滄州附近の戦闘に於ては九月二十二日には馬落坡附近翌二十三日、二十四日は張新庄附近の戦闘に参加し勇敢よく自己の任務を達成した。次いで德州に向ふ追撃戦に於ては九月二十七日于庄附近二十八日劉八里庄附近の戦闘に又十月二日には小屯附近の戦闘に参加し勇戦奮闘してあらゆる追撃に追撃を重ね空陸よりする敵火の下或は峻嶺を攀ち或は晝夜水中に戦ひ或は喰うに食なく或時は敗殘兵の奇襲に故郷の夢を破られ具に艱難辛苦を嘗め之を堅忍克服した其勞苦は恐らく實戦の經驗なき人には想像の及ばぬものがある。

其後黃河北岸の掃蕩作戦間に於ては堀尾部隊長の指揮せる第一線中隊に屬し第二小隊第一分隊の小銃手として十一月八日午前五時行動を開始し張家を占領したる後引續き苗家に向ひ午前九時攻撃を開始し薄暮頃には敵前に近迫したが敵の主陣地よりする射撃は勿論村落の圍壁外に築設せる掩蓋の機關銃による猛射のため突撃は遂に不成功となつた。茲に於て該



掩蓋機關銃撲滅の必要を生じ富田伍長の指揮する一班を以て之に任ぜられたが氏は該班に参加を志望して主力攻撃班の右翼より前進し敵の猛射を浴びつゝ遂に同掩蓋機關銃に迫り手榴弾を投擲して該銃を覆滅した。然るに圍壁内の敵は爰を先途と手榴弾或は小銃により我が攻撃班に對し死に者狂ひの射撃を浴せたるため氏は不幸にも頭部に貫通銃創を受け倒れたが意識明瞭にして「我傷淺し心配するなかれ」と戰友を勵ます其心根こそ悲壯にも亦尊いものであつた。されど出血多量の爲受傷後十時間にして護國の神に歸幽した。然かし本戰闘に於ける氏の大膽不敵の決死的動作により能く敵機關銃を撲滅したため我部隊の突撃を容易にし遂に光輝ある戰勝を獲特するを得た。寔に是れ忠勇武烈軍人の龜鑑と謂ふべきであらう。

氏は即日歩兵伍長に任ぜられ後勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 深谷昌之

氏は福島縣東白川郡常豐村大字下渡井字桃木の人にして父を京藏母をトヨと謂ひ大正三年十二月二十七日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和四年三月常豐尋常高等小學校を卒業し爾後家業に精勵して居た。性質淳良にして特に友誼に厚く昭和十一年一月現役兵として若松歩兵聯隊に入隊し選ばれて陸軍歩兵學校教導聯隊要員として同校に分遣せられ翌十二年四月には歩兵上等兵に進み滿洲派遣部隊に編入せられたが氏の所屬部隊は哈爾濱東方鳳山附近の警備に就いた。氏は中隊の主力と共に鳳山にあつて警備の勤務に服する傍中隊被服掛助手として主任曹長を輔佐し複雑多岐に亘る業務を勞を厭はず獻身的に遂行して中隊の警備討伐行動を容易ならしめた。又同年八月下旬には小坂橋隊分隊長として瑪瑙河附近の警備に

任じたが人員少なく警備の諸勤務頗る繁劇なる中であつて氏は能く駐屯隊長を輔佐し積極的に任務を遂行し一面部下の士氣振作に努めて警備の萬全を期し顯著なる功績を挙げた。越へて九月六日午後一時過ぎ密偵の報によつて當日午前十時頃匪賊約二百名が金河堡に侵入蟄居して居ることを知り小坂橋隊は兵力小數なるも直ちに之れを討伐するため金河堡に向ひ急進中瑪瑙河屯南方一軒附近にて人見隊に遭遇したため人見隊長は小坂橋隊並瑪瑙河屯警察隊をも併せ指揮して該匪賊を



擊滅するに決して前進した。而して午後二時半頃金河堡西側地區に達した際同方面より猛烈なる射撃を受くるに及んで敵は該部落附近に陣地を占領して我が軍に抵抗せんとして居ることを知り人見小坂橋兩隊を展開して攻撃に移つたのであるが時恰も高粱の繁茂期であり如地一面丈餘の高梁を以て蔽はれ通視困難なるばかりでなく前進も亦大いに阻害されたので小坂橋隊長は第二分隊長として奮闘中の氏に前面の敵情特に敵の右翼の情況を搜索することを命じた氏は直ちに部下の兵二名を率ゐて勇躍敵彈雨飛の中を巧みに前進して敵情を搜索し苦心の結果敵第一線の情況特に敵自動火器の位置を確認し

之を部下の一名に命じて小坂橋隊長に報告せしめ自ら更に敵の右翼の位置を確認めんがために左前方に前進をしたが敵は我が斥候の位置を発見したるものゝ如く益々盛んに小銃弾を集中して來たが任務遂行に對する熱烈なる意氣を有する氏は敵彈の如きは意に介する風なく高粱の間に身を提出して敵の位置を視察する瞬間敵の一弾は氏の腹部に命中して重傷を負ふに至つた。然かし責任觀念の旺盛なる氏は毫も屈する色なく應急の手當を爲し苦痛を忍んで尙も敵右翼の位置を確認んと



せし際更に一弾は再び氏の左腹部を貫通して氏は其の場に倒れた。然しながら飽く迄剛毅なる氏は其の目撃したる敵情を部下をして隊長に報告せしめやうとして居る際氏の第一次報告によつて敵情概ね判明せしため小板橋隊長は猛烈なる攻撃を敢行して隊長自ら氏の位置に来るや氏は苦痛を押して自ら敵情を報告した。これによつて部隊長の攻撃に關する決心は確定せられ攻撃は益々有利に進展して遂に優勢にして頑強であつた敵を撃滅するに至つた。氏は直ちに哈爾濱陸軍病院通河分院に收容せられ最善の治療を受けたのであつたが遂に其効なく九月七日午前三時二十分惜しくも北支の華と散つたのである。

氏や責任觀念の旺盛なる二弾を腹部に受け既に立つ能はざるべきの重傷を負ふて毫も意識を失はず所命の敵情搜索を遂げ機宜の報告を誤らず爲に危きを轉じて戦捷の端を開く。眞に忠勇義烈の士にあらずして豈克く斯の如きを得ん。殊に重傷の苦惱を忍んで自ら部隊長に敵状を報告せし壯烈の状は全員の志氣を鼓舞振起せしめしこと亦固よりして其功績や拔群其の勇や武人の龜鑑として千載に傳唱すべきものと謂ふべし。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷲勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 近藤 倍雄

氏は兵庫縣印南郡大鹽町の人にして父を吉松母をよそ妻を八重子と云ふ。大正二年八月十二日を以て生れ昭和三年三月大鹽尋常高等小學校高等科を卒業次で青年訓練所に入り昭和八年十二月同所を終了した。性眞摯にして父母に仕へて極めて孝行であつた。昭和九年一月現役兵として福知山歩兵聯隊に入營し同年二月滿洲事變のため渡滿該地の討匪警備に任じ

其功に依り勳八等白色桐葉章を賜り十一年一月上等兵に進級満期退營した。

昭和十二年八月支那事變のため應召沼田部隊に屬し北支方面の征途に上り早くも同月三十日三間房附近の攻撃には機關銃隊隊兵として参加し道路泥濘腰を没する間をよく馬匹を愛護誘導し以て戦闘参加に支障なからしめ次で陳官屯に轉進の際も九月一日前進を起すや道路泥濘或は腰を没する水路を行進しあらゆる困難を排して中隊の陳官屯集結を遺憾なからし



めた。又九月九日丁莊の夜襲に際しては第二小隊第四分隊六番彈藥手として参加し午後十一時行動開始丁莊の側背に進出して大隊の第一線部隊たる所屬中隊が陣地に突入せんとするや敵守兵は之を察知して重機銃及び小銃を亂射し加ふるに迫撃砲の射撃を行ひたるも氏は毫も意とすることなく水深五六十呎の間を斷乎として中隊に跟隨し東部丁莊に突入し一舉に同部落の西北角に進出す。此時自動火器を有する西部丁莊の敵は猛射を加へ我前進を阻害するを察知するや直に敵火を冒して機銃陣地を占領し活動中の敵自動火器に對し猛火力を集中した。而して氏は敢然として其彈藥補充に任じ小隊の任

務達成を遺憾なからしめた。九月十三日より滄州附近戰團に於ては同じ六番彈藥手として参加し九月二十一日夜馬落坡附近の敵陣地夜襲に方り尖兵中隊が敵の前進陣地を攻撃するや敵前五六十米に於て敵の守兵の發見する所となり猛烈なる射撃により其前進を阻害せられた。此の時氏の屬する機關銃分隊は敵自動火器を猛射して之を沈黙せしめ以て尖兵中隊に突入の動機を與へ爾後第一線の前進に先んじ勇敢に敵主陣地前二百米の點迄進出した時俄然前方の掩蓋機關銃より猛烈な



る射撃を受くるに到り所屬小隊は直に同地に陣地を占領し掩蓋銃座より發射する敵の側防火器に對して猛射を行ひ敵に多大の損害を與へ第一線中隊の前進を容易ならしめた。然かし當時機關銃隊彈藥補充は敵火と地形上頗る至難で在つたが沈着剛膽なる氏は敵の十字火を浴びながら膝を没する沼澤地を這ふが如く全力を盡して彈藥補充に努力したが偶々敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

因に所屬中隊長代理中根少尉よりの來信に依れば氏は平素より中隊の模範兵にして戰團に勤務に將兵一般の絶讃を受け居つた。氏が戦死當日の戦況は敵の前進陣地たる重要據點馬落坡を夜襲を以て攻略するに在つた。實にや當夜は午後十時軍旗に訣別し將兵皆決死の覺悟を定め氏の機關銃小隊は尖兵中隊に配屬され肅々として敵陣地に近迫した。あゝ中秋の明月は隈なく照り渡り夜襲に適せぬ夜であつた。忽ち敵の發見する處となり急霰驟雨の如き猛射撃を浴びたが氏は毅然として前記の如く勇猛果敢なる奮闘を續け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに方り。陛下の高歳を奉唱して瞑目したとの事である。噫、氏や郷に在りては善良なる孝子であり軍に従ひては忠勇なる精兵であつた。而して參戰以來堅忍不拔難路を征服し又動かば必死の彈雨下に彈藥補充の難局に直面し唯々一死報國の至誠に燃えつゝ遂に聖戰の尊き犠牲となつた。されど其犠牲空しからず所屬隊をして赫々たる武勳を奏せしめた。眞に是れ軍人の本分を全うしたるものにして天晴軍人の龜鑑であり其功績は皇軍戦史に清き光を放ち其名は千載に芳ばしく其英靈は護國の神として永世に生き皇國並に遺族の上に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 小林 三郎

氏は兵庫縣佐用郡江川村末包の人にして父を藤吉亡母をいしと云ひ大正三年九月五日を以て生れ未だ獨身であつた。性温厚にして謙讓頗る忍耐力に富んでゐた。昭和四年三月二十六日江川小學校高等科を卒業し昭和八年十二月現役志願をし



て姫路歩兵聯隊に入營翌九年滿洲に派遣せられ警備勤務に従事した。同年上等兵に進級昭和十年滿期退營の後滿洲事變の功により勳八等瑞寶章及び金百圓並に従軍記章を賜はつた。昭和十二年八月今次事變のため應召し沼田部隊に配屬せられ北支方面に出動し其輸送集中間はよく上官の指示に従ひ従心勉勵或は衛兵勤務に或は炎暑の下泥濘膝を没する惡路を行軍し後輩戰友を鼓舞激勵しつゝ其任務を全うし八月二十七日には愈々敵攻撃の爲第三小隊第一分隊員として午前二時四十分出發四黨口に向ひ前進を起した。時恰も暗夜加ふるに水深尺餘の難路を跋涉し以て四黨口に達し午前九時三十分攻撃を開始し敵前三百米附近の線に進出したが當時敵の銃砲火は猛烈を極め爾後の前進頗る困難で在つた。然かし氏は毫も屈せず益々勇を鼓し沈着剛膽一進一止して有利なる地點に進出し正確なる射撃と共に敵情地形を分隊長に報告する等常に上官を輔佐することを怠らなかつた。而して午後三時所屬中隊の主力は四黨口を確保したが此際氏は前面の敵と伏射交戦中午後四時三十分頃敵前八十米の地點に於て背部貫通脊髄撲傷の重傷を受け天津軍病院に收容せられ手厚き治療を受けたるも



九月十四日午後二時三十分惜くも北支戦線の華と散つた。然し氏の積極且決死的の行動は獨り分隊の志氣を作興せしめたるのみならず所屬中隊全般への刺激ともなり以て戦勝獲得の素因をなしたものであつた。「花咲いて初めて賞つる菖蒲かな」比較的波瀾なき戦場裡に堅忍持久戦力を培養し遂に光輝ある戦勝を獲得す。氏に於て之を見るの感がある。其尊き犠牲こそ崇高なものであつた。聖戦の中道にして此勇士を喪へるのは痛恨とする所であるが其勳功は皇軍華北戦史を飾るべく其英靈は護國の神として尙活躍すべく而して質實剛健而かも謙讓なりし氏の一生は既に幕を閉ぢたが其名は清く芳ばしく千載に語り傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 後藤 勇 雄

氏は栃木縣那須郡伊王野村大字養澤の人にして父を雄鳥亡母をセキと云ひ大正二年一月二十七日を以て生れ養父澤治養母をトメと云ふ。氏は未だ獨身であつた。資性着實剛健にして氣概に富み其出征時には生きては歸りませんと堅く誓つて家人に訣別して居る。大正十四年三月養澤尋常小學校を卒業續て伊王野高等小學校に入學昭和二年三月同校を卒業し昭和八年十二月現役兵として宇都宮歩兵聯隊に入營同月直に滿洲に派遣せられ該地の警備に任じ功により勳八等瑞寶章を賜はつた。

昭和九年六月陸軍歩兵學校教導隊に分遣せられ同年十二月上等兵に進級翌昭和十年五月原隊に復歸し同月末善行證書を附與せられ歸隊除隊となつた。昭和十二年八月事變のため應召坂西部隊に編入せられ北支方面の征遂に就き十一月八日院

集附近の戦場に於ては尖兵に屬して前進し戦闘開始と共に中隊の左第一線たる第三小隊の擲彈筒分隊に屬し敵の猛火を胃し彈藥の補充並に射彈の觀測に努力し突撃に方りては分隊長と共に部落に進入力戦奮闘した。續いて同日郭仕堂附近の攻撃には左第一線小隊に屬して彈藥の補充に又射彈の觀測に努力し突撃に際しては勇敢に敵陣に突入して敵一名を刺突し他の數名を射殺した。次で十一月十日より十一日に亘る大名攻略戦に於ては中隊の右第一線小隊たる第二小隊に在つて十一日正午戦闘開始をしたが敵火は漸次熾烈となり而かも何等利用すべき地物なかりしも常に勇敢に攻撃し斷へず敵情に注意し以て我に最も危害を與へつゝありし敵の側防機關銃を發見して之を報告し其結果之に對する射撃開始せらるゝや氏は正確に射彈を觀測して制壓の効果を挙げしめ小隊突撃に移ると共に分隊長に續いて勇敢に敵陣に突入したが敵陣地前三十米に達せし時不幸胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。誠に本戦闘中敵の側防機關を發見し之を制壓したる其功績は拔群にして戦捷の素因をなしたものである。因に氏の所屬中隊長齋藤大尉の來信に依れば氏は出征以來頗る元氣にして警戒に戦闘に常に積極的に任務を遂行し他兵の模範となすに足るものであつた。十一月十一日は敵將宗哲元が最後の抵抗線と頼める大名城に據り難攻不落を誇りし堅陣に對し中隊は先頭第一に之を攻略したのであつた。中隊が攻撃を開始するや敵は一齊に銃砲火の火蓋を切り眞に十字の猛火を射注ぎ面を向けん方もなく地形平坦開潤にして全く據るべき地物なく死傷續出し一時は中隊も危殆に瀕したが氏の勇敢無比の行動に激勵され午後五時遂に第一線陣地を突破するを得たのである。而して夕刻より夜に亘り攻撃を再興し午後七時遂に敵を壓倒して一番乗をなしたのであるが勝敗一決の跡を顧みれば氏等七名の尊き犠牲と三十餘名の負傷者を出したるは小官の不徳の致す處伏して御詫び申上げる云々とある。又氏の祖父澤治翁は流石に武家育ちの氣質にて國家の爲お役に立ち戦死とは家門の譽れです孫の曾祖父も會津戦争で戦死して居りますと健氣に語つて居る。氏や父祖の血を承けて忠勇義烈辨々たる武勳を奏し護國の神となつた。寔に是れ軍人の龜鑑



其名は永く皇國戰史に異彩を放つであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍砲兵伍長勳八等功七級 後藤 武夫

氏は大分縣大分郡植田村の人にして明治三十五年六月四日生れである。亡父は源平母はフキエと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性温厚率直にして孝心厚く弟妹に對する情愛も深かつた。氏に妻帯を勸めても今暫くと耳を藉さず昭和九年に父を喪ひし以來は母及弟妹四人の爲一家の中堅柱石となり毎日二里の行程を往復して日本羊毛會社大分工場に通勤し直屬幹部を初め同僚一般の信望を一身に集めて居つた。特に母に對しては恰も娘の如く優しく仕へ近隣の風評も誠に麗はしいものであつた。大正七年三月郷里の高等小學校卒業後は大分市在住の叔父の許にて精米業に従事し昭和六年一月野戰重砲兵第六聯隊へ入營歸休除隊後は暫く家庭に在りて農業に従事し昭和九年以降は前記の羊毛會社に入社し現業班長に拔擢せられて居つた。

支那事變勃發するや昭和十二年八月四日應召遠藤部隊に編入せられ一番砲手として勇躍征途に就いた。氏は應召以來日夜の別なく輸送業務其他の勤務に精勵し衆の模範となつた。斯くて九月七日より同月十四日に亘り永定河の戰闘に参加するに至つたが所屬隊が九月七日行動を起すや常に熱心積極的に火砲材料の愛護手入に努め愈々永定河右岸地區に地陣を占領し射撃を開始するや敵亦猛烈に應戦し文字通りの敵彈雨飛耳を撃せん許りの悲壯なる光景となつた。併し氏は神色自若最も正確なる操作をなし火砲の全威力を發揮した。

同年九月十五日より二十日に亘り固安城の戰闘に参加したが所屬隊は十六日午前八時二十分行動を起し午前九時より午後七時迄射撃を斷續した。而して午前十時二十分固安城の城壁破壊の爲同城北側約四百米附近に陣地を占領し射撃を開始するや敵彈雨飛の下に於て危険を顧みず勇敢沈着に操作し特に距離割合正確にして初發より命中彈を得中隊長の射撃指揮を著しく容易ならしめた。偶々敵の砲彈が砲側に炸裂し其破片に依り右手及腹部に重傷を受け其場に打倒れた。氣丈の氏は渾身に力を罩め起たんとしたが力及ばず遂に昏睡状態に陥つた。



中隊長は衛生兵に命じ後送手當を加へしめ後天津軍病院に收容せられた。中隊長は戰闘指揮の間隙を見計ひ氏を衛生隊に見舞ふや氏は中隊長殿！固安城はまだ落ちませんかと尋ね其他を言はなかつた。噫軍歌で有名な黃海の海戰で勇敢なる水兵の最後を今此戰場にも再現せられた。中隊長を初めとし居並ぶ將兵は萬感胸に迫り目頭には熱き露を宿して臉をしば叩いた。實にや氏の腦中には國家の外に餘念がなかつたであらう。固安城の美事なる城壁破壊の跡完全なる突撃路の開設には氏の全身全靈が打ち込まれてある。而して其陥落は氏の待ち焦れた念願であつたに相違ない。此崇高なる責任觀念の前に誰か頭を上げ得やうぞ。正に皇軍砲兵の眞意氣を吐いたものであつた。惜しいかな衛生各員の手當看護も其甲斐なく十月九日を一期とし遂に北支戰線の華と散つた。されど氏は今や護國の神と祀られ不朽の武勳は末永く輝き渡り軍民語り傳へて義勇奉公の鑑と仰ぐであらう。氏は即日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



## 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 青木 且夫

氏は岡山縣和氣郡三石町の出身にして父を春治母を勝と云ひ明治四十一年九月八日を以て生れ後妻ハルミを迎へた。資性活達父母に仕へて至孝勤務先より衣服金錢を送りて又勤務地に屢々父母を招きて東道し名所舊跡廻りを此上なき樂しみとせること恰も頼山陽が其母に對して行つたところと其軌を一にし朋友に對して信義篤く責任感亦強く人に先んじて難局に當る美風を有し隨つて世人の推賞するところであつた。大正十年三月三石尋常高等小學校高等科一年を修了して退學し爾後只管父母を助けて家業に勵み昭和四年現役兵として歩兵第十聯隊に入營教練勤務に精勵し上官の信用も篤く銃劍術は其特技であつた。昭和五年十一月滿期除隊となつてより大阪に出で耐火煉瓦會社に入り窯場主任とし能率増進を企圖して工場の成績を挙げ昭和七年には教育召集に應召し成績良好にして上等兵に進級した。

昭和十二年八月支那事變のため應召赤柴部隊に編入せられ勇躍征途に就き八月二十日より泥濘を冒して揚柳青及び當城附近の掃蕩に従ひ治安維持に努め以後津浦線の戰闘に参加先づ八月二十二日七里堡を出發惡路と敵彈の下を前進し翌二十三日早朝西邊庄の敵に對し攻撃を開始するや敵銃砲火の集中を意とせず地形地物を利用して一進一止敵に近迫し突撃に際しては率先勇敢に敵陣に突入得意の銃劍術を以て格闘の末之を占領し憩ふ暇もなく東五里庄を攻撃し鎧袖一觸該地を奪取し薄暮東寧に轉進して二十四日午前二時露營の假睡も愚か數倍の敵夜襲に對し奮戦力闘よく之を撃退し斯く連日に亘る矢驍早の攻撃或は夜戰に戰功を樹て更に八月二十九日王官宅附近の敵を攻撃し續いて三十一日雙樓及び姚家庄を占領して該地附近の敵情搜索に任じ又九月四日には馬辛庄及馬集を翌五日には曲庄陳庄及後屯を攻略した。實に上陸以來一たび行動を起すや晨に一陣を抜き夕に一村を屠り恰も大風の枯葉を捲くが如く敵を撃破して皇軍の武威を中外に發揚するに至つた

が此間氏は常に勇敢なる行動により中隊の戰勝に貢獻するところ大なるものがあつた。

馬廠附近の戰闘に於ては氏は高田隊石井小隊に屬し九月十日午後一時行動を開始し馬廠河の敵前渡河に方り特に選ばれ決死中隊として堀田部隊長の搭乘せる第一機艇に續いて第二機艇に乗り馬廠河を遊航するや敵は一齊に火蓋を切りその銃砲彈は警ふるにももなき熾烈さ而もその間を遊航し午前三時五十分敵前に上陸すると同時に攻撃を開始した。敵は堅固



なる陣地に據り必死の抵抗を爲し其銃砲火は猛烈であつたが猛進又猛進し遂に敵陣近く迫り突撃を準備し午後四時將に突撃に移らんとした時第一線に奮闘猛射を以て敵を制壓中の氏は惜しくも右背部に砲彈破片創を受けた。斯くて所屬隊は遂に敵陣に突撃し茲にさしも堅固なる陣地による數倍の敵を撃退するに至つた。氏は程なく唐官屯野戰病院に收容せられ直に手當を受けたが何分重傷にて遂に十二日河北の華と散つたのである。上陸以來月餘此間稀有の豪雨に遭遇し具さに困苦艱難を嘗め殆んど寧日なく大小戰闘に参加すること十指を以て數へ殊に馬廠の攻撃に方りては特に決死隊として簡拔せられたる部隊の名譽にかけ家を忘れ身を捨て奮戦東神を泣かしむるの活躍を以て護國の鎮めと化す嗚呼入つては至孝出でては一死報國忠孝兩全眞に國民の儀表として永く後世を照すであらう。

氏は即日歩兵伍長に任ぜられ次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



### 陸軍砲兵伍長勳八等功七級 青木義一

氏は千葉縣市原郡千種村今津朝の人で明治四十二年十一月九日生れである。父を源一郎母をヨシと云ひ妻チカとの間に英夫良衛の二愛兒がある。大正十三年三月千種尋常高等小學校高等科を優等の成績を以て卒業し昭和四年三月千種青年



訓練所を卒業した。氏は性質温良志操高潔にして義務心厚く熱心家業に精勵し率先公共事業に盡力し模範青年であつた。昭和四年一月横須賀重砲兵聯隊へ徴兵として入營し成績優秀にて在隊間砲兵上等兵に進級し昭和六年十一月善行證書を附與せられ歸休除隊となつた。除隊後は在郷軍人會班長並に評議員或は理事となりよく分會長を輔佐して會員を指導し大に分會の發展向上に努力した。是が爲昭和十一年一月在郷軍人會千葉支部長より「在郷軍人の責務を自覺し盡忠愛國の至誠を捧げ未入營補充兵教育の指導に任じ其功績多大」との賞状を附與せられた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや松村部隊大瀧隊に應召し勇躍出征し九月十五、十六日に於ける房山附近の戦闘には第二小隊第五分隊に屬し彈藥糧食の運搬に従事し能く其任務を全うした。

十月六日より十一日に至る正定附近の戦闘には長途の行軍間常に率先して障礙の排除或は通路の補修に努め積極的に活動して部隊の前進を容易ならしめ絶へず最も困難なる作業に従事し戦闘間は彈藥の搬送整備に又給養の業務に従事し積極

的に活躍した。十一月十六日より十九日に至る常熱附近の戦闘には第二小隊第五分隊に屬し泥濘中に勞苦を厭はず彈藥糧食の搬送に従事し常に率先忠實積極的に奮勵した。

十二月一日江陰要塞攻撃の際午後五時頃には彼我の砲戰聲にして砲聲股々各所に猛火炎々として天を焦し悽慘の光景となつた。當時氏は大隊段列の一車輛長として遠く大倉にある砲兵支廠より彈藥を運搬し道路泥濘言語に絶する地區を六十時間餘不眠不休彈藥を補充し遺憾なく戰砲隊の戰闘力を充足せしめた。是の重任を全うして敵の砲彈雨下の中を六橋の大隊段列の位置に歸還し此の旨を復命せんとしたる折柄敵の十輦砲彈六發放列附近に炸裂し其の一彈は氏の傍約三米の地點に爆發し爲に顔面部左大腿部に重傷を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

砲兵戰鬥に於て圓滑なる彈藥補給の如何に重要事項なるかは敢て喋々を要せざる所であるが難路且遠距離よりする重砲彈藥の運搬たるや實に絶大なる努力を要する。然るに氏の責任觀念の旺盛なる克く萬難を排し部下要員を督勵して任務に邁進し又氏の忠誠勇武なる彈丸雨飛も眼中になく勇敢克く戰砲隊に彈藥を補充し以て砲兵威力を十分に發揚せしめた。其業務たるや必ずしも華かにあらざれど其功績たるや絶大なりと謂ふべきである。今や氏は聖戰の華と散つたが正に皇軍砲兵の精華一般軍人の龜鑑として皇軍戰史を飾るべく芳名は千載に語り傳へられるであらう。又其英靈は萬世に生き皇國を守護するのみならず清き魂は其遺族に其愛子の胸に深く刻み込まれ多幸の生活を擁護するであらう。

氏は即日砲兵伍長に任ぜられ次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



## 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 阿久津 榮

氏は群馬縣前橋市田中町の人にして父を良作母をちやうと云ひ大正二年五月二十一日生れで未だ獨身であつた。性豪膽快活にして上を敬ひ下を愛し世人の信望も厚かつた。昭和三年三月兵庫縣鳴尾小學校高等科を卒業し間もなく大阪市

東區本町二丁目戸田猶商店方へ入店し入營時に至つた。氏が入營當時取引客の中に代金支拂を爲さざる者ありて裁判沙汰に及ばんとしたが若輩ながら氏は本事件の解決を一任され度旨願出で快諾せらるゝや氏は一夜二晝の間絶食のまゝ交渉を続け遂に代金を受取りたる逸話もありて氏の膽力と持久の一端を窺ふ事が出来得ると思ふ。



に善行證書を附與せられ錦を着て歸郷した。

支那事變起るや森田部隊に應召し勇躍北支方面への征途に就いた。斯くて九月中旬永定河々畔股家舖附近の戦闘に於ては〇〇豫備隊となり同〇〇部及車輛部隊の警戒勤務に服し特に永定河の渡河に際しては幾多の危険を冒し殘敵を掃蕩し積極的に任務を遂行した。續いて拒馬河々畔望海庄附近の戦闘に際しては小隊長新井准尉の指揮に屬し第六分隊長として右

昭和八年十二月歩兵第八十聯隊に入營し日夜軍務に精勵し其成績優秀であつた。殊に銃劍術及射撃に堪能にして射撃の優等賞を受くる事四回に及び昭和十年十月歸休除隊に方りては下士官適任證書並

第一機小隊に在りて奮戦した。當時氏は堅固なる既設陣地に據りて頑強に抵抗し特にトーチカ銃眼よりする側防火器の威力熾烈にして中隊の攻撃は苦境の状態に在つた。依て中隊長は氏の所屬せる第三小隊をして速かに該側防機關の撲滅を命じた。茲に於て小隊長は午後二時半第六分隊を直轄とし第一分隊の後方に跟随して正面より該敵に突入するに決したが氏は率先敵の十字火を冒して一進一止敵に近迫し部下を激勵し小隊長と共に一舉側防機關に突入して之を撲滅し以て中隊主力の前進を容易ならしめた。午後五時半頃に至り約一中隊の敵は左前方より當中隊に向ひ逆襲し來りしが氏は獨斷分隊を率ひ敵の側背より突撃を敢行して之を撃退した。爾後機を失せず敢退する敵を尾撃して遂に可西務の一角に突入し該陣地を奪取した。此時小隊長より更に戦果を擴張せんが爲第六分隊も小隊長の許に集結を命ぜられ氏は將に部下を率ひて集合を終らんとする折柄南方より敵機一機飛來爆彈數發を投下され氏は頭部及び上腰部に爆創を受け遂に壯烈無比の戦死を遂げた。本戦闘に於ける氏の奮戦は實に萬縁叢中紅一點の概ありて克く數倍の敵を撃破し中隊をして赫々たる戦勝を獲得せしめた。

噫氏は豪膽機敏にして獨斷活用機宜に適し純忠報國の至誠の進る所眼中堅壘なく敵火なく部下分隊の衆心を打ちて一丸となし毎に中隊戦勝に大いなる礎石となつた。寔に是れ皇軍歩兵の精銳であり又一般軍人の龜鑑でもあつた。今や聖戦の半ばにして尊き犠牲となつたが其勳功は華北戦史に牢記せらるべく其名は千古に芳ばしく其英靈は萬世に生き護國の神又一家の守護神として絶え間なき光と力とを投げ與へるであらう。

氏は即日歩兵伍長に任官し次で破格にも勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



陸軍歩兵伍長勳七等功七級 安達 實

氏は茨城縣西茨城郡東那珂村大字加茂部の人にして父を武一郎母をセンと云ひ大正二年十一月廿五日生れである。大正十五年三月東那珂村尋常高等小學校尋常科を畢へ更に昭和二年四月縣立笠間農學校に入學同六年三月卒業更に縣立蠶業試



驗所に入り翌七年三月同所を卒業し八年十二月水戸歩兵聯隊機關銃隊に入營同月直に滿洲に派遣せられ警備討伐に任じ功を以て勳八等瑞寶章を賜はり九年四月内地に歸還し十年五月上等兵として歸休除隊となつた。其翌十一年茨城縣立蠶業取締所行方郡麻生支所勤務を命ぜられ後幾くもなく技手拜命鹿島郡大同村駐在として勤務中昭和十二年八月事變のため應召石黒部隊第三機關銃中隊に編入せられ北支方面に出動した。爾來炎暑を冒し泥濘道なきの地區をば晝夜兼行或は前進し或は戰闘し毎に分隊長を輔佐し戰友を激勵してよく其任務を全ふした。殊に永定河に於ては敵火の下胸部に達する濁流を徒

涉し續いて拒馬河大冊河の夜襲戰に於ては鞏固なる掩蓋敵陣地よりする猛射の間を勇敢に進撃し更に保定石家莊順德邯鄲附近豐樂鎮の戰闘に従ひ何れも機關銃の威力を最大に發揚し以て赫々たる戰捷に貢獻する處頗る大なるものがあつた。又十一月八日より大名附近の戰闘に於て伊藤隊の指揮に屬せる配屬機關銃小隊第一分隊の彈藥手として參加し十四日午前九時より攻撃開始せらるゝや氏の屬する機關銃小隊は中隊の左前方に陣地を占領し直接中隊の攻撃に協力し適時正確なる

射撃を以て中隊の前進を妨害する敵を制壓に努めたのであつた同地附近一帶は平坦且軟弱加ふるに飛彈猛烈を極はめ機關銃彈藥の搬送は極めて困難であつた。然るに氏は率先萬難を排し彈雨の中を疾驅して彈藥を銃側に搬送し來り之が爲機關銃は其火力急襲を行ひ其結果敵は多大の損害を受け一時壕内に蟄伏し爲に我第一線の攻撃前進を大に容易ならしめた。其功績は偉大なるものであつた。斯くて我が第一線の敵陣地に近迫するに伴ひ氏の屬する機關銃分隊は敵を側射せん爲め左前方に陣地を變換すべく發進したところ其途中敵の一彈は氏の右胸部を貫通し惜しくも壯烈なる戰死を遂げた。

氏や資性温順にして沈着事に當り曩には滿洲警備に従ひ功により勳八等に叙せられ今次又北支の戰線に立つて敵彈雨注の下、身を挺して機關銃彈藥手としての本務を完うし爲に適切の時機に於て該銃火の威力を最大に發揮し以て赫々たる皇軍戰捷の因を成すに至らしめたる其功績は洵に披群と謂ふべく其の後實父武一郎氏に宛て南少尉の寄せたる書翰中氏の戰線に於ける態度偉功に對し部隊長が感泣嘆賞措かさざりし事を述べるを見て愈々崇敬哀惜の情に堪へざる次第である。

氏は又蠶業技手として前途有爲の身を以て北支戰場の露と消へしは斯界の爲に愛惜盡くるなきも人生限りあり而かも其場所を得ること難し氏や曠古の聖戰に偉勳を樹て其の肉體は亡びしと雖其靈魂は永久に生き護國の神として皇國を守り遺族の多幸を守護し赫々たる武勳は皇軍戰史に永へに輝くであらう。

氏は即日陸軍歩兵伍長に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜つた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 澤口 猶吉

氏は東京市葛飾區鎌倉町の人にして父を吉兵衛母をよしと稱し何れも既に物故した。氏は大正四年七月十三日を以て生



れ未だ獨身であつた。資性温厚にして實直父母の生前には誠に至孝よく之に仕へ近隣の模範となつて居た。大正十一年四月第一奥戸尋常高等小學校に入り昭和五年三月同校卒業の後は家庭に在つて農業に従事して居たが昭和十一年一月現役兵として麻布歩兵第三聯隊に入營同年五月同聯隊に屬して渡滿初め齊々哈爾、吉林等の警備に任じ次で龍山附近の討匪に従ひ十一月一等兵に進級翌十二年三月以降海倫縣、綏楞縣次いで龍鎮縣下の匪賊大討伐に参加し五月十二日を以て上等兵に進級した。

斯くて同年七月支那事變の勃發するや轉じて北支に派遣せらるゝこととなり八月一日氏の所屬部隊は天津に到着し十六日まで同地附近の掃蕩及輸送に従ひ此間氏は擲彈筒手として敵情搜索其の他諸種の警戒任務に服し勳功大なるものがあつた。

次で八月十七日より二十日に亘る外長城線附近の戦闘に於ては中隊長小林大尉の指揮下に屬し第三小隊分隊筒手として参加し(へ)「トーチカ」突入奪取の際氏の所屬隊は初め豫備隊なりしも戦線の擴張に伴ひ長城線南側二個の「トーチカ」に據る敵に對し最右翼分隊員として敵陣地左側背より分隊長と共に敵の不意を襲つて之を撃退し其後敵が數回に亘り回復攻撃に出で来るや氏は擲彈筒手として頗る沈着果敢有効適切なる射撃を加へ敵の企圖を断念せしめ尙も勇戦奮闘を續けありし際午後九時頃敵の敷設せる集團地雷の大爆破の爲め惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

氏や滿洲警備討匪の任より引續き北支の征途に就き奮勵克く任務を遂行し殊に其最期に於ける夜間の突撃に方り發揮せ



し勇猛果敢の行動次で敵の遺體に對して加へたる沈着有効なる射撃何れも自己の職分を完全に果し以て中隊の志氣を大に鼓舞したるは天晴れ皇軍歩兵の精華であり又一戦軍人の龜鑑であつた。不幸敵地雷の爆發により壯烈落花の最期を遂げしは誠に悼しい次第である。

氏や聖戰参加の日は淺しと雖も其の功績は拔群にして英名と共に永く青史に輝くであらう。即日氏は歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 佐藤 壽雄

氏は群馬縣新田郡敷塚村の人にして明治四十四年一月十五日生である。父を伊三郎亡母をせいと云ひ未だ獨身であつた。性質温和にして内心剛毅正義觀念旺盛であつた。大正十五年三月郷里の小學校高等科を卒業後郷里の青年訓練所へ入所し昭和六年十二月同所を終了した。昭和七年一月高崎歩兵聯隊へ入營し同年六月より滿洲事變に出征し功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり昭和九年五月歩兵上等兵に進級し善行證書を附與せられ歸休除隊となつた。

支那事變起るや森田部隊に召集せられ重機關銃要員として勇躍北支戦線へ出動した。斯くて昭和十二年九月中旬永定河辛莊附近の戦闘に於ては敵情監視及中小隊長間の連絡に任じ續いて拒馬河々畔東茨村並に望海附近の戦闘に於ては或は彈藥補充に或は敵情監視に或は連絡勤務に或は自ら銃手を交代して敵の重火器撲滅に任ずる等小隊戦闘に寄與する所多かつた。殊に望海附近の戦闘に於ては渡河投護の任務を受け或は拒馬河右岸に進出して敵を制壓し或は再び同河左岸に移りて敵陣地の主要點を猛射し以て所屬大隊の渡河動作を容易ならしめた。



九月十七日平漢線東側地區東管頭附近の戦に於ては第十一中隊に配屬せられ東管頭附近の敵の退路遮断の任務を受け雪崩を折ちて敗退し来る敵を猛射し甚大なる損害を與へた。又沛然たる降雨と敵迫撃砲の集中射撃を意とせず克く連絡勤務に將た彈藥補充に敏活なる行動に依り積極的に任務遂行し以て本戦團に寄與する所甚大であつた。

九月十八日平漢線西側地區澤畔店附近の戦團に於ては第三中隊に配屬せられ大隊の右第一線となり同中隊が敵陣地の左側方面に突入せんとするや同中隊の右側方面より敵の逆襲を受けた。此際氏は月明を利用して極めて有効適切に此の敵を猛射し多大の損害を與へ以て第三中隊の突撃を容易ならしめた。當時氏は三番銃手たりしが射手に敵情を知らしめ其射撃を適切ならしめ又突撃に際しては小銃部隊と共に躍進して村落西南端に進出し敗走する敵に殲滅的の大打撃を與へた。



又九月二十一日よりの大冊河々畔黃村の戦團に於ては第一中隊に配屬せられ同大隊の左第一線となり敵彈雨飛の中を躍進して敵前百米に進出して敵を猛射し以て第一中隊の突撃を容易ならしめ敵の第一線を奪取するや該村東門附近に逸早く進出して之を確保し數度に亘る敵の逆襲を撃退し之を完全に占領せしめた。次で同月廿三日より第四中隊へ配屬せられ保定附近の殘敵掃蕩に任じたが該中隊の當面せる敵の退路を完全に遮断し敗走する敵を猛射之を殲滅した。爾後敵を長驅して津沱河の線に進出し河川の偵察村落の警戒等に任じ石家莊へ前進後は列車追撃に移つた。

十月十三日以降磁縣及漳河々畔の追撃戦團に於ては大隊長代理茂木大尉の指揮下に第四中隊へ配屬せられ十月十八日午前六時半より磁縣の西方部落たる固城の林縁に死守せる敵の側防機關銃を撲滅すべき任務を受けた。氏は配屬機關銃小隊第二分隊射手として固城村の敵に對し有効適切に之を制壓、同地を占領せしめ次で敗退する敵に多大の損害を與へた。同中隊が大隊の左第一線となるや氏の小隊は其最右翼に進出し中隊正面に對し頑強に抵抗せる敵の側面より痛撃を加へ以て同中隊の前進を容易ならしめ敵前約二百米に達せる時俄然敵の自動火器が左翼方面より我中隊に猛射を加へた。氏は神速機敏に獨斷之に急襲的猛射を加へ遂に之を撲滅した。爾後敵の自動火器は巧妙に出没して活躍したが氏は機敏に之を捕捉制壓中午前七時敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け茲に壯烈なる戦死を遂げた。

氏や永定河々畔の戦團以來京漢線に沿ふ各重要なる戦團に参加し毎戦勇敢機敏克く重機の全威力を發揚し協力部隊に歸する戰勝の途を開いた。其功績は皇軍華北戦史に特筆せらるべく其名は千古に芳ばしく誦はるべく其英靈は萬世に生き皇國は勿論一家一門の光となり力となるであらう。あゝ人生夫れ死所を得るや難し而して氏は茲に誠忠大孝を完成し大なる生命に生くる事を得た。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 坂田長藏

氏は兵庫縣明石郡玉津村新方の人にして父を久五郎母をサトと云ひ妻をタツエと云ふ大正三年三月二十八日を以て生れ早く兩親に死歿せられ小橋廣氏に育てられた。昭和二年三月玉津尋常高等小學校を卒業し直に明石中學に入校三年修了後



明石驛前運送店々員として勤務し同九年十二月に及んだ。資性質實剛偉にして諸事熱心であつた。翌十年一月現役兵として姫路歩兵聯隊に入營同年十二月上等兵に進み翌十一年六月伍長勤務上等兵となり同年十一月満期退營した。昭和十二年一月川崎造船所に入り昇書工として頗る精勵同僚間の模範であつたが同年七月事變のため應召沼田部隊に編入せられ北支方面の征途に就き八月二十五日より九月十四日に亘る馬廠攻撃は豫備隊として或は胡連莊警備に或は中隊傳令等の諸勤務に敵弾を冒して活躍した。續いて九月十五日より同二十六日に亘る滄洲附近の戦闘間は主として命令受領者たる中村伍長の傳令として屢々敵彈雨飛の平坦地區を往復し連絡を完うした。九月二十三日所屬中隊は張新莊附近の敵第二線陣地攻撃のため夜間前進を起し二十四日午前三時左第一線として敵陣地を奪取し引續き張新莊部落を占領した。此間氏は傳令として夜間且彈丸雨飛の下大中隊間の連絡を全うし又張新莊部落占領後優勢なる敵より逆襲を受くるや防禦人員の寡少なを察し率先第一線に加入し敵に猛射を加へ遂に之を撃退することを得た。九月二十八日劉八里庄及周八里庄附近の戦闘には初め大中隊間の傳令として機敏に行動して連絡を完うし中隊が劉八里庄に前進中敵が包圍の形を以て逆襲し來るや中隊長の指揮下に彈雨を冒し最前線に出て勇戦其逆襲を挫折せしめ退却せる敵を猛射し大損害を與へた。

又十月二日趙官屯附近の戦闘には大中隊間の連絡に任じ次で十月六日以後德縣附近に於ける前進準備間は或は斥候として或は第一線歩哨として日夜精勵し次で黃河北岸の作戰に参加し十一月八日苗家邱莊附近の戦闘には中隊傳令として午前盧莊北端より敵弾を浴びつゝ邱莊方面に攻撃前進をした。此日所屬中隊は機關銃一小隊歩兵砲一門を配屬せられ敵の退路遮斷の目的を以て午前四時半鳳凰店を出發し暗路を遡る事約二里明け行く空の下尙も東南方に前進中午前八時前方部落に一發の銃聲が聞えた。是れ敵の第一線監視隊が我軍の進撃を發見しての合圖であつた。早や友軍は敵前二百米に達して居たのである。忽ち敵は熾烈なる火力を發揚して平坦地を進みつゝありし我中隊を阻止した。所屬中隊何をかためらはん廣

正面に展開して之に應戦した。氏は専ら砲兵との連絡に任じ先づ敵の第一線を占領し次で第二線を攻撃したが死傷續出の有様に氏は「中隊長殿！阪田は今日うんと働きますぞ」と云ひつゝ攻撃を續行し敵前約百米に達するや敵は益々猛烈なる火力を以て頑強に抵抗した。午前九時半頃一彈飛來中隊長の左腕を貫通し尙氏の胸を貫通した。此時中隊長は「阪田！確かりせよお前は立派にやつて呉れた。死力を盡して呉れたので此處まで出られたのだ」と涙と共に感謝すれば氏は「中隊長殿！此阪田はやられましたが此陣地を占領する迄は死にません未だ働きます」と答へたが何分にも重傷なので中隊長は「阪田！中隊長は嬉しいぞ感謝するぞ確かりせよ」と言ひ残り間もなく第二陣地に向ひ壯烈な突撃を敢行した。やがて萬雷の如き喊聲を揚げつゝ第二陣地を占領した。氏はあゝ嬉しい占領してくれたか私も之で満足だと傍に看護しありし戦友に中隊長殿に宜敷云ふてくれ後は頼むぞと聲もかすかに 天皇陛下萬歳と唱へて午前十時二十五分遂に華北戦線の華と散つた。

噫氏や衆論のまにまに將兵一體の軍人精神に透徹し義を山岳の重きに死を鴻毛の輕きに置き己が手柄を誇らうともせず一意衆戦の目的貫徹に邁進し所屬中隊の攻撃成功に大いなる満足をして心靜かに瞑目せるは是れ神の姿ではあるまいか。眞に是れ軍人の龜鑑であり皇軍戰史を飾るべき美談である。氏の英靈や永世に生くべく氏の芳名は千載に傳へて大和櫻と咲き匂ふであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 笹口健次

氏は茨城縣西茨城郡北山内村大字大郷戸の人にして父を多三郎母をソウと云ひ妻卒との間に一子健一を擧げた。氏は大正二年九月十日の出生で性温順義務心に篤く昭和三年三月北山内尋常高等小學校高等科を卒業し直に笠間公民學校に入學



昭和五年三月同校を卒業し十九歳にして現役を志願して昭和六年一月水戸歩兵聯隊に入營同年六月滿洲に派遣せられ警備及討伐の功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり同八年五月退營歸郷後日立製作所に入り勤務中支那事變のため昭和十二年八月應召石黒部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。上陸後岩上歩兵砲隊彈藥手として各地に轉戦先づ九月十二日より十五日に亘る永定河々畔北相各莊附近の戰闘に於ては敵彈雨飛の中逆巻く濁流を物ともせず繋駕の儘渡河を決行したが河床の柔軟と急流のため車馬共に轉倒する等甚だ困難を極めた。渡河後機を失せず主力に追及中敵迫撃砲の猛射を受け或は敗殘兵の急襲を受けたるも氏は敢然として奮闘し之を撃退した。次で九月十五日夜敵前を渡河し爾後拂曉に至る間敵の猛射を受けつゝ大隊主力と共に逐次前進し天明となるや同小隊は第一線に近く陣地を占領した。此間氏は敵彈を冒しつゝ勇敢に拒馬河々畔北相附近の戰闘に参加し續いて前進したが拒馬河右岸を出發以來は至る所水流にあらざれば湿地且又道路は轍痕深くして車輛の前進頗る困難であつたが氏はよく萬難を排して車場を誘導し殊に大隊が莊家黃粉附近に於ける敗殘

兵を攻撃する際並に拒馬河支流を黎明に渡河する際は迅速に射撃準備を完了し以て大隊の任務達成に偉大なる貢献をなした。而して十月十一日元氏附近の戰闘に於ては所屬小隊が大隊主力に追及するため鐵道線路に沿ひ敵の十字火を冒して前進中午後七時半頃突如敵の一彈は氏の左胸部に命中した。然かし氏は屈せず斷乎として依然小隊と共に前進を続け午後十時頃に至るや右方部落方面より敵兵約二百我小隊に向ひ襲撃し來つた。此時氏は傷部の苦痛に耐へつゝ奮然起ちて六番彈藥手の任を果し零距離射撃をなし敵の益々近迫し來るに及び其猛烈なる手榴彈を冒し抜劍して群がる敵中に斬り込みしが其の瞬間不幸にも敵彈飛來し壯烈なる戦死を遂げた。

氏は難局に遭遇する毎に益々勇を鼓し常に率先先鞭を以て戰友の志氣を鼓舞した。重傷に耐えつゝ尙も任務に邁進し精悍無比の活躍を以て克く歩兵砲隊の全威力を發揮せしめた。蓋し盡忠報國の赤誠横溢する者ならでは眞似んと欲して眞似得ざる所であらう。嗚呼赫々たる武勳の輝く所氏の犠牲的精神が礎石を形成して居たのである。寔に是れ皇軍の精華であり不朽の功績であつた。今や其人なしと雖其名は千古に芳ばしく英靈は護國の神として尙も活躍し又愛子の胸に氏が高邁なる魂を深く刻みつけ遺族の多幸を加護するであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 岸本定雄

氏は兵庫縣飾磨郡糸引村の人にして明治四十三年一月二十七日生れ父を萬吉母をとみと稱し氏は未だ獨身であつた。資性温順品行方正にして何事にも熱心であつた。大正十一年三月糸山小學校高等科を卒業し昭和元年以降青年補習科學校



に通學し入營時に至つた。昭和六年一月現役兵として姫路歩兵聯隊に入營し間もなく滿洲事變に關して渡滿し各地の警備  
或は討伐に従ひ勳功を樹て昭和八年十二月上等兵を以て歸隊となり勳八等白色桐葉章並に従軍記章滿洲建國功勞章を  
賜はつた。歸郷後は本郷軍人分會の班長となり克く會員を指導し率先垂範分會の中堅として活躍した。



支那事變勃發するや沼田部隊に召集せられ勇躍北支戰線に赴いた。召集以來動員輸送集中間或は兵器被服に關する業務  
に或は衛兵勤務に熱誠努力克く其任務を積極的に遂行し衆の模範と  
なつた。氏は輕機關銃手を命ぜられたが常に態度嚴正率先分隊を指  
導し中隊内にも重要人物として囑目されて居た。斯くて八月中旬  
北支戰線に到着するや徹宵糧秣の輸送に警戒に或は暴雨を克服して  
難行軍を續け殊に八月十五日夜半には暴風雨中に警戒勤務に就き便  
衣隊五名を捕縛する等眞榮豪勇の譽を擧はれて居た。八月十八日に  
は戰傷患者を天津へ護送の特別任務を受け率先舟運を利用して或は  
衛生隊に或は天津軍病院に單獨數日間に亘り東奔西走し能く其任務  
を遂行し更に八月二十四日にも戰傷患者を天津に護送し二十六日所  
屬中隊へ歸還し趙連庄の戰闘に参加するに至つた。當時敵の第二十九軍は馬廠の天險を利用し且數ヶ月の日子を費して陣  
地を強化し陣地前には渡渉困難なる馬廠河を控へ堤防上には數多の掩蓋機關銃を配置して頑強なる抵抗を企圖して居たの  
である。八月二十七日午後三時の大隊命令に依り所屬中隊は第一線中隊となり敵と近く相對峙して諸偵察に従事し爾後の  
攻撃を準備した。翌二十八日午後三時突擊命令を下されたが氏は輕機を提げて勇猛果敢なる突擊を敢行した。其勢正に疾

風枯葉を捲くに似て忽ち目指す陣地の一角を奪取したが友軍も死傷頗出し悲喜交錯の間もあらばこそ必死を期したる敵の  
逆襲は雪崩を打つて殺到した。戰場は全く修羅の巷と化し分隊射手田中一は壯烈なる戰死を遂げた。氏は憤然其輕機を  
執り堤防に這ひ出で群る敵に猛射を浴せ忽ち敵數十名を射墜した。此有様に敵の逆襲は挫折したが執拗なる敵は三回に亘  
り逆襲して來た。併し其都度之を擊退し友軍の意氣軒昂一瞬變轉敵陣地に突入せんとする一刹那憎むべし南岸敵陣地より  
猛射する一弾に頭部貫通銃創を受け茲に壯烈なる戰死を遂げた。氏の逝くや秋陽漸く地平線下に沒せんとする頃 天皇陛  
下萬歳の聲も絶へ／＼に二たび叫んで瞑目したと云ふ事である。

噫鬼神も哭すべし敵が古來難攻不落を誇りし馬廠の堅陣も皇軍の一たび向ふや鎧袖一觸の慘敗を喫せる所以のものは實  
に氏等の尊い犠牲の働きに依る所であつた。氏の英靈や永久に生くべく其名は千載の下皇國戰史に異彩を放つであらう。  
氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 宮野亥之松

氏は茨城縣新治郡土浦町の人にして父を作次郎母をハルノと稱し明治四十四年九月五日生れで宮野寅吉同マサの養嗣子  
となり妻きよとの間に一男一女を擧げた。資性溫良品行端正にして勤勉職務に忠實であつた。大正十四年三月斗利出尋常  
小學校を卒業し昭和七年一月歩兵第二聯隊機關銃中隊に入營後滿洲に派遣せられ機關銃乘馬討伐隊に編入せられ匪賊討伐  
に参加して各地に轉戦し其快速を以て敵匪の意表に出で其急襲的射撃を以て匪賊を殲滅し功により勳八等に叙せられ名譽  
ある勳章及滿洲建國功勞章を賜はり昭和九年五月滿期退營し爾後家に在つて家業に精勵し尙社會の爲めに貢獻する所多



立派な在郷軍人として世人の愛敬を受けて居た。

昭和十二年八月支那事變のため應召温井機關銃部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就き九月二十三日より保定の攻撃戦に参加したが當時後方補給の追送困難にして現地の粟豆等の給與によつて漸く飢を醫するに過ぎなかつた。されど氏は克く困苦缺乏に堪え而かも堅固なる陣地に據守する數倍の敵に對し勇猛果敢に奮闘し遂に二十四日午後同陣地を奪取し續いて敵を追撃し十月初旬石家莊正定の攻撃に従ひ奮戦鏘々たる功績を樹てた。



十一月十一日より翌十二日に亘り廣平の攻撃に於ては氏は第一小隊第一分隊に屬し二番銃手として十一日朝廣平縣南小留村に達し午後〇時十分第一線として戦闘を開始し隣接部隊と連繫して猛射を加へたるも敵の陣地は甚だ堅固にしてその射撃も亦猛烈を極め夜に入るも攻撃意の如く進捗せず由つて夜陰に乗じて逐次陣地を推進し敵前三百米附近に前進したが敵は小銃弾及迫撃砲弾を猛射し我軍を阻止した。茲に於て氏の機關銃分隊は適當なる射撃位置を發見して速

に之に進入し頑敵を求めて猛射を行ひ之が制壓に努めた。然るに氏が彈藥裝填中不幸左前方に迫撃砲彈落下炸裂し之がため胸部に破片創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。時に十二日午前四時であつた。氏は曩に滿洲事變に参加して同國創肇の時期に際し治安維持に貢獻し今次聖戦に於ては京漢線に沿ふて南下し殊に優勢なる敵に對し困苦缺乏を克服し任務の命ずる所勇往邁進機關銃の威力を遺憾なく發揮し終始奮戦力闘鏘々たる功績を樹て皇

軍武威を海外に宣揚した。氏は實に郷に在つては良民軍に従つては良兵隊に任務に堪ふる定に軍民の鑑として其遺勳は燦然たる光彩を放ち其草靈は護國の神として尙も東洋永遠の平和建設の爲加護を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵伍長に任ぜられ次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 三谷 信勝

氏は北海道上川郡神樂村字西御料地の人にして父を豊藏母をそのえと稱し大正四年三月二日を以て生れ未だ獨身であつた。大正十年四月神樂西第一尋常高等小學校に入り昭和四年三月卒業更に同六年四月神樂西第一青年訓練所に入り同九年十月正規の課程を修了した。資性極めて純良寡言實行の人殊に他人が困難なりとして忌避する事も黙々進んで之に當るの美德を具へ青年訓練所に在りても術科は特に優秀にして同輩並に下級生の模範と推賞されて居た。

昭和十一年一月現役兵として旭川歩兵聯隊に入營したが同年五月支那駐屯歩兵隊に編入せられ爾來北支の警備に任じ同年七月には一等兵に翌年二月には上等兵に進級した。

斯くて十二年七月支那事變の勃發するや直に出動し十二、十三兩日は第一大隊砲小隊第二分隊四番砲手として天津附近警備に任じ次で七月十四日氏の所屬中隊は天津を出發し酷暑を冒して長途の行軍を爲し十八日通州に到つた。此間氏は終始分隊の中堅となり志氣昂揚に努め十八日通州到着後に在りては至嚴なる警備の下炎暑を冒して砲廠並に既衛兵其他繁激なる勤務に服し優秀の功績を挙げ愈々七月二十六日より二十七日に亘る通州附近の戦闘に在りて氏の所屬聯隊は二十六日夕通州南方にある支那軍一營に對し武裝解除を要求せしむ承服せざりし爲め二十七日午前四時より之を攻撃するに決し



此の時第一大隊砲小隊は南門城壁上に陣地を占領し萱島部隊としての第一弾を敵營に放ち次で我が砲兵隊の突撃支援射撃開始と共に所屬大隊は敵兵營前四五十米に近迫せしも兵營西南角よりする側防機關銃火熾烈にして突撃進展せず仍て小隊長は敵彈雨飛の裡を奮進第一線歩兵小隊の直前に陣地を推進し敵火の制壓に努めたが砲側砲手の負傷相次ぐに至りしを以て氏は機敏に他砲手の職務をも兼務し正確機敏なる射撃を繼續し以て該敵機關銃を沈黙せしめた。然るに須臾にして氏は右側方よりする敵彈の爲め遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。



大隊の戦果擴張に資する所甚大であつた其の功績や拔群にして英名と共に空戦史上永く芳を留むるであらう。氏は即日歩兵伍長に任ぜられ次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級 宮部 稔



氏は岐阜縣本巣郡文殊村文殊の人にして明治四十五年七月二十八日の生れ。父を川藏母をかねよと云ひ妻ひさをとの間に一子博行がある。資性濃厚にして謙讓責任觀念強く忍耐方に富み又父母に孝且友情に厚く郷黨の風評良好にして在郷軍人となりては班長及分會評議員に擧げられた。大正十四年三月文殊尋常小學校を昭和二年三月西郷高等小學校を卒業し同五年三月には文殊農業補習學校を次で同七年十一月には文殊村青年訓練所を卒業した。同八年一月十日徴兵として野砲兵第三聯隊に入營同年十一月上等兵に進み高射砲手修習のため千葉高射砲隊に入隊し翌九年四月滿洲守備として出動ヘルピンに駐屯治安維持に任じその功に依り一時賜金五十圓從軍記章及び滿洲國建國記章を賜はつた。昭和十二年七月支那事變勃發するや氏は直に五弓部隊に編入せられて渡支し天津附近の警備に任じ敵の來襲に當りては地上射撃を以て南門大學附近の敵を撃滅し良郷に於ては○○部隊司令部の上空掩護にまた榆岱鎮附近にありて○○隊の永定河渡河掩護に任じ常に勇戦奮闘した。爾後九月二十四日保定に向ひ前進中固城鎮北方附近に於て友軍重砲隊が敗殘兵の襲撃を受くるに際し小隊長の指揮を以てこれを猛射し遂に敵を撃退した。翌二十五日保定に到着保定農學院附近に陣地を占領し上空の掩護に任じた。

九月三十日早朝曉霧に乘じ突如敵飛行機來襲するや氏は第四分隊八番砲手として沈着勇敢に動作し有効正確なる射撃を放つて敵機に多大の損害を與へこれがため敵機は遂に陣地を距る三軒附近の地點に墜落するに至つた。この戦闘中敵機の



投下せる爆弾氏の身邊を距る四・五米附近に爆發し爲に氏は後頭部及び左腓腸部に爆創を負ひたるも毅然として守地を離るゝことを肯ぜず午前六時三十五分遂に砲側に於て壯烈なる戦死を遂げた。由來砲側の最後は砲兵の最も名譽とする所であつて氏の如き眞に軍人の鑑とするに足るものである。

氏は戦死の日特に砲兵伍長に任ぜられ後功七級金鷄勳章並に勳八等白色桐葉章を賜つた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 源 英雄

氏は姫路市北神屋町の人にして明治四十四年五月三日生れ實父を駒治養母をキクと云ひ氏は未だ獨身であつた。性朴直にして寡黙實行力に富み且不屈不撓の氣概を持つて居つた。大正十四年三月城東尋常高等小學校を卒業昭和七年一月歩兵第三十九聯隊へ入營同年三月滿洲事變に従軍し各地の警備及匪賊を討伐し昭和九年五月内地歸還功を以て勳八等白色桐葉章並に従軍記章建國功勞章を賜はつた。

支那事變勃發するや沼田部隊に召集せられ勇躍北支戦線に出征し八月中旬戰場に到着し八月十四日より九月一日に亘る間は集中及び三間房並に四黨口の戦闘に参加し九月二日乃至九月六日の間は陳官屯に於て警備に任じた。九月七日より同月十二日に亘る馬廠附近の戦闘に於ては上田少尉の指揮する第一小隊第四分隊員として参加したが小隊は最初豫備隊として控置され第一線が膠莊子進出後丁莊陣地の確保を命ぜられた。附近の地形は泥濘を洩し行動甚だ困難であつたが氏は克く分隊長の命に従ひ勇敢に前進を続け尙丁莊には敗殘の敵兵は健氣にも手榴彈等を投擲して頑強に抵抗を続け加ふるに許前方高粱畑に敗退せる敵は猛烈なる集中火を浴せ來り其勢侮るべからざるものがあつた。然れども氏は豪膽沈着克く之

に對し有効適切なる射撃を以て之を制壓した。次で膠莊子進出後は危険を冒し村落内の掃蕩を行ひ殘敵數名を刺殺し以て該地を占領確保した。氏の勇敢にして終始積極的なる戰闘動作は常に小隊の志氣を鼓舞し戰勝の素因となつた。

九月十三日より同二十一日に亘る間は滄州附近の戦闘に参加したが九月十九日午後三時豆店攻撃の命令下るや氏の所屬小隊は尖兵となり敵の監視部隊を驅逐しつゝ敵前三百米に展開し午後四時卅分攻撃前進に移つた。氏は第四分隊長代理として克く分隊を指揮掌握し敵前百米の清掃地帯に入るや敵の猛烈なる正面射撃を受けた彼我中間地帯は泥濘を洩す悪地形ではあつたが氏は常に分隊を激勵し自ら先頭に立ちて肉薄し適切有効なる射撃指揮に依り敵に多大なる損害を與へ突撃の好機到るや率先水深胸に達する水濺を乗越えて一舉敵陣地を奪取した。其勇猛果敢なる正



に所屬部隊戰勝の素因をなし拔群の功績であつた。次で九月二十一日所屬部隊は馬落坡を夜襲する目的を以て午後九時行動を開始したが之に先だち氏は地形偵察の命を受け敵前三百米に接近し危険を冒し綿密周到なる偵察を行ひ貴重なる報告を呈出した。午後一時愈々右第一線中隊たる所屬中隊の攻撃前進に移るや氏は誘導者となり泥濘地帯を正確に所望地點に誘導し敵前至近に達せしが遂に敵の發覺する所となり猛烈なる集中火を受くるに至つた。茲に於て所屬中隊内には死傷續出するに至りしが氏は之に動ずる事なく一意前進を續行した。不幸敵前百米に達せる時敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

夜襲出發の直前氏は中隊長より與へられたる酒で分隊員と別れの盆を擧げ何か言ひ残す事はないかと尋ねられし時氏は



俺は来る時皆に別を告げて来たのだから今更言ふ事はないが昨夜の斥候で之が最後だと思ふ戦争に来たからにや同じ御國の爲に死ぬなら今夜あたりだ手紙を書いて腰の皮袍に入れて居るから頼むぞと最後の決心を示して居た。あゝ何たる潔い覺悟であらうか氏の最後は爛漫たる櫻花の一夜の嵐に散り果てた風情であつた。だが又來ん春に咲き誇る櫻の加く氏の英靈は萬世に生き皇國を思ふ軍民の心に永く誌されて讀む人聞く人々の清き涙が注がるゝであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵伍長勳八等功七級 嶋田 秀 男

氏は茨城縣新治郡高濱町の人にして大正三年十一月二十八日生れである。亡父を惣太郎母をさきと云ひ氏は未だ獨身であつた。性質直にして機敏活潑、昭和四年三月高濱小學校高等科を卒業し昭和九年一月騎兵第十八聯隊へ入營し在營間學術科共に優秀にして前後三四に亘り精勳章を附與せられ上等兵に進級し昭和十一年十一月歸隊除隊に際しては善行證書を附與せられた。除隊後は直に高濱青年訓練所指導員を拜命し日夜青年の指導に任じ訓練生一同は氏を衷心より敬仰して師父と仰ぎ其感化せられたる所甚大であつた。

支那事變起り召集せらるゝや訓練生一同に告別し生還せざる旨を誓ひ悲壯の決意を以て安田部隊へ應召した。斯くて昭和十二年九月十三日永定河の初陣に参加したが敵は當時日本軍を輕侮し頑強に抵抗を試み到る處猛烈なる射撃を以て皇軍を邀撃した。氏は愛馬に鞭ち勇猛果敢に戰場を馳驅して美事に任務を達成した。翌十四日午前八時頃友軍歩兵第〇〇〇團と騎兵部隊との連絡社絶したるを以て其連絡者として連絡班長養田軍曹以下四名の通信兵が選出せられた。氏は多數の

要員より選拔せられ其一人となり敵彈雨飛の中を物ともせず臨陣もふらず友軍歩兵部隊本部に至り重要なる情況通報の傳達を完了し以て其戰鬪指揮に甚大なる利益を與へた。



翌十五日所屬部隊は午前六時行動を起し午前八時卅分より駱駝灣附近の敵陣地に對し攻撃を開始した。此日氏は所屬部隊本部指揮機關に屬し傳令として在曹莊の石黒部隊に連絡を命ぜられた。即ち所屬隊當面の情況を石黒部隊へ通報の爲め午前八時五十分出發敵殘兵の蠢動する中を勇敢機敏に行動し幾度か果樹林中に於て敵と遭遇せしが氏は其都度急襲して敵を噓し或は之を擊退し或は懸敏虎口を脱する等機宜に適する行動に依り敵中を通過して完全に任務を遂行して歸途に就いたが西曹莊南方約三百米附近に於て敵敗殘兵五名と不意に遭遇し機先を制して之を襲撃し以て其三名を噓し近ぐる敵を追撃中揚家屯方向の敵より狙撃せられて頭部に貫通銃創を受け茲に壯烈なる戦死を遂げた。

氏は戰場に於て極めて大膽であつた。一例を舉ぐれば拒馬河畔に於て〇〇司令部に到り任務を終へて歸還の途上敵の銃砲彈熾烈なる爲班長養田軍曹以下は地隙を求めて下馬し暫く敵彈を避け情況を観察せんとしたが敵彈益々烈しく誰一人頭を上ぐる者もなかつた。附近は一帶の梨畑にて敵彈の爲梨の實が頂上にバラ／＼と落ちて來た。氏は懐に澤山梨を拾ひつゝ敵彈の何物たるかも知らぬげに平然たりしには一同驚嘆した。戦友はそんなに梨をどうするかと尋ねれば部隊へ歸らば戦友に分けてやると答へた。嗚呼大膽慧敏熱心而して果斷なる氏の行動は正に皇軍騎兵の特性を發揮し得て餘蘊がなかつた。而かも部



隊間に重要な情報を通報し作戦上得たる利益は莫大にして其功績たるや皇軍の華北戦史に牢記せらるべく其芳名は千載に薫るであらう。而して氏が出征當時誓へる如く聖戦の爲情氣もなく清き身命を君國に捧げ終つたが氏の英靈は萬古に生くる事が出来た。獨り皇國を擁護するのみならず又一家の守護神として其將來の多幸繁榮を加護し尙教へ子を通じ一粒萬倍の忠君愛國者を造り出すであらう。

氏は即日騎兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 白石留吉

氏は茨城縣筑波郡烏名村の人にして大正四年一月十五日生れで父は長次郎母はトリと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性剛健着實不實實行の士であり他面幼者に對する温情に富み特に兄の子を寵愛して居た。昭和五年三月郷里烏名小學校高等科を卒業後直に青年訓練所に入り昭和十年二月卒業尙家庭に在りて農業に従事して居つた。又右の五ヶ年間毎月一日十日二十日の三日間は團體農業の中堅となり活躍し部落青年團の爲百五十圓の基本金を作つた。蓋し上下の信頼愛敬を得た事は今更申す迄もあるまいと思ふ。

昭和十一年現役兵として歩兵第二聯隊へ入營同年二月二十八日以來數日間戒嚴地に在りて服務其後支那駐屯歩兵隊要員として派遣せられた。

昭和十二年七月七日北支事變勃發するや直に天津地方の警備に任じ東機局飛行場の警備天津塘沽間通信線修理班の警護及歩兵部隊の揚村通過の保護に任じ常に積極周到なる着意を以て克く其任務を遂行した。斯くて七月二十六日所屬大隊は

鄭坊を救護し後北平に前進し居留民保護の任務を受けて天津を出發し同日午後五時三十分北平廣安門の南方約千米に到着した。茲に於て冀察顧問が入城に關する交渉をなし通過差支なきを知り更に前進したる處俄然城兵より猛烈なる射撃を受けた。當時中隊長以下十八名は既に入城し高木中尉以下の中隊主力は自動車故障の爲入城不可能となり中隊は城内外に分斷せられた。當時氏は城外部隊に屬し本戰團に参加したが戰團終了後此門外部隊は一時某兵團長の隸下に入り二十七日午



前三時豊臺に到着し直に南苑攻撃の爲搜索據點を占領すべき兵團命令を受領した。茲に於て氏の所屬隊は南苑西方約六百米に在る陳留莊に於て南苑攻撃の準備に着手した。愈々南苑攻撃を開始するや氏は第一線小隊第二分隊輕機關銃射手として常に敏活勇敢に奮闘した。即ち中隊が(イ)の監視部隊より不意に射撃を受くるや命令一下頗る機敏正確なる射撃に依り忽ち之を撃退し續いて分隊の最先頭を急進し(ロ)の掩蓋陣地に對し側方より之を射撃し同所より退却中の敵二名を射殺し以て緒戦に於ける中隊志氣を大に發揚した。次で攻撃前進中(ハ)(ニ)の敵より猛射を受け剩へ其後方陣地より時

★迫撃砲の砲撃を受け前進困難となつた。此時氏は戦友と共に敵彈雨飛の中を物ともせず匍匐前進し又高梁を利用して敵の敵は我が中隊に向ひ猛射を始めた。氏は此情況を目撃するや獨斷左方高地を占位し機を失せず之を猛射し以て所屬中隊をして(ハ)(ニ)火點を奪取せしめた。然るに惜むべし此際(ホ)火點より猛射中の一弾は氏の左乳房より脊髓を貫通



氏は銃把を握り締めたるまゝ遂に壯烈なる戦死を遂げた。喧嘩局に直面して神色自若犠牲的精神の燃ゆる所水火箭辭せず身を挺して頑敵を屠り戦機を看破しては獨斷專行要所に轉位して偉大なる射撃威力を發揮して所屬中隊の戦捷獲得の途を拓いた。所屬中隊長以下の感謝感激と愛惜悲痛の情は如何許りであつたらうか。氏の如きは精神力の卓越に加ふるに克く近代戦の特色に通曉し携帯兵器の全威力を發揮せるもので洵に武功拔群軍人の魁鑑となすに足るものである。氏は即日歩兵伍長に任じ勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 白井政之助

氏は埼玉縣北足立郡大宮町の人にして父を源四郎母をけさと云ひ明治四十四年一月二十七日を以て生れ未だ獨身であつた。大正十四年三月大宮尋常高等小學校を経て浦和中學校に入學昭和五年三月同校を卒業し直に日本齒科醫學專門學校に入學同九年三月同校を卒業同年五月内務大臣より齒科醫師免許證を受け郷里蓮見齒科醫院に勤務した。人となり温容寛恕沈着にして而かも剛毅であつた。柔道は二段の技を持ち浦和中學校在學當時は柔道部の主將として活躍したのであつた。昭和十年一月現役兵として東京歩兵聯隊に入營同十一年三月滿洲國警備のため渡滿し翌十二年二月滿期除隊となつた。昭和十二年八月支那事變の爲應召上等兵として勇躍北支方面の征途に就き九月二十四日より二十九日に亘る下社村附近の戦鬪に於ては双子山の天險に據れる頑敵の攻撃に方り勇猛果敢の攻撃を以て敵に多大なる損害を與へて之を擊退した。更に九月三十日より十月六日に亘る嶺縣附近の戦鬪に際しては小林部隊に屬し十月四日黎明嶺縣西北方隘路の攻撃並に下凹村部落の攻撃に於て第一線小隊第一分隊員として熾烈なる敵の銃砲火の下に拔群率先敵の堅固なる防禦工事を施せる陣地に

突入し奮戦力闘敵に大打撃を與へて擊退し又翌五日所屬中隊が嶺縣外城西北角部落を攻撃せる場合に於ては困難なる狀況下に銳意分隊長を輔佐し勇猛果敢に行動し戦友を激勵しつゝ攻撃陣地の増強に力め六日中隊が薄暮を期して愈々攻撃を斷



氏は戦死の日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

行するや圍壁銃眼より飛來する敵の彈丸激烈を極めたるも氏は勇猛脱兎の如く攻撃前進し遂に敵陣地に突入せしが其際地上に敷設しありし敵の手榴彈により顔面兩前膊に破片創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

氏や練達深慮の士前途洋々刮目望を囑せしに悼しいかな奮戦力闘遂に北支の野に華と散らしめんとは。然りと雖も氏が毎戦身を挺して戦友を激勵し殊に其最期に於けるや電光石火の勢ひを以て敵陣突入に魁けし以て中隊の戦果に甚大の寄與を作す一死の榮其拔群の功績と共に千載の下青史に光輝を放つものと謂ふべし。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 森島福樹

氏は栃木縣安蘇郡三好村の人にして大正四年十一月二十三日生れ父を連次郎母をトミと云ひ氏は未だ獨身であつた。性温厚篤實にして父母に仕へて至孝弟妹に對しては慈愛を加へ交友亦極めて圓滿であつた。昭和五年三月三好小學校高等科



を卒業し昭和十一年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊へ入營同年二月下旬より三月上旬迄戒嚴に關する勤務に服し同年七月歩兵一等兵に進級し同年十二月歩兵上等兵を以て歸休除隊となつた。在營間成績優秀にして銃劍術に於ては第二種徽章外賞状一回を射撃に於ては前後三回に亘り賞状を授與せられて居る。



支那事變起るや坂西部隊に召集せられ北支戦線に赴いた。九月中旬所屬隊は連日の猛追撃を實施せる後十八日北義安に據る頑敵を攻撃し翌十九日西義安に對する攻撃を準備した。其間氏は克く分隊長の掌握下に北義安の敵陣地を攻撃し勇敢に突入して之を奪取し至嚴なる警戒裡に一夜を明かし翌朝は卒先渡河して西義安の攻撃準備に活躍する等友軍の志氣作興に貢獻せる處大であつた。九月二十一日東釜山附近の追撃戦に於て所屬中隊は尖兵中隊となり所在の敵を驅逐しつゝ下柴口南側高地前に達するや突如該高地より敵の猛射を受けた。氏の所屬小隊は直に散開此敵を攻撃したが氏は常に身を挺して勇猛に前進し突撃號令に接するや敢然急峻なる高地を駆け登り率先敵陣に突入し之を撃退した。爾後之を追撃して妨上部落に進出せる所又もや敵の抵抗を受くるに至つたが氏は僅々敵百米に接近し正確なる射撃を以て敵を制壓し敵兵動搖の色あるを認むるや敢然之に突入して敵を撃退し以て中隊戰團を著しく有利に進展せしむるの動機を作為した。

九月二十一日所屬中隊は妨上を確保せる後更に前進し王谷莊堡の敵陣地に對し攻撃を準備した。氏は第一小隊第二分隊員として午後六時頃熾烈なる敵火を冒しつゝ渡河し逸早く對岸に據點を求め敵情監視並に至嚴なる警戒に任じた。翌二十

二日午前二時所屬中隊は大隊の右第一線となり王谷莊堡北側陣地に向ひ夜襲の爲行動を起すや忽ち敵の發見する處となり正面及側面より十字火を浴び死傷續出するに至つた。されど氏は毅然として騒がず一意敵陣地を目指して突進し正に渡渉を始めんとする一刹那敵彈左側方より飛來惜くも壯烈なる戦死を遂げた。だが氏の勇敢なる行動は全中隊の志氣を鼓舞し一舉敵陣地に突入の機運を醸成し二十二日正午過遂に王谷莊堡を占領するに至つた。

氏は元來濃厚篤實の人である而かも一度戰場に臨むや勇猛鬼神も避くる武勇を現はし不朽の軍功を樹てたのである。是れ寔に聖旨に副ひ奉る大勇者であつて天晴軍人の魁鑑たるものである。今や肉體は死すと雖も氏の英靈は更に清く尊き不滅の生命に生き祖國の礎となり又遺族の多幸を加護すべく又芳名は大和櫻と謳はるゝであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍工兵伍長勳八等功七級 森山 唯

氏は茨城縣鹿島郡波崎町の人にして大正元年十二月十二日生れ亡父を山崎與惣七亡母をきくと云ひ養父を源三郎養母をさきと云ひ妻ふくとの間に一子優を擧げた。資性温順にして孝心深く又兄弟に對する情義も篤かつた。大正八年四月波崎町小學校へ入學したが家庭の事情に依り尋常科をも卒業せずして退學し東京市の魚問屋に奉公し歸郷後は漁船の機關士として永年勤続して居つた。

昭和八年十二月水戸工兵大隊へ入營し翌九年六月一等兵に進級し次で陸軍工兵學校へ分遣せられ發動機の分解手入單簡なる修理及運轉法等に關し學校長より技術證明書を授けられ又翌十年十月歸休除隊に際しては工兵上等兵に進級し且善行



證書を授與せられた。歸郷後は入營前の業務に復歸したが昭和十二年九月通信大臣より沿岸丙種運轉士免狀を附與された。支那事變勃發するや野口部隊に應召し十月下旬勇躍江南戦線へ赴いた。斯くて十一月十一日乃至十九日の平湖附近の戦闘に参加し十二日下士官候補として金糸娘橋附近に於ける敵情地形を偵察して貴重なる報告を呈出し十三日より十八日まで吉字圩附近に於て數條のクリークに對し敵前渡河作業に従事し友軍の戦闘を著しく有利ならしめた。十二月十日及十一日の南京附近の戦闘に於ては十日南京城外敵主陣地攻撃に方り第一線歩兵隊に協力し鐵條網破壊班として常に歩兵と密接に連繫し熾烈なる敵の十字火を冒し勇敢に作業に従事し以て歩兵の攻撃を容易ならしめた。十一日拂曉我歩兵第一線が會家門西南方高地の線に前進したる際右前方五十米附近に不意に側防機關銃現はれ又前方に深さ四米の鐵條網ありて前方及左側方より猛烈なる銃砲火を受け第一線部隊は全く攻撃頓挫の状態となつた。見渡せば附近一帯は草地でなだらかな丘陵を成し敵の陣地は頗る地の利を占め動かば必殺の構へで流石死を恐れざる友軍も一時は敵機關銃の掃射に頭を上げ得なかつ



た。茲に於て氏の所屬小隊は前面の鐵條網破壊を命ぜられ氏外二名の戦友は班長の指揮に従ひ午前七時愈々決死的作業の爲出發し驟雨の如く射注ぐ敵彈下を鬼神の如く鐵條網に馳せ付け鐵條網前の戦車壕内に飛び込んだ。氏は戦友柳澤、高安等と共に鐵條網を一本二本と切り初めた友軍の掩護射撃もあつたが敵の銃砲弾は益々烈しく我決死破壊班に注がれた。鐵條網破壊完了！の大聲が響き渡る。續いて高安一等兵が突如小隊長殿！泰山がやられましたと悲痛の叫び聲が聞ゆる。友

軍歩兵は開突を容れず雪崩を打つて突入した。あゝ鐵條網は物の美事に突撃路が開設せられてあつたが哀れなるかな氏は鐵條網を固く握りしめたまゝ頭部に貫通銃創を受けて壯烈なる戦死を遂げて居た。戦友等は氏の遺骸を安全地に引き下ろしたが早や呼べども答へず悄然として悲憤の涙を注ぎかけた。土屋部隊長を初め通りかゝりし矢ヶ崎歩兵部隊の永井大尉も暗涙を浮かべ乍らおゝ立派々々ようやつて呉れたと口を極めて絶讃した。

嗚呼壯烈鬼神を哭かしむとは氏の行動であつた。萬死を期して虎穴に入り突撃歩兵の爲遂に突撃路を開設して護國の鬼と化した。其崇高なる犠牲的精神こそは皇國工兵の眞價を發揮して餘蘊なく天晴皇軍の精華であり軍人の龜鑑たるものである。其功績たるや南京攻略戦史に異彩を放ち其芳名は萬古に傳へられ其英靈や不滅に生き皇國を護り又一家一門を加護するや必然であらう。氏は實に軍人の本分たる忠節を全うし得たると同時に親先祖に大孝を申へ又皇國軍民に大いなる手本を示して呉れたと謂ふべきであらう。

氏は即日工兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 關口 春雄

氏は群馬縣勢多郡荒砥村の人にして明治四十三年二月十五日生で父を高之助母をふくと云ひ妻つねとの間に一子秀雄を擧げた資性濃厚にして義務心厚く業務に忠實であつた。大正十二年三月荒砥第二尋常小學校を卒業し昭和六年一月歩兵第十五聯隊へ入營翌七年二月滿洲派遣部隊に編入され哈爾濱綏化等の各地に於て討伐及警備に任じ昭和八年三月内地歸還後間もなく歸休除隊となり功を以て一時賜金百七十五圓を賜はつた。又在隊間歩兵上等兵に進級し除隊に際しては善行證書



を附與された。

支那事變勃發するや森田部隊に召集せられ勇躍北支戰線へ赴いた。内地出發及輸送間は諸勤務に従事し精勵努力克く大隊本部の業務を圓滑ならしめた。斯くて九月十三日及十四日に於ける永定河々畔の戰闘には第二大隊本部傳令として彈雨を冒し連絡に或は重要な命令通報報告の傳達に任じ或は大隊本部直接警戒に任ずる等敏速確實に其任務を遂行した。九月十五日及十六日に於ける拒馬河畔望海庄附近の戰闘に於ては大隊本部傳令として彈丸雨飛の間に第一線中隊及後方部隊との連絡に任じ適時適切に命令通報報告の傳達に任じ以て大隊戰闘指揮を極めて有利ならしめた。九月十七日平漢線東側地區西管頭附近の戰闘に於ては大隊給養意の如くなるざると逼迫せる狀況下に於て氏は本部傳令として克く困苦缺乏に堪え献身的の努力を以て補給の連絡に任じ以て大隊長の意圖を充足せしめた。當時一般戰場は到る處皇軍の猛追撃ならざるなく後方輜重は惡道の爲追及不可能の狀態なりし故各部隊が多少なりとも給養を補給し得ば既に大成功であつたのである。



九月十八日及十九日に於ける平漢線西側地區澤畔店附近の戰闘に於ては第二大隊本部傳令として參加した。所屬大隊は澤畔店の敵に對し其退路に迫り攻撃すべき企圖を以て迂回前進して午後一時澤畔店の東南端に進出した此時氏は大隊長より豫備隊たりし第六中隊を鐵道線路方向の敵を警戒しつゝ左第一線たる第七中隊の後方に進出すべき命令を傳達すべく命

ぜらるゝや勇躍他の二名の傳令と共に大隊本部を出發し無事傳達を終り大隊本部の歸還の途中午後一時三十分鐵道線路方向より督戰隊を有する約百五十名の敵は第六中隊に逆襲し來り其内約五十名は大隊本部位置に襲撃し來れるを目撃した。氏は直に大隊本部に急報し且他の傳令を指揮し率先機を失せず敵中に突入し白兵及手榴彈を以て勇猛果敢に奮闘し敵と格闘して數名を噓した。此時近距離より投擲したる敵の手榴彈に依り氏は頭部に爆創を受け遂に壯烈なる戰死を遂げた。

本場合に於ける傳令單獨の突入は實に大隊本部が累卵の危きに瀕し分秒を争ふ急迫な場面であつた。之に依り大隊本部は危急を免かれ又第六中隊は大隊命令に基き敵の逆襲を豫期して前進中之を邀撃して美事に殲滅するに至つた。

噫、氏は本來の使命を完全に遂行し得たるのみならず機宜に適する處置に依り友軍多數將兵の危急を救ひ得たのである。而かも之が爲氏は尊き犠牲となり大和櫻と散り果てた。寔に是れ忠君愛國の至誠より進る嵩高なる犠牲的精神の發露であつて一般軍人の龜鑑たるべきものである。氏の功績は皇軍戰史に輝き氏の芳名は千載に誦はるゝであらう。又氏の英靈は永世に生きて皇國を護ると共に愛子等の胸に深くも忠忠報國の志を刻み込み多幸の將來を加護し得るであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で破格にも勳七等に叙し青色桐葉章並功七章金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功六級 角田 義雄

氏は栃木縣那須郡佐久山町の人にして大正五年五月六日生れ父は寅次郎母はトヨと稱し一妹二弟を有し未だ獨身であつた。資性着實品行方正にして頭腦亦明敏昭和六年三月郷里佐久山小學校高等科を優秀なる成績を以て卒業した。卒業後は専ら家事農業を手傳ひ傍ら同町青年學校に入り精勵した。



十九歳の折現役を志願し昭和十一年一月歩兵第五十九聯隊へ入營し日夜軍務に精勵し昭和十二年七月下士官適任證書並に善行證書を附與せられ目出度除隊した。氏は在隊間前後二回に亘る聯隊特別射撃に於て各々優秀なる成績を挙げ時の聯隊長李王殿下より賞状を授與せられ又前後二回に亘る中隊銃劍術競技會に於ても成績優秀に付所屬中隊長より賞状を授與せられ其名譽を表彰された。是れ全く氏が至誠謹直に終始し且卓越せる武技の習熟の現はれであつた。

支那事變勃發するや昭和十二年八月十八日坂西部隊石原島隊に應召し欣然勇躍征途に就いた。斯くて九月十三日以降北支戰線に活躍する事になつたのである。



所屬部隊は檢借嶺に集結して永定河右岸地區を占領しある敵に對し攻撃を準備した。氏は九月十三日夜自ら志願して斥候長大橋少尉の指揮下に入り夜十二時月の入るを待ち密かに永定河を渡河し巧に敵の監視線の間隙より潛入し對岸敵陣地の狀況特に右側防火の位置等を偵察し更に深く進入して十萬分の一地圖上<sup>50</sup>附近の敵陣地の狀態及東莊北側墓地附近迄詳細なる偵察を終り午前四時迄に歸來報告した。就中敵退却の徴候を察知して所屬部隊の攻撃計畫確立に最も緊急且重要な資料を提供した。氏は其間終始熱心に斥候長を輔佐し進路方位の標定に或は敵の監視哨發見に或は側防火の偵察に任ずる等常に積極剛膽に行動し以て斥候長の任務達成を容易ならしめた。

翌十四日午前所屬中隊が主力に先ち強行渡河を敢行し以て左第一線として敵を攻撃するに方り氏は中隊の最左翼の第一線分隊長となり勇往邁進左側防火の間隙を巧に利用し敵前至近に近迫し克く部下を掌握しつゝ火力を最高度に發揚した。而して敵の動搖を發見するや敢然機を失せず敵陣地に突入し敵に多大なる損害を與へて之を潰走せしめた。

永定河畔の戰鬪に勝利を得たる所屬部隊は敵を西方に急追中南公田に於て我を拒止せんとする敵あるを發見し夜間之を攻撃するに決した。氏は克く部下を掌握し翌拂曉より第一に進出し敵の退路に迫りて猛射を加へ之に多大なる損害を與へた。之が爲敵部隊は大に動搖して敗退の止むなきに至り中隊の任務達成上至大なる貢獻となつた。

敗退せる敵は遂に拒馬河右岸地區の既設陣地に據り頑強なる抵抗を試みるに至つた。所屬部隊は揚家屯附近より北相附近に向ひ敵前渡河を敢行した。所屬中隊は左第一線として午後三時半頃彈雨を冒して渡河し敵岸に上陸し北相に向ひ攻撃した。此時氏は大橋小隊の右第一線分隊長として十字の敵火を冒し部下を激勵しつゝ敵前約百五十米に近迫し最高度に火力を發揚して敵に大損害を與へ友軍砲兵の集中火に引續く我擲彈筒火に膚接し敵動搖の徴候を認むるや小隊長に續行し分隊の先頭に立ちて疾風飛鳥の如く敵陣地に突入し其一角を奪取した。北相部落を奪取するや所屬大隊は其西側に兵力を集結した。其夜氏は敵前至近の位置に在りて下士官長として服務した。此地は所屬隊集結地より約二百米程離隔して居たが怪しき支那人一名の近接するを逸早く發見し之を刺殺した。間もなく南及北に異様の信號彈を發見せるが爲愈々嚴に監視中忽ち西南方より我に近迫する約四五百の敵部隊を發見し急射撃を以て之を本隊に報告すると共に部下の一名を速に歸還報告せしめ一時抵抗の後豫め示されたる經路を後退した。氏の剛膽沈着にして慧眼克く戰機に投合したる諸動作はやがて所屬大隊の配備を事前に完了せしめ美事に敵の企圖を挫折せしめた。

所屬部隊は九月二十一日夕以來大冊河右岸地區を占領し頑強に抵抗する敵に對し渡河攻撃を準備した。氏の中隊は同夜半主力に先ち敵前渡河をなし部隊主力の爲渡河點を確保すべき任務を以て勇躍彈雨を冒して前進午前二時二十分遂に對岸



に地歩を占め主力の渡河を掩護した。此時氏は第一線分隊長として大橋少尉の隷下に最前線過地際の小壕に進出し敵前百二十米左は王谷莊嶺西北角の側防火を右に其北方臺上の掩蓋銃座よりする銃火に依る十字火を浴びつゝ掩體を構築し且之に對戦した。戦闘は刻一刻熾烈となり死傷續出し哀れ大橋小隊は其大部を損傷せんとする慘狀下に於て氏は毅然として悲壯なる決意をなし益々部下を激勵し力戰苦闘を續行したが午前三時敵師の爲右肩部に貫通銃創を受けた。剛毅果敢なる氏は毫も之に屈せず戦友の纏帯手當を受けつゝ更に奮戦に努めた。憎くや又もや敵弾は左側胸に貫通銃創の重傷を與へ再び起つ能はざるに至るや後事を早乙女上等兵に託し陣地内に止りて纏帯を受けた。拂曉後中隊は一意敵陣地に肉薄し氏は壕内にありて衛生部員に收容せられた。爾後野戰病院に後送され療養中であつたが十月三日午前八時廿分終に落花の最期を遂げ四日夕陽の地平線に没する頃讀經と共に火葬せられた。噫氏の幼少よりの孝心は今や赫々たる武勳と共に大なる孝道を果し又極東平和の礎となり皇軍歩兵の眞髓と謳はれ一般軍人の龜鑑として名を竹帛に垂るゝに至つた。宜なるかな氏は即日歩兵伍長に進級し勳七等に叙し青色桐葉章並功六級金鷄勳章を賜はり破格の光榮に浴したるや。

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 須山茂雄

氏は岡山縣上房郡津川村の人にして大正二年六月十六日生れ父を龜治郎母をトラと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性温厚にして父母に孝に家業に精勵し事に當りては質實剛健進取の氣性に富み地方青年の模範として表彰狀に金一封を添へ本村青年團長より表彰せられた。昭和三年三月高梁中學校第三學年修業後家事の都合に依り退校し爾來家事に従事し青年團役員及び農業統計調査員に擧げられ村内公共事業に寄與する所甚大であつた。昭和九年一月現役兵として歩兵第九聯隊

に入營し同年四月滿洲國治安警備の爲滿洲へ派遣せられ功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり歩兵上等兵を以て歸休除隊となつた。

昭和十二年支那事變勃發するや赤柴部隊に召集せられ勇躍北支戰線へ出動した。八月中旬北支戰場に到着し末松部隊第一中隊輕機關銃手として靜海附近東邊庄の戰闘に参加するに至つたが氏は八月二十二日午前四時行動を起し所屬小隊内に



在りて接敵し大隊主力が攻撃を開始するや第一線小隊第五分隊員として前進し敵前數十米に進出した。敵弾は益々熾烈となり加ふるに浸水泥濘膝を没し行動極めて困難なる状態に於て氏は常に分隊長を輔佐し適切なる銃位置の場所を發見して之を報告し射撃準備に遺憾ならしめ射撃を開始するや正面の敵陣地に對し多大なる損害を與へ以て友軍の攻撃動作を容易ならしめた。然れども敵は極めて堅固なる陣地に據り且其兵力優勢にして友軍は頗る苦戦の状態であつた。氏は此難局に直面し益々沈着戦友を激勵しつゝ奮闘力戦中午後五時敵彈飛來不幸にして頭部に貫通銃創を受け茲に壯烈なる戦死を遂げ

た。然れども氏の勇敢にして正確機敏なる射撃に依り友軍は一晝夜の長きに亘り優勢なる敵を拒止して現攻撃陣地を確保するを得所屬部隊は翌二十三日午前七時半惡戰苦闘の後敵陣地を奪取するを得た。

凡そ逆境に處し堅忍持久し得るは極めて意思の鞏固なる者にして初めて可能性を有する。敵彈雨飛上官戦友左右に驚るゝ慘烈なる光景に毅然として勇戦奮闘し得るは一死報國の至誠横溢する者のみに出來得る事である。氏は幼時より之等の



良素質を有し軍隊教育によりて益々之を鍛練し實戦に臨み愈々其眞價を發揮せるもので眞に是れ皇軍歩兵の精華一般軍人の龜鑑たるものであつた。光輝ある戦勝を見ずして交戦の半ばに玉碎せるは返へす返へすも遺憾の極みであつたが併し其光輝ある戦勝は氏の尊き犠牲に依て購はれたと謂ふも敢て過言ではあるまい。氏の名は皇軍の北支戦史に牢記せられ獨り當時の將兵に感謝の涙を注がしむるに止らず幾千代かけて其芳名を譲はるべく又其英靈は護國の神一家の守護神として永世に生き皇國並に一家一門の繁榮を加護するであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 菅原春司

氏は山形縣鶴岡市日和町の人にして父を幸吉母をはると云ひ大正四年四月六日を以て生れ、未だ獨身にして父は既に歿し郷里には母及二妹が暮してゐる。資性寡言にして剛膽且敢爲の氣象に富んでゐたが反面非常に親切で情誼に篤かつた。昭和五年三月朝陽第三高等小學校を卒業したる後大工を修業すると同時に青年訓練所に入り之を卒業した。又他方柔道を修業し初段の免許状を受けてゐた。

昭和十一年一月山形歩兵聯隊に入營同五月北支駐屯歩兵聯隊に編入せられて天津に駐屯し七月十日一等兵に翌十二年三月上等兵に進級した。

同年七月蘆溝橋事件突發と共に安達部隊に屬し八日蘆溝橋北方敵陣地攻撃の際第一線小隊第三分隊にあつて勇敢に奮闘し殊に中隊は中央平坦地を前進した關係上正面及び城壁上より敵の猛烈なる十字火を受けたが氏は巧に地形地物を利用し

て勇敢機敏に行動し克く戦友を勵ましながら先頭に立ちて前進した。然るに突如左斜陣地に敵輕機關銃現出し猛烈に我を斜射し爲に小隊主力の前進は甚だ困難となつた。此時分隊の左翼にゐた氏は逸早く之を發見し獨斷此敵に對して急襲的射撃を加へて之を制壓し爲に小隊の前進容易となり攻撃大に進捗した。然るに偶々左方より飛來した一弾は不幸氏の左下肢を貫通した。然かし氏は毫も屈せず跛行しつつ尙前進を繼續した。敵は小隊の猛烈果敢なる攻撃によつて遂に動搖の色を

認むる様になつた。此様子を見て取つた小隊長は機を失せず突撃を令し氏は分隊長の突撃號令と共に負傷の身を以て勇敢にも突撃前進し敵前約十五米に達した時無念にも右腹部に首貫銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた時に午前六時であつた。

氏や義勇奉公の念に燃え一死を鴻毛の輕きに見勇戦奮闘終に今次事變の劈頭に於て壯烈蘆溝橋畔の華と散る痛惜何ぞ盡きん。

氏が豪膽果敢殊に其獨斷射撃を以て敵輕機關銃を制壓し小隊の戦闘を有利に導きたる機宜の行動は眞に拔群の功績にして其名と共に永く青史に輝かん。今や聖戦日と共に効を收め極東萬代和平の礎將に

成らんとす。氏の革靈亦護國の神として更に皇運を扶翼し遺族の幸福を守護するであらう。氏の戦死の日歩兵伍長に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。





陸軍騎兵伍長勳八等功七級 鈴木孝夫

氏は靜岡縣東駿東郡足柄村の人にして明治三十六年一月十四日生れ、父は榮母はヤスと云ひ妻ゑいとの間長男眞正と云ふ愛子がある。性慧敏進取の氣性に富み責任觀念亦旺盛であつた。大正四年三月足柄尋常小學校を卒業同年四月靜岡縣



立御殿場實業學校へ入學大正七年同校卒業大正十一年一月騎兵第十六聯隊へ入隊除隊後昭和二年埼玉縣北足立郡大宮町に居住し日本ゼネラルモーター會社の特約販賣店たる大宮町關東モーターズ埼玉商會に販賣員として勤務して居た。極めて精勤の結果其受持販賣割當高を突破する良成績を擧げ一九三七年度名譽販賣員として推賞された。

北支事變勃發するや九月一日應召高橋部隊に編入せられ九月十七日勇躍征途に就いた。氏は兵站自動車中隊第十四分隊操縦手として服務し十一月十日には山西省平定縣柏井驛附近の戰闘に参加した。

當日氏は中隊の先頭小隊の前方に出されたる警戒兵の分隊長となり前進中午前十一時三十分頃固船舖部落の西南端に達するや突如左側方の山頂の敵兵約三十名より急射撃を受けた。氏は獨斷此敵を攻撃するに決し搭乘せる貨車を後退せしめて家屋後方に入れ且速かに中隊主力に敵情を報告した。突嗟の間に勇敢なる決心と用意周到なる處置を講じ得たるは洵に騎兵科出身特に氏の人格力量の一端を現はし得たものと察せられる。實にや七名の寡兵を指揮し躍進又躍進午前十一時三十

五分敵前約二百米附近に達した。何ぞ夫れ意氣の壯烈な事であらうか。時しもあれ右側高地に潜伏せる敵兵より手榴彈を投げつけられ氏は兩下肢顔面に破片創を受け重傷を負ふた氏の無念や察するに餘りある。氏は應急手當を施され乗用車を以て平定野戰豫備病院に急送され手術に注射に手厚き治療を受けたが何分瓦斯が體內に浸透しありて遂に十一月十一日護國の神となつた。所屬小隊長は氏の亡き骸に取りすがり有難う御苦勞でした。すまなかつたと泣き崩れた。山西の山々は早や嚴しい氷の柱が屹立つ頃であつた雲山萬里の異境に勇敢にしていとしき部下を喪つた小隊長の心境も遺族へ宛てた信書の一端に現はれて一入哀れである。弔合戰の憤激奮戦は申す迄もない瞬く間に敵を壓倒して之を潰亂敗走せしめ彼等が後方擾亂の企圖を挫折せしめ唯一の兵站要路たる井陘、本定間の連絡線を確認する事を得た。氏は實に其尊き業石となつた。人生誰か死なからむ而かも悠久の天地に短き人生を靜觀せんか死所を得る事甚だ難い。氏は現世の生命は短かつたが克く死所を得て清く尊く永世の生命を與へられたものである。

功に依り即日騎兵伍長に任じ勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を授け賜つた。



## 上等兵以下兵の部

## 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 井田義雄

氏は群馬縣佐波郡宮郷村大字宮子の人にして父を幸太郎母をせいと稱し明治四十四年三月二十一日を以て生れ妻まつゑとの間に一子きよ江を擧げた。然れども此の一子の生涯は昭和十二年九月三十日であり其翌十月二十三日には實父幸太郎氏が逝去したのであつた。然かし此の吉凶兩報は共に氏の許に達せざる中に氏は戦死した次第で母並に夫人の胸中は實に推察に餘りあるものがある。氏は資性濃厚篤實大正六年四月宮郷尋常高等小學校に入り同十四年三月卒業次で佐波郡青年訓練所充用實業補習學校に入學昭和六年十二月優秀の成績を以て同校を卒業した。補修學校在學中は父母の手助けとして熱心農事に精勵し斯くて昭和七年一月現役兵として高崎歩兵第十五聯隊に入營し移滿洲事變に出動し歩兵一等兵に進み功に依り勳八等白色桐葉章を授けられ同八年十二月除隊再び農業に精勵して居たが支那事變勃發の爲同十二年八月應召森田部隊原田隊に屬せられ勇躍して北支方面の征途に就いた。

やがて同年九月十四日より十五日に亘る永定河附近の戦闘に初陣として參加した。當時氏は大隊の第一線中隊左小隊第一分隊にあつて十四日永定河を敵前渡河し對岸の敵を撃退して該地を確保し以て聯隊車輛部隊の渡河を掩護し翌十五日午後四時部隊主力に追及し宮村鎮附近の戦闘には豫備隊として又翌十六日望海庄附近の戦闘に拒馬河を渡河し引續き可西務の敵を攻撃すべき前衛大隊の豫備隊に屬し渡河點附近を確保し車輛部隊の渡河を掩護し十七日西官頭附近の戦闘に於ては南草店より西官頭の敵を攻撃し豪雨の裡敵の銃砲火を冒して遂に同地を占領し更に十八日より二十日に亘る深野店附近の

戦闘には豫備隊として參加し翌二十一日より二十四日に亘る保定附近の殘敵掃蕩に於ては氏の所屬中隊は部隊長直轄隊として行動しありしが二十三日午後八時二十分西高莊に露營中機關銃を有する敵約三十名夜襲し來り之を還撃して殆ど潰滅に陥らしめたのであつた。然るに該地東方約二十米にありし我が迫撃砲第三中隊が同じく敵奇襲を受け氏の隊は之を直に救投して之亦美事に敵を撃退した。



十月に入り石家莊元氏順德附近の戦闘に於ては又氏の所屬中隊は部隊長直轄隊として行動せしが十四日午後四時平漢線鎮内驛南方約二吉米鐵道線路に於て支度方面より東進中の敵約二〇〇名に對し西羊泉（鎮内驛西方約二吉米）附近を占領し部隊の前進を掩護すべき命を受け該地に至り翌十五日其の任を終へて所屬大隊に追及し敵を追撃して三十日には東部辛庄を占領した。

十一月二日より三日に亘る王庄附近の戦闘に於ては二日午後六時所屬中隊は王庄に突入し該地の東南入口を確保する事を命ぜられた。氏の小隊は此時南側入口を占領し陣地を構築して居たが三日午前四時三十分敵約一中隊は健氣にも奇襲して來た。氏の小隊は敵を近く引寄せ多大の損害を與へて之を撃退したが此時氏は極めて勇敢に奮闘し功績大なるものがあつた。續いて氏の中隊は大隊長松本少佐の指揮下に午後四時より徐庄附近の敵を攻撃し氏は左第一線小隊の散兵として攻撃前進したが徐庄西側及其南方地區よりする敵の銃砲弾は猛烈であつた。氏は躍進を續け敵の攻火を冒し敵前六百米に迫つた。此時氏は高野上等兵を長とする障礙物偵察の斥候を命ぜられ斥候長以下



勇躍前進敵火の中に仔細に偵察を遂げ殊に幸にも中隊の攻撃正面には敵の障碍物なき事を確め中隊長の決心及指揮に大なる貢献をなし其功績は抜群であつた。次で中隊が愈々突撃に移るや氏は分隊長と共に雨下する敵火を冒し獅子奮迅の勢を以て突撃したが將に敵陣に突入せんとする刹那不幸敵彈の爲右胸部に首貫銃創を蒙り彰徳衛生隊に收容されしも再び立つ能はず四日終に落花の最期を遂ぐるに至つた。

氏や實に北支上陸以來殆ど不眠不休克く危険を冒し困苦と缺乏に堪へ奮戦を続け殊に徐庄攻撃の際は勇敢機敏に障碍物偵察斥候として偉勳を奏し友軍快捷の因を作した事は赫々として永く皇軍戦史に輝くであらう。

噫、氏出征後愛兒生誕し又父君長逝す而かも氏之を知らずして壯烈華北の花と散る哀情何ぞ堪えん。

然れども氏の英靈は萬世に生き護國の神座に鎮まり必ずや皇國と愛兒の將來に力と慶福を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 石川 高 藏

氏は神奈川縣横浜市神奈川區子安の人にして父を七五郎母をヒロヨと云ひ大正五年九月十五日生れで未だ弱身であつた。昭和六年三月子安尋常高等小學校高等科を卒業後直に東京市麻布區中野町春澤裝飾店に勤め入營時に及んだ。性質温良孝心極めて厚く小學校を卒業するや親の負擔を減ずるために自ら進んで徒弟となり熱心忠實に勤務し店主同僚より厚く信用せられて居た。公休日には必ず父母の嗜好品を携へ自轉車にて歸宅し薪を割り風呂を焚き家事を手傳ひて父母の勞を減ずるを我喜となし又能く兄を敬ひ三弟を愛し戰場に於ても尙一家の寫眞を肌につけて奮闘し又戰場より父母に寄せたる

信書は是れ悉く一家を思ふ切々の孝悌に外ならずして眞に涙ぐまじきものがある。

昭和十二年三月一日現役兵として支那駐屯平田口部隊安達隊に編入せられしが七月七日支那第二十九軍の不法射撃に端を發し遂に驟然起つて暴支膺懲の聖戰となるや所屬部隊は七月八日遂に蘆溝橋附近の敵陣地を攻撃するに至つた。氏は右第一線小隊第二分隊に屬し終始勇敢に奮闘殊に所屬中隊は中央平坦地を攻撃前進せる關係上正面及城壁上よりする敵の猛



烈なる十字火を受けたが氏は巧に地物を利用して猛烈果敢なる攻撃を續行した。敵は小隊の猛攻撃により動搖を來すや機に乗せる分隊長の突撃號令と共に氏は率先勇敢に突入し奮戦格闘敵に多大なる損害を與へて之を潰走せしめた。次で中隊が猛烈なる戰場進撃に移るや腰を没する永定河を物ともせず又右岸より猛射する敵輕機銃にも何等の躊躇なく最も勇敢に率先迅速に右岸に進出したる友軍の志氣を鼓舞せる所甚大にして爲に小隊爾後の攻撃を有利ならしめた。次で三軒家附近の敵陣地を攻撃したが敵は家屋及壕を利用し頑強に抵抗し殊に右一軒家左側よりする敵輕機關銃の射撃は我に多大の苦痛を與へた。然かし氏は毫も之に屈せず益々沈着之に猛射を浴せ之を壓倒するの素因を與へたる膽勇は正に賞讃に値すべきものである。斯くて敵動搖の徴あるや分隊長の突撃號令と共に率先勇敢に突入し奮戦格闘之に多大の損害を與へ遂に西北方に潰走せしめた。爾後所屬隊は之を急追し橋梁西北方八〇〇米より平漢線に進出し陣地を確保して敵の逆襲に備へ以て行動の自由を確保するを得た。



七月二十八日西五里店附近敵陣地攻撃に方りては氏は會田小隊第二分隊に屬し西五里店西方の敵を攻撃し之に猛烈なる射撃を加へ遂に之を西北方に撃退したが大瓦窰より増援を得たる敵は逆襲に轉じ且輕機關銃二を有する約三十名の敵は郭庄子方面より小隊の右側背に出撃して來た。此時氏は冷靜沈着之に猛烈有効なる射撃を加へ遂に之を撃退せしめた。然るに午後二時を過ぐるや大瓦窰西側及蘆溝橋城内外よりする敵の砲撃は愈々猛烈を極め刺へ敵の小銃輕機關銃の射撃は急激の如く飛來した。之に對し小隊も亦全火力を以て之に猛射を加へ攻撃を續行したが攻撃意の如くならず戰鬪交綏状態に陥つた。午後六時頃漸く我が攻撃有利に進展し攻撃前進を開始した所攻撃前進中偶々救援の爲來着せる我戰車數臺は勇ましくも大瓦窰東北側に向ひ邁進して來た。此時氏は小隊長より戰車に對し敵自動火器の位置を通報する事を命ぜらるゝや敵彈雨下する中を物ともせず勇躍前進して之に連絡し以て戰車隊の協力を適切ならしめ小隊の戰鬪を著しく有利ならしめた。敵は小隊の猛攻撃と戰車の奮進とにより敗退したが大瓦窰東北端を占領せる敵は土壁を利用し尙頑強に抵抗して居た。

されど我猛攻撃により該敵も動搖するや分隊長の突入號令と共に率先勇敢に突入し奮戦格闘遂に之を撃滅した。然かし更に後方の敵は衆を待み銃眼を利用し尙頑強に抵抗し猛射を續けありしが氏は死角を利用して肉薄し遂に手榴彈戰を交へ幸に投擲功を奏し遂に之を撃退するを得た。續いて附近陣地の掃蕩に方り猛烈なる斜射側射を受け加ふるに大瓦窰西側よりする敵迫撃砲の砲撃猛烈にして前進困難を來たしたが氏は泰然自若として勇敢に攻撃前進中午後七時頃惜しくも右側胸部と右大腿部に砲弾破片創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

氏は毎戦終始決死的の奮闘を續け或は敵彈雨注の中を戰車隊との連絡に任じ或は數倍の敵に對し多大の損害を與へ以て小隊の戰鬪を有利ならしめたる加き眞に純忠精神皇軍歩兵の眞價を發揮せる者であり一般軍人の模範でもあつた。

其功績や皇軍戰史に録き其芳名や千古に誦はるべく又氏の尊き一生は一般軍民忠孝の鑑と讃へらるゝであらう。而して氏の英靈は不滅に生き必ずや皇國を護ると共に氏が生涯を通じて夢寐の間も忘るゝ事なかりし遺族の爲清き光と強き力を投げ與へるであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 石渡 初 夫

氏は愛知縣名古屋市中村區日比津町丸田の人にして亡父を嘉七母をしやうと言ひ明治四十四年十一月一日生れ、朝鮮郡山小學校高等科卒業後家事の都合で名古屋に歸り名古屋製函株式會社に入社し昭和七年現役として名古屋歩兵聯隊に入隊成績良好にして翌八年十一月歸休除隊となつた。

昭和十二年七月支那事變の爲應召片桐部隊に編入せられ松田隊に屬し擔伍長として出征し八月二十三日氏の所屬隊が敵前上陸決行の際敵自動火器の烈猛なる掃射に依り多數の傷者を續出したため松田隊長の命によつて氏は他の擔架兵と共に敵機關銃彈の雨飛する中を傷者を背負ひ或は抱き擔架所たる病院船當陽丸に收容し更に所屬隊と共に第一線に前進し傷者の收容に任じた。之れがため第一線部隊は其の攻撃を迅速に進捗せしむる事が出來た。引き續き翌二十四日に至るや戰鬪は愈々激烈となり敵銃砲彈の飛來益々猛烈となり砲創爆創により重傷者續出するの情況で氏等の擔架小隊は前夜來一睡の暇もなく第一線と擔架所との間を間斷なく往復して傷者の收容に努め當夜も徹宵傷者收容を續け隊長以下の疲勞は言語に絶するものがあつた。殊に氏は其夜午前一時倉永部隊の傷者收容の命を受けて同僚山本一等兵と共に尙ほ連續飛來する敵



砲弾の下を潜つて機敏に傷者を擔架に收容し當陽丸纒帶所に搬送して居たが當時敵は病院船當陽丸舷側附近に砲弾を集中し爲に氏は漸く傷者を搬送して當陽丸に達せんとした時不幸腹部に又山本一等兵は頭部に共に砲弾破片創を受けた。然し氏等其の重傷にも怯まず傷者を收容して治療を受けたが遂に惜しくも名譽の戦死を遂げたのである。

夫れ自ら第一線に立ち銃火劍戟を以て敵と抗闘するは武人の本懐とする所なり然れども第一線部隊死傷續出の激戦裡に於て身を敵弾の飛來に委し克く機を失せず速かに傷者を收容するが如きは頗る難事にして豪勇士に非ずんば容易に爲し得ざる所とす。

氏や一死以て此至難の任務に終始し战友の危急を救つて自ら敵彈に斃る。何ぞ其の悲壯なる。然かし氏が犠牲的奮闘に依り其死より救はれたる多數の勇士の存する事を思ふ時氏の犠牲が如何に尊く其



功績の如何に偉大なるか量り知るべからざるものがある。  
噫、氏や江南の華と散りしも其遺せし赫々たる偉功は千載に輝き其忠魂は不滅に生き皇國を守り又一家の守護神として遺族に祐を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 石原政直

氏は鳥取縣西伯郡米子市加茂兩三柳の人にして大正元年十二月二十九日生れ、父を直次郎亡母をかつのと云ひ妻カントの間に一女惠美子を擧げた。昭和二年角盤高等小學校を卒業して後家業に従事し同八年一月松江歩兵聯隊に入營滿洲警備



のため北滿の警備匪賊討伐に従ひ其の功を以て勳八等に叙せられ除隊したが昭和十二年七月支那事變勃發し應召福榮部隊に編入せられ北支方面の征途に就き直に獨流鎮附近の攻撃に参加した。此時氏は澤山大尉の指揮に屬し第二小隊第五分隊第六彈藥手として八月二十四日午後一時行動を起し前進又前進敵に近迫して彈雨の下克く渡河を敢行し遂に敵陣地の南端突角家屋の據點に向つて突撃した。此際氏は分隊長と共に勇敢に突撃し直に手榴彈を投じて抵抗を持續する殘敵を殺し更に分隊長と共に門扉を破壊して先頭に門内へ進入殘敵を射殺し或は手榴彈にて爆死せしむる等奮戦以て該據點家屋を占領した。次で左前方家屋上より狙撃を受くるや率先同家屋内に突入殘敵四名を捕獲拔群の功績を樹て爾後の掃蕩に於ても分隊長を輔け勇敢無比の奮闘を續けた。又九月三日より同九日に亘る東西子牙鎮附近の攻撃に於ては所屬隊は左縱隊に屬し敵の退路に迫り浪窩を占領して優勢なる大沿庄の敵と對戦することゝなつたが此間氏は分隊長と共に浪窩西南角陣地を占領して晝夜よく奮闘を續け六日には將校斥候に加り夕刻出發大沿庄の敵情地形偵察のため出水膝を没する惡路を辿り漸くに



して大治庄東北方約三百米の地點に達し斥候長は主力を同地點に駐屯警戒せしめ部下三名を率ひて敵陣地に潜行し偵察を行ふや氏は又其選に擇ばれ大膽沈着の行動を以て逐次搜索の結果を報告した上更に北方側防火器の位置を確かめる事を命ぜられたが單身大膽に敵前を潜行して其の位置を確認報告し茲に斥候長は重大なる任務を完了し主力の位置に後退せんとした時敵の察知する所となり忽ち猛射を受けたが直に準備せる擲彈筒を發射して敵を震撼せしめやがて敵と離脱することを得たのである。然るに此時不幸にも氏は敵彈の爲遂に壯烈なる戦死を遂げたのである。

氏や豪勇膽捷の如く義には北滿警備匪賊討伐の事に従ひ赫々たる武功を建て今次亦北支の戦線に立つて率先決死の行動を取へてし克く所命の重任を果たし奮戦力闘以て隊員の被害を僅少ならしめ敵情搜索により友軍爾後の對戦を最も有利に導きたる等不滅の偉勳は正に武人として範を後世に垂れたるものと謂ふべく英魂永く皇國を泰山の安きに置き同時に冥々の裡一族一家の前途をも守護するであらう。

氏は又兵馬倥傯の閑雁信に托して家業の状況を問ひ父君を慰藉する等情味滾々掬すべきものがあつた。  
嗚呼忠臣は孝子の門より出づと夫れ氏の謂ひか。

氏は即日歩兵上等兵に進められ次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 石井良一

氏は群馬縣北甘樂郡西牧村の人にして大正五年四月五日生れ、父を理吉母をりんと稱し氏は未だ獨身であつた。資性潛實にして忍耐力に富み寡黙にして一度決すれば果斷邁進の氣概を帯つて居つた。昭和六年三月西牧小學校高等科卒業在學

間部長となり克く學級内の統制を圖り學友の信望厚かつた。昭和九年三月西牧實業補習學校本科を修了し昭和十年三月同校高等一年を修了昭和十一年三月西牧青年學校本科卒業郷里の青年團幹事及青年團の副支部長を勤め聲望愈々高まつた。昭和十二年一月徴兵として高崎歩兵聯隊へ入營同年七月には一等兵を命ぜられた。支那事變勃發するや森田部隊へ編入せられ勇躍征途に就いた。出征に當り父の大酒を諫め又身を大切にし兄の身上を頼むと切なる願に父も快諾するや之にて何等の心残なし勇ましく働けますとの言葉を殘し別を告げた。氏の

家庭を思ふ心情や亦濃かなりと謂ふべきである。斯くて九月上旬戰場へ到着したが其間各種の勤務に服し精勵努力克く其任務を遂行した。



九月十二日より三日間は永定河畔辛莊附近の戦闘に於て小菅小隊下山分隊に屬し或は下士哨となり或は斥候となり敵前渡河の諸準備に貢獻せる所甚だ大であつた。九月十五、十六日の兩日は拒馬河畔東茨村附近の戦闘に於て所屬中隊は大隊の右側背掩護の任務を受け最右翼に位置した。氏は輕機關銃手として其第二小隊第二分隊に屬

して居つた。大隊は先づ戦車を以て敵陣地を擾亂し續いて歩兵部隊を以て當面の敵を撃破するの戦闘計畫を定め十五日午後四時之が支援部隊たりし聯隊砲及氏の所屬小隊は當面の敵に對し火蓋を切つた。果然敵亦之に應戦し彼我の銃砲火は刻々激烈となつて來た。午後四時三十分稍過ぎ我が輕裝甲車五臺は敵の十字火を受けつゝも爆音勇しく敵陣地を目指して奮進したが其先頭車が將に敵岸に達せんとする頃橋梁の一部を破壊せられ哀れや河中に墜落した。搭乗者の將校以下二名は



逸早く適陣地の死角に入つたが之に對し敵の一部は機を失せず逆襲して來たので此將兵の危機は尺寸の間に相迫つた。之を目撃せる氏は獨斷神速機敏に射撃位置を變換し逆襲中の敵に對し猛烈果敢なる射撃を以て之を撃退し友軍の將兵を累卵の危地より救出した。然れども氏も亦不幸此際敵彈の爲左腰部に貫通銃創を受け翌十六日惜くも高碑店の野戰病院に於て戰場の華と散つた。

噫、氏の戦況視察や慧敏其決心や電光の如く其獨斷專行たるや最も機宜に適して敏速果敢克く危地より將兵を救ひ出した。救出された將兵の感激は如何許りであつたらうか獨り其將兵と限らず當時の氏が崇高なる心理を深く味うならばそこに尊い武士道の光を認められるのだ。皇軍の將兵が渾然一體であればこそ戦勝が得られるのだ。單に二名の將兵を救出したのではない。氏の功績の偉大さは更に廣く深く味ふべきである。寔に是れ皇軍の精華であり不朽の忠勇美談として傳ふべきである。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 石井 正雄

氏は茨城縣久慈郡大子町の人にして大正五年五月十二日生れ、父を文作亡母をきんと云ひ未だ獨身であつた。性温良にして兩親及長上に對し極めて敬虔に同僚及幼者に對して亦友愛の心に富んで居つた。動作活潑機敏又諸事勤勉力行の士であつた。昭和五年三月大子小學校高等科第一學年修了後昭和八年四月大子町青年訓練所へ入所昭和十年三月同所を卒業した。氏は頭腦明敏にして小學校在學中は常に首班に列し訓練所に於ては模範生として賞状を與へられた。

昭和十二年一月現役兵として水戸歩兵聯隊へ入營し同年八月には一等兵に進級支那事變勃發するや石黒部隊に編入せられ勇躍北支戦線に赴いた。九月十四日及十五日の永定河々畔の戦闘に於ては所屬中隊は〇〇豫備隊となり其間側背の警戒に任じ氏は斥候或は連絡勤務に服し同月十七日松林店附近の戦闘に於ては氏の小隊は十六日夜同一部隊内の第八中隊及野砲兵隊と共に婁樂舖に宿營して居つたが十七日午前五時半敵歩兵約三百は宿營地の東南方より我宿營地を襲撃して來た。此際所屬小隊は諸隊に先ち同村東南端に展開し敵を撃退した。此間氏は輕機關銃手として力戰奮闘所屬小隊の戦闘を有利ならしめたるのみならず野砲隊を掩護して之を安全ならしめた。此日所屬中隊は史名莊に於て衛生隊の護衛に任じたが連日連夜泥濘地の通過河川の渡渉に疲れ且後方の補給絶へ路傍の甘露や粟に飢を凌げる状態なりしに拘らず氏は克く困苦缺乏に堪え常に率先死傷者の收容或は衛生隊の前進宿營間至嚴なる警戒勤務に服し以て中隊の任務遂行に貢献せる所甚だ大であつた。十月一日より十日に亘る間漳沱河々畔陳村附近の戦闘に於ては第一小隊第一分隊の機關銃手として參加した。所屬中隊は九日同河右岸陳村北高吉の敵情及同河川の偵察を命ぜられ河岸に達して徹宵之が偵察に従事した。翌十日最先頭の渡河部隊として漳沱河を徒渉し陳村附近の敵陣地に突入し更に戦果擴張の爲北高吉南高吉肅家陳の諸部落を攻撃して敵を撃攘し留村に前進し爾後の追撃を準備した。其間氏は常に勇敢機敏に行動し克く輕機の威力を發揚し中隊の任務達成に寄與する所多大であつた。十月十一日午後九時三十分頃郝村東北方に於ける敵襲に對する反撃並同夜中隊の實施せる元氏附近の夜襲に於ては輕機を左肩に擔ひ右手に短劍を振つて突入し又銃手を交代して小銃を執つて格闘する等獅子奮迅頑敵を撃破し偉大なる功績を樹てた。

十一月十日及十一日の大名附近の戦闘に於ては所屬中隊は平門を占領し部落内を掃蕩して完全に之を占領したが氏は輕機關銃手として輕機の全威力を發揮し敵に多大なる損害を與へ將に突入せんとする折柄土壁内の銃眼より猛射せる敵彈飛



來の爲情くも重傷を負ひ遂に壯烈なる戦死を遂げた。

氏は参戦以來一意上官の命に従ひ凡ゆる困苦を忍び凡ゆる險難を物ともせず克く輕機の威力を最大限に發揚して常に敵に多大なる損害を與へ之を震駭し以て突撃の動機を作爲し其突入に際しては率先勇敢に奮闘し遂に聖戦の尊き犠牲となつた。噫郷に在りては温良なる孝子であり軍に従いては精悍なる勇士であり皇軍戦勝の途を開きし事幾度か定に是れ皇軍精兵の面目躍如たるものがある。其功績や京漢掃蕩戦史に不滅の光彩を放ち其芳名は千載に誦はるゝであらう。而して氏の英靈や萬代に生き皇國を擁護するのみならず又遺族の將來を加護するや必然であらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 石井政明

氏は栃木縣那須郡鍋掛村大字鍋掛の人にして父を久五郎母をセイと言ひ大正四年八月九日を以て生れて未だ獨身であつた。資性温良にして孝心深く又よく弟妹をいたわり世話し青年の間に在つても信望頗る厚く模範的青年として一般村民よりも將來を囑望されて居た。大正十一年四月鍋掛尋常高等小學校に入學昭和五年三月二十三日同校卒業越えて六年四月鍋掛青年訓練所に入り同十年三月まで修學にいそしみ精勤賞を受くること前後二回に及び更に鍋掛村農業補習學校に入學同十年三月同校第二學年を修了し以上の期間家庭に在つて傍ら克く父母の手助けをして居つた。

斯くて昭和十一年一月現役兵として歩兵第五十九聯隊に入營翌十一年十二月一等兵に進級し翌十二年七月歸休除隊となつたが僅かに月餘にして支那事變の爲應召し坂西部隊に屬して北支征戰の壯途に上つた。

氏の初陣は昭和十二年九月十八日、十九日に亘る南北義安の攻略及渡河戦闘であつて當初十八日氏の所屬中隊は豫備隊となり喇叭手たる氏は大隊本部との傳令勤務に服し克く其任を果たし次で翌十九日渡河及渡河後に於ける攻撃前進間亦積極的に任務を遂行して優秀なる功績を挙げた。次いで九月二十一日東釜山附近追撃戦に當り氏の所屬中隊は尖兵中隊として前進し此時も氏は亦中隊指揮班傳令員として殊に下柴口南側無名高地の敵攻撃に際しては終始身を挺して猛烈なる敵砲



彈下に完全に其責務を果たし愈々中隊が突撃するや敢然として中隊長に従ひ突撃奮戦し更に追撃に移るや不撓の努力を以て各小隊との連絡を確保し以て中隊長の指揮を容易ならしめ更に王谷莊堡附近大冊河の戦闘に於ても右第一線たる中隊の指揮班員として二十一日午後六時より二十二日王谷莊堡占領に至るまで終始危険と困苦を冒し傳令の任を完うし殊に二十二日午前二時氏の中隊が大隊の右第一線中隊として王谷莊北側陣地向ひ陰曆十七日の月明を背に夜襲を實施したる際には敵彈の飛來愈々烈しく面を向くべくもあらざる修羅場に立つて指揮班員たる氏は小隊長に跟随し漸く突撃路の開闢せらるゝや小隊と共に勇躍敵陣に突入激戦奮闘遂に敵陣を奪取した。されど此時前方及側方よりの間斷なき敵射撃は猛烈を極め小隊兵力は逐次減殺せられ健存せる者十指を屈するに過ぎざる慘況に陥り而も敵は此間夜暗を利用し逆襲に轉せんとする狀況にて此時氏は敵情監視を命ぜられ飛彈雨の如く且つ屢々手榴彈の投擲を受くる裡に毅然として所命の任務に當り刻々敵情を報告し斯くて東天漸く白み彼我の識別容易となるや敵は一齊に銃砲火を浴せて來た此時所屬隊は突撃に轉じ氏も



又勇敢に突撃前進に移つたが敵の一弾は氏の頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げたのである。

抑も戦場に於ける傳令の任務は極めて重大にして其一言一句を誤り或は其機を失せんか戦闘遂行上重大なる結果を招來し之が爲此の任に當る者は責任觀念旺盛にして而かも勇敢頭腦良好の者を充てらるゝを例とす。氏が此重任に選ばれたるは如何に氏が適任にして信頼を受けて居たかを察知し得る次第である。果せるかな氏は北支に出征以來幾多の戦闘に追撃に萬難を排して重要な命令傳達に連絡に一回の誤りもなく適時其任を果し殊に王谷莊北側敵陣地奪取後猛火の中に毅然として敵陣に驚るゝ迄自己の任務たる敵情監視を續けし事は如何に氏の責任觀念旺盛にして勇敢なるかを知るべきである。今や前途尙長き聖戦に此の如き勇士を喪失せし事は誠に惜みても尙餘りある次第である。

氏の中隊長荒木大尉も其の死を哀悼し實父久五郎氏に一書を寄せて氏が大功を激賞し且つ最期の狀を續して曰はく『石井君は此の突撃に於て勇敢に前進せられたるも不幸敵前に於て側方よりする敵の機關銃弾の爲に頭部に貫通銃創を受け倒れられ候其の際かすかに「家の方に宜しく云つて下さい」とのみ申し「天皇陛下萬歳」を唱へつゝ午前六時絶命致され候誠に身を以て盡忠報國の赤誠を示され護國の鬼と化せられ候事武人として名譽之に過ぎじと存じ候も御遺族御一同様の御愁傷如何ばかりかと御慰め申上べき言葉も知らざる有様に候云々』と。噫忠孝兩全氏の英靈や永く護國の神座に鎮まり必ずや祐を皇國と遺族の前途に致すであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜つた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岩 瀬 政 雄

氏は北海道石狩國石狩町大字樽川村北八線の人にして亡父を儀平亡母をタカノと云ひ後岩瀬家を嗣ぎ妻ムラとの間に一男を擧ぐ。明治三十四年四月二十八日の生れ。大正五年三月廿日石狩國當別尋常高等小學校を卒業し大正十年現役兵として歩兵聯隊に入營し滿期退營の後石狩町樽川村青年學校後授會幹事或は石狩町樽川農事實行組理事其他の公職に就いて居たが支那事變の爲昭和十二年八月應召中支方面の征途に上つた。斯くて十月二十六日には計良部隊第二小隊第一分隊員として張家宅附近の攻撃に参加し翌二十七日張家宅及江灣鎮の攻撃には羽田隊長の指揮下に拂曉下土斥候の一員として張家宅附近一帯の敵情搜索に派遣されしが斥候長以下此時とばかり決死潜行敵陣近く迫り情況偵察中忽ち塹壕に據れる數名の敵と衝突し斥候長以下全部突入猛烈なる白兵戦となり氏は勇猛果敢に奮戦敵を刺殺せしが偶々一弾氏の胸部を貫通し爲めに壯烈なる戦死を遂げたのである。



氏の郷關に在るや屢々推されて重要團體役員の公職に就き信望厚く出で、戦線に立つやかの斥候長として沈着果敢克く機宜に適せる奮闘を以て一死重任を完うしたるは平素修養の尋常にあらずるを物語るもの之に依つて敵の氣勢を挫折し遂に我部隊をして速に南晉橋を占領するに至らしめし素因を爲せしに想到すれば其の功績や誠に偉大拔群と謂ふべく其名は聖戦々史に輝くであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岩岡 千万枝

氏は長野縣南安曇郡三田村の人にして父を乙吉母をハルノと云ひ大正六年十月十三日生れにして未だ獨身であつた。資性誠實にして責任觀念頗る旺盛であつた。昭和七年三月堀金小學校高等科を卒業後自宅に在りて農業に従事しつゝ青年學



校へ通學し入營時に至つた。昭和十二年一月松本歩兵聯隊へ入營し下士官候補者に採用せられ同年七月一等兵に進級した。支那事變勃發するや遼山部隊に編入せられ勇躍北支戰線に赴いた。昭和十二年九月十六日所屬中隊は南泊に據る敵を攻撃した。氏は第一小隊長内山少尉の指揮下に左第一線小隊となり勇戦奮闘此敵を撃破し敗走の敵に多大の損害を與へた。翌十七日は午後七時より大石橋西北端の敵を攻撃し鎧袖一觸之を粉碎し同夜は西南方に對し警戒勤務に服した。翌十八日は中隊豫備隊となり攻撃前進し渾集を占領した。

斯くて九月廿一廿二日は大冊河々畔黃村附近の戰闘となつた。所屬中隊は大隊の左第一線中隊のなり氏は其左第一線小隊第二分隊に屬し廿一日午前六時行動を開始し午後十一時より攻撃を開始した。敵は堅固に數線陣地を占領し多數の掩蓋機關銃を持つて居た。午前零時十分攻撃前進に移るや氏は中小隊間の連絡兵に選拔され良く中隊長の命令を小隊長に傳達し中隊長の指揮を容易ならしめた。されど夜間の方向維持は通常困難とする所であるが當夜に於ける第一小隊も第一次突

入前に其前進方向を誤つた。氏は小池伍長と共に猛火を冒しつゝ最も敏活に之を連絡し之が誤謬を未然に防止し得たるは大なる功績と謂はねばならぬ。午前零時五十分第二線陣地に突撃を實施せんとするや氏は再び中隊長の命令傳達に任じた。即ち氏は敵の亂射亂撃を意に介せず一意任務遂行の爲勇敢に疾驅し小隊長を始め分隊長に迄徹底せしめた。爲に小隊長は部下分隊掌握上多大なる利益を得午前一時を期し第二線陣地に突撃を敢行するを得た。然るに敵前二十米に於て鐵條網に阻止せられ利へ敵の熾烈なる十字火を受け遺憾にも突撃は茲に一大頓挫を來たした。虎口の寸前に身動きも出來ぬ突撃隊の將兵の心や如何なりしか思ひやるだに同情を禁じ得ない。此時第一小隊長内山少尉は中隊長に對し情況報告と意見具中をなすべく決意した。氏は死を決して率先此重任を引受け中隊長に報告すべく疾走した。忽ち手榴彈の破片で兩腕に受傷した。豪膽不敵の氏は毫も之に屈せず中隊長の許に至り任務を果し再び小隊長の許に歸還し復命の一刹那憎むべき敵弾は氏の兩大腿部を貫通し茲に壯烈なる戦死を遂げた。さりながら其後部隊は敵の翼側を包圍し二十二日午前六時敵に殲滅的打撃を與へ黃村を占領するを得た。

氏や屢々指揮班の傳令として勇敢機敏よく戰機に投合して命令報告等の傳達に任じ常に積極的に任務を遂行した。特に黃村の夜襲に於ける決死の行動に至りては唯々其崇高なる赤誠に襟を正さざるを得ない。寔に是れ拔群の功績であり又皇軍の精華である。今や氏が雄姿に接する能はずと雖も忠勇武烈の英靈は萬世に生き芳名は皇國戰史と共に不朽に傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。